川柳塔

昭和四十六年一月八日 第三種郵便物認可
平成二年十一月二十五日 印刷
平成二年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻七六三号

日川協加盟

No. 763

十二月号

平成三年

新春おめでとう会

とき　1月15日（祝）午後1時開会

ところ　大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町26

（心斎橋「大丸」と「そごう」の間を東へ百米）

電話06（271）5230

あいさつ　主幹　西尾　栞

◎句会

兼題「羊」　黒川紫香選

「光」　奥田みつ子選

◎祝賀会

会費　7000円

川柳塔社恒例の新春行事ですので、同人・誌友を問わず、こぞってご参加ください。

特に今回は、今年中に同人となられた方の歓迎会も兼ねます。総あたりの福引もあり、各題の天地人には賞品を授与します。

川柳塔社

西尾　栞主幹に市民文化賞

西尾栞主幹は、多年にわたり川柳を通じて地域の文化振興に貢献したとして八尾市から「市民文化賞」が贈られ、十一月三日「文化の日」に表彰されました。まことに慶賀の至りで、心からお祝い申し上げるとともに、ご報告いたします。

川柳塔社

年賀広告募集

★個人　一口　二、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体　次の四種といたします。

①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円

②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼第二次原稿締切　12月7日までに事務所へ

★紙面の都合では寒中見舞（2月号）となります

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

愛媛90文芸大会

西尾　栞

第五回国民文化祭は、平成二年十月二十一日を中心に愛媛県下で開催された。

私は川柳第二選者として出席するために、十八日から大阪をJRで発ち、瀬戸大橋を渡って、まず高知市で泊った。翌十九日はこの頃ブームになっている四万十川を見て、土佐中村で泊った。翌二十日は、バスで宿毛を経て宇和島に出て、予讃線に乗り換え、三時頃内子町で途中下車した。駅頭で北海道の斎藤大雄さんとバッタリ出遭った。

タクシーで内子町の素巧館まで乗り、木蠟と白壁の町の淡々とした昼下りの坂道を、老夫婦がブラブラと歩いた。素巧館は、江戸時代の旅籠であったのが、今は展示場になっている。素巧館を出て歩いて行くと、家々の縁に柿や蜜柑をビニール袋に入れて百円均一で無人販売する仕舞屋の家があった。私たちは、四個入った熟柿をその縁に腰かけて旅人の心で食べた。

熟柿吸う内子の町の昼下り

松山へ五時過ぎに着き、ホテル平和へ入った。すでに顔見知りの柳人が、ロビーに待機していた。

前夜祭は午後六時から、にぎたつ会館で開催された。短詩文芸の短歌・俳句、川柳・連句の各会の長がそれぞれ立って挨拶し、選者を紹介した。二十一日は午前十時開会で午後四時まで、県民文化会館のサブホールで大会が開催されたが、三百名に垂んとする盛会であった。

閉会後、四時からが私ら六人の仕事であった。百二十句の中から文部大臣奨励賞ほか六賞を決めるのは、喧々囂々二時間半にわたっての難事業だった。

文部大臣奨励賞

花あかり人を許して帰る道　　愛媛県　井原　鶴子

国民文化祭実行委員会会長賞

帯の長さに思いひとつがまとまらぬ　　福岡県　野田　はつ

愛媛県知事賞

バンザイで動く日本にもうさせぬ　　福岡県　深堀　正平

第五回国民文化祭愛媛実行委員会賞

峰うちの情けを知った戻り道　　大阪府　津田　一江

愛媛県教育委員会教育長賞

喜びに沸く錦秋の二重橋　　愛媛県　宇都宮　章子

松山市長賞

森の出口で何を握ったかが勝負　　鳥取県　政岡　日枝子

松山市教育委員会教育長賞

心の裏見える眼鏡を母が持つ　　愛媛県　武田　紫陽

以上がやっと決まって、解散したのが午後七時であった。

翌二十二日は、文部大臣奨励賞ほかの表彰があり、十時四十分から、遠藤周作先生の記念講演で閉会となった。周作先生の講演の話は、またの機会に書きたいと思っている。

午後一時から市内吟行があったが参加せず、JRで大阪へ帰った。十八日から五日間、秋晴の上天気であったことが何よりであった。

町並の外れのビルは伊予銀行（バンク）　栞

木蠟の実演をする紺暖簾　〃　〃

町並の格子に吊るすコーヒ札　〃　〃

淡々と夕陽にそまる白い壁　〃　〃

座右の句

天と地のはざまにふわり生かされて　（緑之助）

私の句

愛枯れた夫婦が探す冬苺　園山　多賀子

川柳塔　十二月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　愛媛90文芸大会……西尾　栞…（1）
岩波新書礼賛……田中正坊…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…（4）
自選集……（34）
■川柳太平記(151)　川柳の群像　平松圭林……東野大八…（38）
■連載　柳籠裏三編研究（五丁～六丁）……（40）
美濃の狂俳なるもの……東野大八…（42）
水煙抄……黒川紫香選…（44）
秀句鑑賞
同人吟……春城武庫坊…（64）
水煙抄……桜井千秀…（65）
銀河系……河内天笑選…（66）
■女性コーナー　茴香の花……八木千代選…（70）

岩波新書礼賛

田中正坊

フリージア岩波新書読む少女

岩波新書が「黄版」であったころ、途中で表紙に光沢加工が施されるようになった。黄色といっても、きはだ色よりもマリーゴールドに近い明るい色で、それを手にした時、私はふとフリージアの花を思いうかべた。そしてその連想イメージとして、読書する少女を配したのである。句会の互選では一点しか入らなかったが、選者から賛辞をうけたことを記憶している。

ところで、この岩波新書が創刊されたのは一九三八（昭和十三）年秋、日中戦争のさなかで、「現代人の現代的教養」がそのキャッチフレーズであった。表紙が赤色で彩られていたので、「赤版」と称された。当時、学生であった私は、尾崎秀実の『現代支那論』、三木清の『哲学入門』、天野貞祐の『学生に与ふる書』などを、むさぼるようにして読んだのをおぼえている。あの戦争の暗い谷間における心の糧であった。

そして一九四九（昭和二十四）年、戦後の混迷期の中で「青版」岩波新書が発刊され、二十八年間にわたって一〇〇〇点を刊行して

■ひみこさろん「大事なもの」……信本博子・津守柳伸……(72)
路郎賞・川柳塔賞の風に吹かれて……田中透太……(73)
「特別」……筒井朴竜選……(74)
一路集「助ける」……奥山美智子選……(74)
「ラスト」……田中亜弥選……(75)
初歩教室「末席」……辻白渓子……(76)
■句集紹介　工藤甲吉百句集『北の貌』……橘高薫風……(78)
北川竹萌集『藁稭』……橘高薫風……(79)
本社十一月句会……(80)
各地柳壇（佳句地十選／森下愛論）……(84)
城北吟行記……松本ただし……(96)
柳界展望……(97)
十二月各地句会案内……(99)
■編集後記……(100)

座右の句

校門に聞く教育のむずかしさ　（本蔭棒）

私の句

白球を裁く其の手が白く冴え　長谷川司

「黄版」にバトンタッチした。さらに十一年を経て創刊五十年を機に、現在の新「赤版」となるわけで、私の〝自分史〟といってはいささかオーバーだが、ささやかな読書歴における岩波新書の比重は大きい。

今でも新刊案内を見て本屋に立ち寄り、気にいったテーマの二、三冊を買うのが楽しみだが、こうして求めた岩波新書が専用の書架に約五百冊、ほぼジャンル別に並んでいる。いわゆる雑学でこれといった専攻がなく、したがって専門書を持たない私にとっては、新書は何よりも重宝な情報源で、何かを少しくわしく調べたい時、その書架の前にたたずむと、たいていのニーズにこたえてくれる。

さて、あまりにほめすぎるのもどうかと思うので、クレームもつけておきたいが、あらゆるジャンルを網羅しながらも、短詩型文芸にはいたって冷たい。こと川柳にいたってはただ一点、山路閑古の『古川柳』だけ。ただし、大岡信の『折々のうた』八冊の中には、柳多留・武玉川の句も納められている。

おわりに、俳句・短歌に関する著作の中から、いろいろな意味で私たちにも参考になる新書を何冊か紹介しておきたい。

『わが戦後俳句史』（金子兜太）、『俳風動物記』（宮地伝三郎）、『芭蕉、旅へ』（上野洋三）、『歌い来しかた』（近藤芳美）、『女性俳句の世界』（上野さち子）。

川柳塔

西尾栞選

富田林市　板尾岳人

二十一世紀までは待てない離婚劇
学歴のない風が吹く十二月
恋人になって下さい冬の華
射手座から貰う情けは捨てられぬ
十二月ジングルベルも病んでいる
良い別れ秋の深まる頃がよい

和歌山県　寺田裕美

百姓に来年がある種袋
新米の茶粥を炊いてゆく見舞
辞典くる耳の奥まで虫の声
遠い国から男波女波がたどりつく
する事がないのか栗をむいている
間引かれて孤独にたえる大根よ

名古屋市　越村枯梢

万札の逃げ足迅し師走風
腰骨の不器用嘆う万歩計
ゴキブリの唄が夜更けの厨から
欠け徳利　貴様と俺は同期生
カタカナ語並べて世代に媚を売る
あの嘘がほんとになった霊柩車

今治市　矢野佳雲

古里と親は選べず秋桜
捨て石がなんぞの時を待っている
悲しみの行きつく果ては笑い出し
風少し入れよう話煮えつまり
飼馬桶　生年同じ子が運ぶ
好きなれば嫁くかと父も野暮でなし

松原市　谷垣史好

乗り越えてみれば酷暑もなつかしく
魂が外へ出たいと涕くのなり
裏表ないのは亀の子たわしだけ
イメージは海部見習士官殿
ポンポコリンを踊ってる間に日は沈む
豆腐の角に頭ぶつけて死ねるなら

岡山市　時末一灯

やり直したい人生も先が見え
妻臥して家しんしんと冷えてくる
不可解な微笑纏わりついたまま
おいそれと頷けぬこと軽く言う
可もなくて不可もなければ良き日とす
咳払いしても静けさまた戻り

熊本市　永田俊子

先生の答は卒業生が出す
余暇知らぬ父の軍手のひとり言
ロボットのひとつ覚えが侮れぬ
ロボットだけが知っている拳拳服膺
「君子曰く」が本屋の隅でくしゃみする
押さえても教育勅語が顔を出す

下関市　石川侃流洞

夜の爪切ったを亡父に言い出せぬ
酒が出てもう安心と思い込み
蠅取蜘蛛どうする蠅がもういない
銀めしという幸せが死語となる
赤トンボ　子供も減って早い冬
最悪の予感がめぐる気の弱り

鳥取県　新家完司

外に出て見ると世間はすでに冬
親友が鏡の役をしてくれる
ラムネ菓子ひとつ盗んだことがある
テレビジョンと同じ程度の阿呆になる
勝算があったら預金などはせぬ
仕立屋にたるんだ腹を褒められる

米子市　林荒介

D51と眠る公園のベンチ
地図の無いホテルでいのち干している
仮の世のわたくしが居て酒を酌む
父の樹よ一家五人で輪を作る
絵葉書が届く昨日も雨だった
乾電池いのちの限り働いた

和歌山市　西山幸

高野幽邃　死に急ぐまい遅れまい
いまゆるさねば今日までが負けになる
わたくしを貫くための黙秘権
葉書一枚の重さのかたきうち
なにゆえの朱色だろうか曼珠沙華
珈琲の苦さに借りがあるようだ

八尾市　宮西弥生

運命線出合いの秋を信じよう
竹踏んで出合いのひとを待っている
いつまでの生命よ　炎える秋の中
身のほどを知って狂わず生きている
修羅を舞う女ひとりで生きている
受け皿がいつも長女にやってくる

米子市　小西雄々

待つ人が来ると溶けだす角砂糖
聞こえない振りも時々して暮らす

パートに出る妻の靴でも磨こうか
拍手する中に油断のできぬ顔
読書した百のドラマに百の嘘
入歯まで失ってきた旅鞄

竹原市　小島蘭幸

キャプテンは長女でバレーボール見る
遺作展　珈琲の湯気たばこの煙
おとうさんもおかあさんもいる鶴を折る
雨よ風よ妻よひとつの火は消せぬ
山頭火も僕も夕日の中を歩く
めしがうまい秋刀魚がうまいので困る

島根県　堀江正朗

ありがとう足がふらつく祝い酒
妻やさし恐いと思うほど優し
竹を踏む心静めるひとときに
箸先に四季がおどっている早さ
勘のズレ地球のズレのせいにして
座禅組む闇の辛さは遠く置き

島根県　堀江芳子

アベックでいいなと闇は遠く置き
耐えねばと握れば握り返す夫
お赤飯届きむすめになった孫
ふっきれぬ悲しみ生きる詩がある
ご飯粒　夫のを拾うありがたさ
嬉しくていちばん先に夫に言う

笠岡市　松本忠三

アイウエオ順にしようかイロハ順
半分は嘘　半分はほんとです
おばあちゃんほんとに耳が遠いのか
台風の九月わたしの生まれ月
出来心そんな心は捨てなさい
外面で主人の権威保つとき

松原市　玉置重人

激辛のカレーを食べている強気
アリバイが欲しくて派手に踊ってる
私を縛る我が家の灯が温い
敬遠の風は知らないお人好し
数え唄　老眼鏡と補聴器と
変化球下手な夫を信じきる

松江市　舟木与根一

もくせいが散り命日の亡母に会う
聞き役は補聴器なくて気にならぬ
百歳が皺の芸術語り出す
地上げ屋も知事の認可は持っており
戦するいでたちでない菊人形
大臣の唇さむし秋深む

米子市　林瑞枝

燃ゆるものまだあり若い絵が描ける
望郷の枕に降りてくる祭り
草矢飛ばして私を呼んだのは夫か
北斗星めざして走れ恋一途
夢多きブランド物の好きな耳

友帰る欠伸ひとつを置き去りに

藤井寺市　吉岡美房

台風が手荒い秋を連れて来る
コスモスが揺れると愛がゆらぎだす
逢う毎に別れがつらい秋となる
笛吹けば走ってしまう自己嫌悪
国民は甘いものさというだるま
正義感　腹の調子が悪くなる

豊中市　安藤寿美子

面変りしても私の町はここ
じっくりといらちの夫についてゆく
それぞれの味を保っておでん鍋
薬にも毒にもならぬ友でいる
意地張っているじいさまはほっとこう
てっちりを囲み寿命の話する

西宮市　林はつ絵

試練試練わたしの影に言い聞かす
だまされた方でよかった眠られる
生きる日を淋しくないか世辞を言い
宅急便一度に故郷の秋になる
獅子舞のうしろの足が兄ちゃんだ
鳩笛の余韻　祭が遠くなる

富山市　舟渡杏花

肩のバネの強さの違いだったのか
失うもの失い欲の点となる
赤丸の暦へ挑んでいる余生
余生とや一会の傘と萩の道
余命表　首は迷わず縦に振る
十戒を破る悔いない美女ひとり

大阪市　西出楓楽

あげまんになりたい笑顔撒いてみる
陽を浴びるこころが風邪をひきそうで
バーゲンに走る情熱大切に
西瓜よりメロンが好きで御しやすし
敵を知り過ぎて同情してしまう
メモばかり頼ってすすむ物忘れ

倉敷市　小野克枝

生きている証へ踊れ十七字
帰ってはこないお金を二度も貸し
作り笑いの上手な仮面　夫婦です
チューブ入りのワサビが姑の気に入らず
六十の柄を探して風の街
あわれとも思う夫のテレビ狂

尼崎市　春城武庫坊

年相応の夢を燃やして秋に住む
懸命にすすき探してまた雨月
シルバーの夢ちさくなりちちろ鳴く
もう鬼になれぬと知った黄櫨紅葉
読めないが梵字に温い心見る
御大典に二度会ういのち大切に

高石市　浅野房子

人間ドックそろそろ部品交換を

台風の爪跡　夫婦喧嘩など
一応は仮説をたてている未練
一日に一度はうどん食う余生
恋心少し交じえて友殖える
初恋のむくろか萩が散っている

和歌山市　桜井千秀

掃き寄せた落ち葉を風に攫われる
剝き出しの牙は恐れることはない
手の平で丸めた程の幸に酔う
青い鳥探しつかれたハイヒール
幕おりてからのジョークが受けている
フィクションめいて日記が疎ましい

米子市　白根ふみ

手のひらにたしかな秋を載せている
夏痩せて回春の朝こぼれ萩
四季の風　本音がみえる道化師で
酔わないと言った盃から本音
ひねくれぬよう懐に褒めことば
里がえり命の重み抱きしめる

岡山県　嘉数兆代賀

稲田の上をゆっくり行くゴムボート（台風十九号）
八十の夢をカラスが来てつつく
過去語る人みな逝きて風や雲
掃いても掃いても心に溜まる枯れ落葉
おんな坂いくつ越えたららくになる

堺市　中川滋雀

くもる日も照る日も笑顔ひとつ持つ
口裏を合わせた嬉しい嘘も聞き
放し飼いされてるほどは金がない
ストレスを溜めこんでいる地獄耳
自画像の目線と妥協ばかりする

伊丹市　樫谷寿馬

鉢植えのリンゴの里も青森か
美しく寂しき人よバレリーナ
核家族　墓地も小さく買っておく
恥ずかしい事のみ多し秋の雲
ゴキブリをそっと叩いてやるいのち

廿日市市　林野甦光

和やかな言葉に出合うななかまど
控え目な男でいつも出遅れる
プッシュホン節くれ指をもたつかせ
二三日遊べば治ると医者が言う
握らせているのは私の冷たい手

鳥取県　松下たつみ

出世欲なくてパートをすすめられ
焦点が合うと燥ぐ望遠鏡
月も星も悩みを消すに静かすぎ
叱る役甘やかす役みな身内
靴のひも締めて孤独を振り払う

倉敷市　稲田豊作

刎頸の友あり此の世あたたかし
お隣は幸せそうだと気にしてる

先輩は仕事を教え遊びも教え
孫を叱る親は祖父母に叱られる
人生の最後を包む紙お襁褓　大阪市　江城修史

枯れ知らぬ男の話聞く疲れ
振り向かぬ男の背に明日がある
生きる汗　甘えは駄目よ腎不全
コスモスの波いとおしい亡母の忌よ
亡父の忌がひとつの秋を連れて来る　和歌山市　福本英子

亡夫在ます墓地へ残した箒あと
枠組を外す真相見たいから
エリートに譲ってからの広い道
地上げ屋の狙いを阻む鬼瓦
禁煙の誓いを孫とした不覚　豊中市　田中正坊

ベビーブルー娘が懐妊という矢文
太郎でも花子でもよし三人目
父の忌のめぐりめぐりて五十年　中国旅遊回顧

三彩の駿馬嘶く李杜の国
兵馬俑　敵は幾万ありとても　大阪市　津守柳伸

過ぎたるは何とかなりや秋の雨
ご機嫌の好い筈はない株下落
バースデー祝うハガキが議員から

惜しまれて閉ず花博の涙雨
自由主義　人さまざまな衣替え　堺市　高橋千万子

こるものがあって私の指弾む
人生の歩調ゆるめて趣味に生き
偶然の傑作はない趣味とても
求人欄　転職のくせとれぬなり
ひとり暮し時計あってもなかっても　倉吉市　奥谷弘朗

生き抜いた我慢のにじむいい笑顔
しなやかな指で必死に生きて来た
湯の町で逢うてはならぬ人に逢い
倉吉に打吹太鼓というが出来
老妻にかぼちゃ切るのを頼まれる　松江市　恒松叮紅

人並に師走を急ぐ無職の手
住所録整備　無職も忙しい
死亡欄に又載っている同い年
湯呑み一つ老後を看取る人探す
財テクの驕り海峡越えてゆく　松江市　柳楽鶴丸

良妻にも悪妻にもなる我が妻よ
女には弱い男にて候
妻の涙　印籠よりこわい
太っ腹でも胃袋がありません
読書の秋キリストの父探す

高槻市　川島　諷云児

いつか娘と別れる涙溜めておく
きっぱりと断る勇気ない手紙
家を捨て親に背いた付けがくる
思案している間に散った恋の花
逆光で見落としていた親の恩

鳥取県　土橋　螢

甲斐性なさまた割勘に責められる
女は強しレモン皮ごと食べている
美しいのは友だちの奥さんだ
浴衣着て冬が来るのを待っている
ふるさとの近くに雪の宿がある

神戸市　中村　ゆきを

銘水を求めてカレーに寄り添わせ
とんぼより算数　国語　理科を追い
常夜燈囲んで踊る曼珠沙華
知恵遅れだけが待ってる赤信号
一日中　電車が好きで知恵遅れ

寝屋川市　江口　度

鍵っ子を友に選んだはぐれ鳩
快心の作へふるえがとまらない
金持のぼんぼん釣れる戎橋
松茸は買えるが眠りまで買えぬ
毒舌家より無口な女に気をつける

島根県　栂　みどり

座布団もふっくら秋のお茶の間で
下駄の音ハーンの一齣　百年祭
虫の音にうつろいしらず時きざむ
九十年最後のキャンバス秋の色
釜入れの炎は一会の熱にもえ

島根県　西村　早苗

煙草の輪つくって冬がおだやかで
育てたい夢を隙間の風が消す
目盛りコップ置いて嫁はん台所
からみつく癖でしたたか酔うている
仮面つけてジングルベルの一杯屋

美禰市　安平次　弘道

例えばの話に弱い脛の傷
円周率　神のクイズはまだ解けず
積木くずし過保護のつけを払わされ
七人の敵にあくびをうつされる
年金があって気ままな二度の職

京都市　都倉　求芽

鐘をつく心取りもどす鐘を撞く
脳からの指示を心が選り分ける
一つや二つはゲリラもいそうな千羽鶴
経済制裁　台風までがのってくる
一日市長の笑顔で役所今日終る

松原市　佐藤　奏月

娘の荷出してどこまで冬景色
コスモスよ女は魔物だと申す
サーカスの馬も青空見たかろう

君のこと夢に見たよと憎い人
一円がまた溜りだす事務机　岡山市　川端柳子

ニューファッション人を選ぶと言うでない
ひたむきな愛を捧げて半返し
遠眼鏡大きい夢を追いつづけ
私だけは別と思えば生き易し
わたし私と思う半鐘鳴りつづけ　島根県　小砂白汀

石筍よ幾億年の闇に耐え
頂上で富士より五尺高くいる
ひょろひょろと咲いてコスモスへこたれぬ
冷凍魚離れがたきを引き裂かれ
東京へ東京砂漠へ蟻の列　寝屋川市　稲葉冬葉

いたわりが少し足りない感情線
漁り火が消えて相聞歌が残る
裾の乱れは逢いたさの歩幅かな
自分史を振り返るとき鬼になる
華甲とや我が人生を買い被る　諫早市　原田メイシュン

山深い里で日本が生き残り
深い仲の素振りも見せぬ娘にあわて
深呼吸それから叱る案をたて
宿の湯に戦友会はだぼら吹き
戦友会　古年兵様が注いでくれ　今治市　越智一水

坂の向うに昨日と違う景色見え
0歳の守りで指圧に金がいり
0歳が母をさがせば陽が沈む
信用は困らぬ時につくっとき
適齢期　自分が決めている女　松原市　小池しげお

香奠を半分にしてことづける
特別に大きい婿の貸衣裳
咳ばらい一つで意見また分かれ
添うてからも好きだと言うたことがない
妻にどう言おうと電車降りてから　大阪市　河井庸佑

知っていて黙って見てる眼が怖い
行間をしっかり読めと諭される
人に花持たせる心持つ余裕
好調なだけに気になる勇み足
ライバルがいるから取れた今日の椅子　玉野市　小谷仙山

猫と話して花と語りて老いの日々
秋深む仔猫に鈴を二つ付け
花八つ手隣の人は花粉症
ハイハイと軽い返事で重い腰
ない袖を振ったばかりに雨となり　東大阪市　森下愛論

たまたまに嬉しい日あり髭を剃り

いい浮世　年も忘れる恋をする
冬めいてそろそろモグラに似た暮らし
ネオン路地キャッチガールにしてやられ
佇んで萩へ語って秋ですね

尼崎市　春城年代

万葉を恋うて乱れる萩すすき
泣かされたことより泣いた不甲斐なさ
とても勝気な孫は私のそっくりさん
ゼロからの再出発に湯がたぎる
人生航路やがての港　靄の中

大田市　藤田軒太楼

新人類老いは新語に遠くいる
決断の鈍さ足踏みまだ続き
梵鐘の響き過疎の里に住み
珍客をとめて地元の味に呼び
ふん切りのつかず老いの独り言

西条市　片上明水

台風が過疎地と知らずまたも来る
稲刈って地蔵の背に陽が当り
新米の匂を嗅いでから洗う
尋ね人沙汰ないままで稲を刈る
菊好きの手足を縛る神無月

奈良市　天正千梢

器用貧乏二足のわらじはいている
私の歴史八十八ヶ所の納め札
金婚の御札八十八ヶ所打ち終えて
ちち母が恋しくなりぬ彼岸花
ほうし蟬なけば遍路は寺を恋い

鳥取市　両川洋々

花愛す人ならいくさせぬだろう
俺だけの世界　句帳と旅に発つ
浅知恵の僕を神様笑うなよ
水族館のイルカと迷い子遊んでた
愛犬にも劣る亭主を持て余す

宇部市　平田実男

口でする躾へ勝る親の背
嫌煙の眼煙草の輪がゆがむ
通知表　重たい足と軽い足
素人の鋏　木の私語聴こえない
席を譲られとまどいと嬉しさと

柳井市　弘津柳慶

コツコツと孫の名儀で貯金帳
鏡台のすみっこに妻の白髪染
年どすな老眼鏡を置き忘れ
生返事のままで電話切られたり
善人のような顔してセールスマン

姫路市　大原葉香

農機具が米のコストを高うする
飽食は人だけでないペット達
記事ニュース舞台は地球規模となり
順調な恢復医者にほめられる
車いすの予定表にある喫茶店

姫路市　丁坪サワ子

親よりも上行く娘へある安堵
海遊館人の数見て魚笑い
家訓まで嫁が作っている平和
常識をずらすと今の世が見える
留守番電話のれんに腕押しする様で

姫路市　中塚遊峰

憂き事は胸に納める姑の背な
親離れ子離れ出来ず息子と二人
腰痛は石橋叩きすぎてから
報われぬままに暮れ行く寡婦峠
バーゲンで買うて儲けたつもりで居

米子市　石垣花子

呱呱の声甘い爺様が出来そうだ
女手に甘くなかった五寸釘
台風一過あれから蟻も姿消し
今日の眉　三面鏡も嬉しそう
謎一つ祭囃子の中で解け

米子市　野坂なみ

歳時記が生む花便りありがとう
台風一過この秋晴れに如くものはなし
お嫁さんに来て欲しいのは次女の方
バスツアー一人歩きがしたくなる
天寿全う最後の吉報かもしれぬ

米子市　青戸田鶴

さわやかな法話ひと時洗われる
幸せな貌が揃うと鬼がくる
お祭もすんで寂しさましてくる
地上げ屋がきて下町が騒がしい
夢のない話ばかりになる日ぐれ

米子市　菅井とも子

記念樹の松に登ったことがある
もう一つあればみんなに行き渡る
小学校の師はまだ元気　会に呼ぶ
おばあちゃんの先生が未だ生きてはる
バイトならおばあちゃんちでしてあげよう

米子市　田中亜弥

吉報のうねりは母の懐に
三つ目の角をまがれと文の中
秋祭り暦に丸がつけてある
松が鳴く余程の強い風あたり
神の森　一枚の葉の見事さよ

米子市　政岡日枝子

絵の中の目線にじっと捕われる
彼岸花　父飄々として帰る
矢印が飛ぶから風よ吹かないで
地の底を流れて恩が返せない
民謡のような東北弁の駅

米子市　寺沢みど里

誰ひとり欠けても不味いにぎり飯
泣きごとを言えば鏡に笑われる
つぶやきに似ていたわしい蟹の泡

振りかえる癖がだんだん強くなる
防風林の松のこころに慣れ過ぎた　米子市　澤田千春

コスモスの祭りに踊る赤トンボ
ゼンマイも油断をすれば逆まわり
流れながら毬は出逢いを大切に
故郷でかるい壺抱く父の骨
わが影は骨身惜しまずよく動く　米子市　茂理高代

荒れる娘に教えてみます円舞曲
夢だった事にしておく古い傷
しがらみを切る大太鼓強く打つ
この続き書いてはならぬ私小説
助けてる積りの自分助けられ　米子市　光井玲子

蔦もみじ森それぞれの芸がある
北窓に反骨の風吹き溜まる
グルメにはとんと縁なき冬の箸
鬼の面一つ祭りで買ってくる
海鳴りは海神さまの雄叫びか　米子市　小村てい子

アニメーター劇画残して嫁にゆき
本音を世辞に変えぬ無策の傘を干す
いざこざで訛ってしまう事故現場
紬着る喜怒哀楽の朱い裏
そろりそろりとお山の大将ガタがくる

脈みゃくと熊野詣での蟻の列（杭全神社熊野権現八〇〇年祭）　大阪市　藤田頂留子

負けて勝つスベも覚えた寸の虫
いまふうに壁塗り替えて生きのびよ
秋本番街はイベントまっ盛り
軽い気で見すごして居た恐ろしさ　羽曳野市　榎本吐来

お隣と縒を戻したバスツアー
生臭い世事が余生に従いてくる
半生のツケ年金に覗かれる
ふる里に母はもういず蜜柑むく
これからがいざ本番という余生　西宮市　門谷たず子

仮の世をふたりで渡る丸木橋
自画像にうっすら紅をはいておく
秋の雨帰るきっしょを失わせ
野心もう捨てた余生の絵が丸い
仮にという話の罠にひっかかる　神戸市　山口美穂

働き蜂休むところがわからない
気がつけば五十の急な下り坂
名刺など不要で四十年勤め
鏡の中のわたしよ老いへ胸を張れ
雑木林で忘我のひととき飛行雲　羽曳野市　田中透太

上り坂段々幅が狭くなる

にえきらぬ男へ雨の日が続く
何を言う男盛りへガン告知
どの菊も大願成就　菊花展
出稼ぎの父には遠い祭笛

島根県　榊原秀子

絵手紙が届く高いたかい秋の空
決断を邪魔するものを持つ私
たのまれる不足たのまれない不足
予感的中　悪事千里の雨の午後
丁寧に書く画廊での記帳

大阪市　北勝美

台風も影をひそめた大師慈悲
蟠龍庭　霧降る中にある浄土
佇めば秀次自刃　柳の間
宿坊に肩の凝らない羅漢たち
何方にも話を合わす盛合せ

岡山県　小林妻子

女坂ばかりの余生とはいかぬ
伝統を継承祭り獅子が舞う
おとぼけの上手さも堂に入ってる
身に余る受賞とあとはきこえない
そもそもの火元は父の腹の中

岡山県　矢内寿恵子

幸せを呼ぶ仏の慈悲も借りながら
曼珠沙華朱い絆は血の絆
沙羅の樹の下なら来世語れそう
白雲悠々なんと下界のみにくさよ
美しく老いる希いの一行詩

守口市　羽原静歩

三病息災　神様にお燈明
ブランコもジャングルジムも冬めいて
幼稚園泣かしておいて告げに来る
風船を飛ばそう霊園の空高く
銀杏散る散る日ソは平和の窓を開け

奈良県　長谷川春蘭

目薬がほのかに沁みる今朝の秋
色即是空　色なき風の石仏
白露や葉先に光る詩ごころ
秋早し孤独の自由つかれ気味
哲学がおでんの湯気にのってくる

箕面市　坪田紅葉

敬老日　今年も届く赤いバラ
画きかけたほおずきならし悦にいる
ひたすらに生きて来た道　花の道
戦地よりもらった便り若き夢
豊か過ぎ心の中を秋の風

大阪市　大塚節子

父の老い自分にかえて見る眼鏡
亡母の帯好きな着物にふと似合い
恋のつらさ　はん女抱きしめ灯のゆれる
六病息災まあ根気よう付き合おう
今朝の鬱コーヒーたてる一人分

寝屋川市　岸野　あやめ

磯笛の苦しさ知らぬ旅の客
巻き返し謀った日から盟友となり
偶然という弁解が通らない
異次元の対話か孫の長電話
辻褄を合わすひと言多すぎた

宝塚市　丸山　よし津

桃の花　定年の無い主婦の指
人ふえても市制は引かぬ城下町
夜中から朝が始まる新聞屋
オルゴールの名曲聞いている受話器
急ぐのに情け知らずの券売機

唐津市　田口　虹汀

泣き言は言うな承知で蒔いた種
穏やかに見える水面の暗い底
未来永劫　水は上から下へゆく
薬草に凝って長生きするつもり
一汁一菜　登龍門の味噌の味

唐津市　久保　正敏

一車線わき目もふらぬ青い恋
溜息のルーツを女聞きたがり
逃げ腰の魚に餌を変えてみる
礼状を妻に見られたネックレス
八人目の敵ワープロを手なずける

唐津市　仁部　四郎

終点に定時に着いた終列車
台風の予報へ易者逆らわず
運命に泣くと女はほめられる
連休も定時に泣いた赤ん坊
定年の日にネクタイの赤を買い

唐津市　浜本　義美

来年は鹹かも知れぬ案山子たち
天国へゆく道のりが長すぎる
大正の父が着ている子のお古
十二単衣脱いで唐黍　火に焼かれ
ヌード喫茶　女も覗く好奇心

唐津市　筒井　朴竜

愛妻の特別好意甘んずる
遠来の招待客は上桟敷
老いの知恵いかす豊かな趣味の句座
貝塚へ末盧の海士の夢宿り
金婚の今日は特別　夫の酌

出雲市　吉岡　きみえ

碑の前に亡き師の笑みと対話する
山頂の霊気しっとり落葉ふむ
じんわりと秋が足もと這い上がる
たまさかに持った針にも拗ねられる
悪いのはわたし夫婦の溝埋まる

出雲市　園山　多賀子

耳学問一つ覚えの愚を通す
酔芙蓉本音は吐けぬ昼の月
座り胼胝　姑の城には母の夢

語尾少し濁して女帯を解く
秋深む温い言葉の稀少価値

出雲市　板垣夢酔

手の音に騙されやすい神と鯉
0番線　雪を被った汽車が着く
アコヤ貝　腹を痛めし子の出世
手紙ではまだるし電話味気なし
風船に針とはきつい怒りよう

出雲市　石倉芙佐子

ある夜の夢のあとさき風が舞う
花芙蓉こだわり捨てた顔をよせ
朱はすでに私に背く彩となる
人様の目にはふれない糸とんぼ
積んで崩して私の中のピラミッド

出雲市　小玉満江

どの風も上手に躱す術を知る
台風のエネルギーには舌を巻く
おだてられ毬がてんてん踊り出す
数だけはまちがえないよう百度石
辻ヶ花小絞付け下げお茶の席

島根県　松本文子

プッシュホン我れ電話になりはてし
もう一度逢いたい雪の降る頃に
カラオケも苦手黙って蟹つつく
帯を解く苦をとくわたしの寒い部屋
書き添えた文字に激しくなる眩暈

和歌山市　若宮武雄

雑草の遠慮知らずも生れつき
散らかした部屋で勝手にかく胡座
足跡は空し枯葉の身の軽さ
木枯しやペンも無性にひとを恋う
惚けてきた証拠みんなに労られ

和歌山市　内芝登志代

さわやかなメニューにしたい秋の皿
一生懸命やるから愉しい人生だ
ふる里の風にほのぼの浪花節
髪型が気に入らなくて不機嫌だ
じいちゃんの貧乏ゆすりも体操か

和歌山市　堀端三男

高野山にて（三句）

はたと止む饒舌一の橋渡る
恩讐を越えて仲良く並ぶ墓
無意識に口真似が出る法師蟬
余命表　次の世紀に手が届く
苦手克服それから眠り深くなる

和歌山市　細川稚代

孤り居てありったけの灯をともす
人声がほしくてテレビつけたまま
がむしゃらに押すから視界ゼロになり
花束で涙をかくす袋帯
鈍行で遠足の子と道づれに

和歌山市　山川克子

世に負けたわけではないが吹き溜まり
土壇場で閃いたのがこのポーズ
真直ぐに生きて飽いてはきませんか
峰に吹く風の強さを知らぬまま
引き潮が未練残してひいて行く

和歌山市　木本朱夏

雨しとど　ひとりの傘が重くなる
傷口を癒やす言葉をさがす森
木の葉一枚選んでくれる君が好き
好きなどと言わぬおとこのそれも良し
お供えはわたしの好きなものになる

和歌山市　福井桂香

愛しい人へ虹の一色だけ送る
逢える日は朱の帯上げを潜ませる
妬心かくしてかるく白粉を叩く
コーヒーの苦さと同じ話聞く
鼻に汗　勝ちほこってる訳でなし

和歌山市　田中輝子

許す気でいるのにながい弁解だ
もう一度潜ると視える空の青
しくじったなと思う砂糖を盛りすぎて
それからが多く玄関出られない
女にはおんなの戦　眉を引く

八尾市　内海幸生

大切な生命にくれたのは一錠
花博の跡を潰しているテレビ
シャッターが一拍遅れの拍手させ
事故を聴く保険がぎょうさん出るらしい
悔いのない一年でしたかあんさんも

八尾市　宮崎シマ子

一網打尽にされた甘さに寄った蟻
子の本音聞き出す親も本音なり
愛嬌のいい娘に似合う金木犀
夏風邪が尾を引いていて萩ゆれる
夫婦して詩人気取りの秋の山

八尾市　鷲見章

時雨傘　雫の儘を助手席に
バッカスと語る夜長の置炬燵
次の世も一緒と妻も酔うてくる
深海魚　地球最後の日を知らず
フルムーン妻には妻の常備薬

奈良県　田中紀美代

テンションを上げに初秋の夫婦旅
かくし事あるから夫婦おもしろい
なよなよと夫がみかんをむいてくれ
母と子の絆　同時に電話する
台本がないので好きに生きてます

岸和田市　福浦勝晴

かりそめの愛にはらはら銀杏散る
海昏れて海の男も感傷家
歩きながら髭摘む電気剃刀器

冥土までお供するわは首ったけ
カンナ燃ゆ誰を待つやら無人駅

岸和田市　原　さよ子

六十路にも着飾る夢はまだ捨てず
ちょいちょいと母は便利に使われる
信心の深さへ別途の寄付がくる
青空のトンボの数をうれしがり
もう一度と思てるうち花博終ってる

岸和田市　古野ひで

ひと呼吸おくの忘れた日の焦り
馥郁と黄菊白菊　亡夫の忌
縁あって四人の義母となりました
虫の音に今日を感謝の仕舞風呂
唯ひとつ笑顔はいいとほめた人

岸和田市　岩佐ダン吉

辻占いどうも寝ているようである
ヘルスメーター溜息と共に妻下りる
点々と切り株　涙のあとである
金を出せ命も出せと言うてくる
膝正し兆治のマウンド見ています

静岡県　薗田漠沓

ぶら下がるただそれだけの健康法
星空を好きな二人の散歩道
いい色のメダルは北京に攫われる
法律の線すれすれを許してる
結果だけ良ければ過程問われない

京都市　山本規不風

懺悔して菊去り虻の花八ツ手
相続税雑草の土地飛び上がる
鯛五千円はまち六千円水槽に立つ美人
不肖の子責める夫婦の過去喜劇
ホステスの縁談　博士社長様

西宮市　奥田みつ子

昼下がりエアポケットの時間帯
辞書を引くそうかそうかと言いながら
素晴らしい錯覚でした恋終る
祭笛　今年も息子帰らない
陽だまりに赤い首輪の犬と居る

大阪市　本間満津子

秋の風なにかの無駄がしたくなり
花にやさしい言葉かけてる意地っ張り
好きで好きで友達のまま居たい人
賽銭箱それはご無理と言いもせず
抱き合うてコスモス台風やりすごし

大阪市　神夏磯典子

もう十二月また十二月　独楽回る
一度許してしまえば流れ変り出す
雑然とした家だから愚痴が言え
ばあちゃんに何が出来ると言うのです
寒い日に出たゴキブリを殺せない

京都市　松川芳子

今一度私を飾るリボン選る

言い訳の花束抱いて子が帰る
綻びを繕う母の力布
手に持ってポスト素通りせぬように
とろとろと母の歩みも米寿かな

大阪市　黒田真砂

嬉しい事ばかり話して夫の酒
亡母の形見の紬が秋の肌に副う

甥結婚

双鶴がはばたく明日の青い空
黄昏て胸にたゆたう波の音
本当の理由は知らない月見草

鳥取県　林露杖

サルビアの緋色　夕陽に燃えにもえ
裏戸開け金木犀の香を貰う
一合の酒が零した裏話
キリストの奨め聴きつつ畠打つ
諦めと未練交々　夜の長し

静岡市　渥美弧秀

弔電を打つ友の訃に秋を病む
母父は極楽とやら風の盆
雨だれのリズム身に沁む回復期
十二月　愛を語れる貌でない
吾が余生詩と音楽が萌えに燃え

七尾市　松高秀峰

本心と違う言葉で褒める姑
ポケットベル鳴ってビールの泡が消え
次の次狙う外遊派手になり
勇退という名でうまく押し出され
ライバルも手の鳴る方へ尻尾振る

加古川市　吐田公一

理屈では判るが世間体もある
成金の歩に泣かされた王手飛車
ゆっくりと余生送れぬ父の馬車
一枚の歩が盤面を覆す
まともだと自認しているから困る

町田市　竹内紫錆

通り魔に刺され絶句の歯がきれい
誘いあり皆で歌えばこわくない
長便り三手の読みをしるす癖
自動ドア次のも元の部下が待ち
会議用手帳いまでは寺社めぐり

大和高田市　岸本豊平次

あの猛暑もう忘れさす今朝の冷え
家訓では立ち直れない三代目
まだ細い人もいたぞと振り返り
小児科は親を叱って子をあやし
口もとのえみは浄土へ持ってゆき（義母逝去）

西宮市　西口いわゑ

ベランダにわたし一人の空がある
思考力ゼロの時間もあってよし
客が来て祭り気分が盛りあがる
台風情報　花のいのちをふと思う

萩すすき夫と歩く山の秋　羽曳野市　吉川寿美

花束に百の言葉を喋らせる
思いなおして壊れた皿を接いでみる
出棺へ他人の泪はすぐ乾く
平凡に生きて悔いなし吾亦紅
十二月その場凌ぎの傘をさす　寝屋川市　柴田英壬子

胡蝶らん送ってくれる長電話
大正のロマン賃搗き慈善なべ
普賢院実家のような雰囲気で（高野山碑参拝）
ふるさとの新米老いの眸がうるみ
適当の貧しさ呆けを防いでる　高知県　赤川菊野

秋風へ詩人となって旅に出る
有料のホームどうやと電話ベル
億の金動く時世へ手内職
切り札にあの日のメモを置いてある
趣味一つパチンコだけと言う女　和泉市　西岡洛酔

ＡＢ型この人生で満足さ
満足の今日　二十五時もあって欲し
息災の朝餉に生きる音を聞く
妻のストレスに茶湯煮えたぎる
腹八分　神よ許せよこの幸を　呉市　槇田英詩

ロバのパン屋だみんな急いで出ておいで
ハッピーエンドで三途の川を渡りたい
雨降れば港は何故か眠くなる
細い指とこわれぬように握手する
千手仏あなた欲張りすぎないか　竹原市　森井菁居

今日があるのみ今日があるのみ火の男
したたかに生きる五十路のペアルック
老化かも知れぬおもろくない漫画
ファイトでは勝って身体がついて来ぬ
本物の鬼は微笑を絶やさない　寝屋川市　宮尾あいき

ぬかずけば胸にせつなし供花の百合
ありがたやニキビが一つ我が傘寿
十三時コオロギ恋はまだ早い
鴉たちそんなに私おかしいか
虫の音も閉め出すサッシ無風流　大阪市　冨上光代

ぶらり出て師走の風に会いにゆく
余生まだ知りたい事が有り余る
集印帖　余生広げる旅の空
舞扇ひとつ開くも要る修業
約束の合図待ってる月の暈　富田林市　片岡智恵子

天狗の鼻プロに厳しくへし折られ
お茶室で少し他人の影法師

土壇場で舵は無断で右にとり
茶柱へ破目をはずした日の不覚
服加減ぬるめで相手油断さす

鳥取市　小谷　美っ千

淋しさのわかってくれる秋の男
別れ傘　雫は三度切っておく
阿修羅から因幡の国へ里がえり
ヒラヒラと螺線階段下りてくる
危険とはいつも平行線にいる

寝屋川市　堀江　光子

探しあてれば萩に埋もれた小さい寺
ビー玉が見つかるまでは眠れぬ子
橋許り立派になって川細る
再会を願う人ある幸せよ
齢などは気にしてないと齢のこと

高知市　北川　竹萌

恥じらいの美学を貫う目の会釈
示唆あって里帰りする日をのばし
富士額幼い頃の伯母思う
グルメ族またも老舗の味を恋う
お隣と比べて何の得がある

倉吉市　野中　御前

多才より愚妻が好きと関白で
棚一つ吊れない父が指図する
ハンドルの遊びのことも教えられ
北国で孫によく似たコケシ買う
人形の赤毛のアンと二十年

堺市　柿花　紀美女

ささやかな食事へ切り売りカボチャ買う
自然保護　割箸論議までされる
情報禍コピーの山に埋もれてる
一人居の庭の石榴は爆ぜたまま
蟻の塔小さな命しかと抱き

黒石市　相馬　一花

標札を見てからやおら雨宿り
いつ死ぬか判らないから娑婆が好き
静脈を探るナースの甘い息
ニワトリも卵も知らぬ風見鶏
一人でも味方がほしい缶ビール

香川県　松村　迷観子

目に入れて痛くない子に使われる
勿体無いそんな言葉もありました
生き字引き九十歳の幕を引き
空の旅ゆとりとローン鉢合わせ
パート分だけがゆとりという生活

鳥取県　乾　喜与志

足立美術館を見学して（三句）

駐車するバスも多彩な美術館
木の皮を剝いで老松まで美術
わたくしも美術品だと言うておく
御即位の日にあやかって米寿の宴
小さな力士とても強くて面白い

女とは男にとって神である
蛸を干す島には青い空がある
慈善鍋　百円玉の寒い音
そのうちに電話しますと逃げられる
妻が最高　邪魔くさいからそうしとく

大阪市　桝本蕗児

煩悩は明日捨てる気で大晦日
年の暮　人恋う賀状の字を選ぶ
履歴書の端に微力とも書けず
遮断機で止められ犬も左右見る
花博が終って縁談持ってゆく

岡山県　岩道博友

人の輪に溶けて生甲斐感じとる
ちっぽけな力プラスして平和
三代目　猫の子三匹殖えました
人間二人　猫五匹の家族です
猫の子の父ちゃん母ちゃんとなる夫婦

岡山県　千原理瑛

子を寝かす母は魔法のうたを知る
冷やかな顔で助言に耳をかす
虫すかぬ男に一つある魅力
愚痴っぽくなって若さが逃げて行く
ある意味で裏切っている絆かも

豊中市　一瀬福一

妻と書くそれは大きな節目です

寝屋川市　平松かすみ

相槌は打つがテレビの世界です
知恵袋破れぬようにヘルメット
知恵袋　空にしてます露天風呂
もう一度いちばんしたい気まま泣き

大阪府　坂口公子

夢を抱く女に似合うたばね髪
粗野だけど夫の傘にある安堵
一睡も出来ぬと夢でぼやいてた
帽子あみだに巷を泳ぐ処世術
ポケットがひとつで足りぬ母の愛

岸和田市　芳地狸村

岸和田まつり（四句）

提灯のあかりに酔うているまつり
だんじりに少年の日の夢がある
まつりギャル法被姿に恋がある
だんじりと駆ける父ちゃん若かりき
台風一過室生の里に句碑光る

豊中市　吉田あずき

このままで蒸発したい送り道
送り出てからが本音の話なり
わが三時　好きな茶を淹れ好きな椅子
菊御紋　私にもあるパスポート
慰めの言葉はいらぬ曼珠沙華

大阪市　町田達子

此処までの出合いを思う百度石
吉と出たみくじ心の灯をたたむ

味覚の秋　芸術の秋が大好きで
河川敷に弾ける秋で年が無い
ドナウ川の調べにふっと浮く影よ

岡山県　荻野　鮫虎狼

極楽へ行く日は医者も掌を合わせ
起こされて検札されて又ねむり
他人様が働けと言う六十五
悪名が残って男地に還る
崖際を一生歩く父の地図

鳥取県　江原　とみお

太い樹につながっている胸算用
冬がまたやってきますネ地蔵さま
萩の道のデートとりとめなく終る
瓢箪を配ってあるくおじいさん
準備はいらぬ車座になればよい

海南市　三宅　保州

是々非々を貫く刀切れすぎる
仮の遺書見せて反応確かめる
天命を全うしたと言う他人
脚光を浴びて足元見失う
年金を限度に妥協する余生

岡山県　松本　元江

晴れぬ日へ愚痴ばっかりが寄って来る
遠来の客をもてなす秋景色
借りて来た猫がおどおど落ち着かぬ
今日の健康　明日の保障のない命

コーヒーに午後の話題が解けてゆく

大阪市　岡田　ふみ

商店街矢鱈ケーキ屋増えてきた
あげまんを自認している愚妻です
誰にでも相槌打って火傷する
時代劇の悪目明しは今も居る
うれしそうに夫の悪口言うてはる

西宮市　秋元　てる

目に浮かぶ故郷は何時も雪が降る
浮いて来た泡は金魚の愚痴だろう
浮いた噂一つない長女が不憫
ベランダいっぱいの花と一人のおばあちゃん
ミス日本けちをつけてるのも女

吹田市　栗谷　春子

夜着一枚　夏と秋とをふり分ける
秋霖のあとはからすが多過ぎる
それがしもおぬしも一献　月の下
なにごとか犬も赤飯いただいて
秋くればいやに明るい部屋となる

有田市　松井　かなめ

利口なのに口数多くうとまれる
なるほどと感心してる落書きに

京都博物館見学

閻魔大王どこで会ってもこわい顔
金剛力士像肉付きに思慕がわく
弥勒菩薩に私の終を訊ねたい

岡山県　二宗吟平

リゾートの夢わが町が沸いている
百年のルネッサン式幕を閉じ（小学校移転）
金木犀　私の窓にそっと咲く
ツキ悪い日の掛時計までもスト
寄付けちりさも寒む寒むと下座に居る

大阪市　塩田新一郎

下積みにされて親父の大茶碗
男は保護色女は警戒色が良い
五年後も生きる心算の苗を植え
門限があるとふられたのも知らず
居直り強盗かいな女房殿

十和田市　斉藤劦

騙されることも時には教師なり
台風が去ってお山へ向く鴉
名月に見とれて夫を見失い
農政の講義を覗く赤とんぼ
体育の日　津軽りんごの収穫日

倉吉市　淡路ゆり子

温もりを拾って歩く健康法
四十度　夫のやさしさ病んで知る
病ひとつ大事に遊ぶ秋日和
故郷を絵にする秋の祭笛
三界に家を無くした粗大ごみ

和歌山県　天満三千代

しきたりと時世へ妥協して生きる
病みつきの趣味に泣いたり笑ったり
蟬がらにも意地しがみつく風の中
電線の悲鳴台風くる知らせ
鯖ずしをつくる手元へ祭笛

弘前市　真喜内實

作業服息子のおさがり父が着る
秋と歩調あわせ片付けひとつずつ
ふと時計見たがる年の所為でしょ
夜泣き子は母の心が泣くかのよう
なんとなく仏のポーズ一人爺

岡山県　山本玉恵

美しい言葉あそびに秋の風
愛の深さに目を反らしては生きられぬ
狂女ひとり過去追うばかり手毬唄
仏性に背をあずけて花手桶
鉛筆の芯のまるさに迷わされ

伊丹市　山崎君子

虫の音よ今夜スターの声がない
雨宿り濡れた小犬の尾が触れる
先生の反面見せるベレー帽
先生を囲み女の顔に戻る
犬の子が留守をたのしくしてくれる

鳥取県　さえき　やえ

太陽に百の倖せもらう鍬
秋の花いちばん先に師のお墓
妹が恋のパズルを解きました

外で喋らぬ人が家中笑わせる
朝々の鏡がこわいことを言う

鳥取県　羽津川　公乃

顔ぶれも話題も同じ祭り客
肩書きを外してからの高い山
取り引きが悪くて笑顔貰えない
家計簿は引き算ばかり辛いなあ
無農薬野菜は虫が試食する

岡山市　井上　柳五郎

虐待とも見える幼児のコマーシャル
結果論悔む話の多過ぎる
金婚もあと僅かまだ貶す妻
交渉へ達者な口が指名され
この家もペレストロイカ嫁が来て

竹原市　信本　博子

生と死をさまよい神の御手に触れ
生きるっていいなァ友が増えて来る
額縁が生かしてくれたわたしの絵
思い出を一つ二つと生きる糧
する事がまだあるらしい生かされる

豊中市　辻川　慶子

ありがとうの嬉しい笑顔　母卒寿
菊日和　今日留袖の小半日
エヌジーを重ねて生きる六十路
ライバルとゆっくり歩く射程距離
秋の海　遊び疲れた絵を残す

大阪市　中西　兼治郎

神さまは冷酒ばかり呑まされる
おじいちゃん株の売り買い呆けてない
連敗に打順を変えて又敗れ
本心を日記にだけは書いておき
畳屋の臭いたたみやただよわせ

岡山県　花田　たけ志

風向きの異変に誤解が入り乱れ
夫婦してともかく四の字アレルギー
嫁姑のドラマに学ぶ共白髪
定年が内助の功と旅に出る
若者の非行注意も命がけ

大阪市　井上　白峰

生き字引コンピューターに席譲る
リリーフに出たB面のから回り
振り返りまた振り返るいろは坂
片意地な男が通るけもの道
手の内を読まれ反論宙に浮く

和歌山市　青枝　鉄治

何もかも懺悔のしたい丸い月
労りの言葉に揺らぐ寡婦の意地
程々に視察を終えて酌む地酒
左遷地の名水で炊く米の味
案山子にも役目果たした自負があり

大阪市　板東　倫子

警察不信ののろしを上げる釜ヶ崎

連鎖反応のように離婚が流行り出す
部分品としての永年勤続賞
爬虫類をペットに一人住む女
熱帯魚になりたい孫に同意する

鳥取県　谷口次男

マスコミもボツボツ派兵認め出し
リゾートと乱開発は双子なり
一粒のコメを礼賛しなくなり
広告のウソ八百が見抜けない
コオロギが鳴かなくなった秋の夜

高槻市　竹内花代子

ボーナスが三回出るので辞められぬ
六甲の水でもてなす法事の膳
国勢調査向いの留守を聴くチャイム
無視せよと言うても悲しいうさぎ小屋
今の内の旅へ躊躇の老母がいる

河内長野市　井上喜酔

台風は日本の秋が好きらしい
還暦の働き蜂に無い余生
あの時の聞けばよかったアドバイス
深い根が昔にあった横車
素晴らしい出合いへ山は夕焼ける

弘前市　村田善保

こんな筈でなかった筈が悔やまれる
したたかに生きた模索の影である
笛吹けど踊らぬ意地が風化する
忠告の言葉を一つ温める
金婚の夫婦茶碗がまろくなる

和泉市　岡井やすお

振り上げたこぶし開けば握手出来
メダル取れなくても帰る国があり
マイナスもプラスも見てた花ずきん
プライバシーちょっとのぞいてみたくなり

岸和田市　島崎冨志子

孫の手は魔法　肩こりほぐれてる
子の熱をママのひたいが知っている
犬好きがわかるか捨て犬ついてくる
老化する身体へ心は若く持つ

岸和田市　清野こう

扇風機洗うお礼を言いながら
便利さに馴れて不精な子に育ち
突然の友の訃報にうろたえる
頬ずりをした父さんのかたい髭

岸和田市　高須賀金太

待ち人が来ると女は美しい
折れた矢がいっぱい溜まるスラム街
外国のどこ歩いても日本人
過疎に住み人を見る目が澄んでいる

唐津市　山口高明

陽が昇る前にと磨く盆の墓
緋の袈裟に隠れて見えぬ欲の皮
一応は泣いて世間の眼にこたえ

豪快に笑いとばしてしらばくれ
唐津市　浜本ちよ

同病は姉妹のように案じ合い
他人は言う美容食など不必要
女丈夫に見られ近所に疎まれる
順番に逝くと限らぬから不安
出雲市　久谷まこと

血の通うときめき本のささやきか
月影にあせりの心追うて来る
悔い残す日々多くなり歳なげく
年毎に依怙地な習い固くなる
出雲市　園山良子

男運なかった寡婦の文学書
運動会　記録係もスニーカー
再会の島教え子も人の親
公認の広場で自分史繙こう
出雲市　金村青湖

母の忌へ日々に色づく葉鶏頭
蜩の中に進まぬ議事一つ
雑踏を押しわけて来る赤い羽根
耕耘機秋の匂いをふところに
出雲市　竹治ちかし

バランスが子の樹が伸びてから狂い
可愛さが余り飛べない鳥にする
親が居た頃の苦労は軽かった
女文字　歳まで当てる妻の勘
大阪市　坂本仙吉郎

思い出の凧あげ広場もビルが建つ
ああこれが探しあぐねた物だった
漫画本子よりも親が先に読み
無駄になる遺言状を書き直し
大阪市　寺井東雲

パレードで違った道を走るバス
行列を横目で手押し車行く
マネキンが着ると奉仕の値札つき
職人は変屈になり腕上がる
大阪市　松尾柳右子

も一人の私が止める腹八分
逞しい娘も来年は角かくし
ビル増えて師走の風がきつくなり
逆行の車知らせるネズミ捕り
大阪市　冨岡温子

神妙に叱咤待つ子にふと怯む
肚くくり人の情けに甘えない
はらはらと見守るだけの母でいる
定退の夫に合わす予定表
東大阪市　崎山美子

もめ事の種がつきない子供部屋
あの時とかわらぬ寺の花の色
もめる程勇気もなくて妥協する
ひきかえす勇気がなくてただ登る

鳥取県　土橋はるお

いい事が続くと飯がうまくなる
体育の日は稲刈りで忙しい
つまずいた石としばらく話し合う
ピンチ乗り切った土嚢を片づける

鳥取県　津村八重子

やぶ椿おごらぬ姿陽が落ちる
川柳でますます隣保　輪が円い
わが心とがめる今朝の花ごよみ
波高し白兎神話の因幡路よ

鳥取県　田村きみ子

気まぐれの雨です油断せぬように
美容院　油断だらけの女たち
またと言う言葉が僕をずるくする
外孫も十四歳の小豆めし

守口市　野呂右近

靴を買う履き切る自信ない足に
無為無策早や年末の声を聞く
振り向けば差引き0の人生か
句誌読めばまた残り火が燃えて来る

守口市　森川まさを

逆光の薄が波になる驕り
体育の日にとしよりは寺へ行き
しんがりに観光客乗る連絡船
台風の前に市場へ行くと言う

守口市　結城君子

排気ガス吸うた桔梗が病んでます
その昔　桔梗の柄も米に変え
それからは私を大事にした日記
突っ込めば仮りの話と逃げられる

島根県　北川民子

話せと言い黙れと言うた血圧計
七十歳落ちつきのない受診証
くちなしへ一日だけの雨が降り
呆けるなと愚痴にハッパかけられる

島根県　松本はるみ

何時までも息子は子供母の唄
コスモスよ貴方は恋人ありますか
戦争の好きな国から招待状
許されよ仏のための菊を剪る

島根県　藤原鈴江

ささえさんあなたのように生きたいね
孫成人やはり私の孫だった
老いならん昔ばなしが好きになり
もう少し濃くも薄くも刷いてみる

島根県　小田川智重子

ねえちゃんと呼ばれて返事をしてしまい
うちの人おじいさんとは憎らしい
満点はみんなの視線に触れるよう
集金のおじさんあなたは雨男

岡山県　直原七面山

徒然に空見上げれば凧が舞い

反省の手で鉢巻を締め直し
怒濤でさえも水夫に取っては子守唄
仕合せには縁無く今日まで生きて来て

岡山県　池田半仙

満点の掃除洗濯　妻の意地
いい香　金木犀が振り向かせ
川柳もゲートボールも無報酬
方便の嘘も上手であってこそ

米子市　金山夕子

B型の愚息に譲る女好き
勝算へ父の甘えは許されず
あらいやだ多才だなんて第三者
聞きたいことが沢山あった亡父の靴

米子市　川上より子

神戸の女子高校生逝く（二句）

母達よ早起きをして祈り給え
新しい星よ永遠に永遠に透明に輝け

家族家族と夜の時計は秒刻む
長らえる道の半ばか迷い坂

竹原市　岩本笑子

好奇心　コスモスが咲き恋が咲き
雨宿りひさしにハチの巣を見つけ
駆け出して行く嬉しさよ運動会
白髪でも好きよ夫の無精髭

竹原市　岡本清水

山は答える度胸を据えて進むべし
悲しみを渚の詩にいたわられ
いがみ合う浮き世離れりゃ倶会一処
有為転変笑ってならぬ皿洗い

茨木市　堀良江

声高になる友に声小さくする
お荷物になるの承知でついて行く
こんにちは　ただそれだけのお隣さん
カレー皿　今は二つになりました

茨木市　井上森生

台風に耐えた稲穂に祭り笛
走る泣く食べるむずかる孫達者

飛騨高山と下呂の旅

飛騨一揆偲ぶ陣屋は雨の中
朝市にきのこ赤かぶ唐がらし

倉吉市　渡辺菩句

モグラ叩きで怒りをぐっと押さえます
たったひとつのいのちや煙草やめなはれ
台風でも大物ならばゆっくりと来る
夢幻泡沫シャボン玉の一生

弘前市　小寺花峯

いい事があって娘を誘い出す
騒ぐだけ騒いで男は風になる
また一つ大きな壁でしわが増え
信じてはみたがあまりに重すぎる

松江市　竹内寿美子

秋の雨悲しみばかりつれてくる

バス停にバスが着かない秋の暮れ
嫌なことみなクリップで留めておく
友情というあわれみだってある

広島県　藤解静風

点滴の窓の向うにいわし雲
雲流るきみもわたしも置き去りに
案山子立つ田んぼの前のパチンコ屋
もう一人常連がいる昼の酒

神戸市　仲どんたく

雨雲に奥の奥ある警報下
夏去りぬ小便小僧の胴震い
壁取って一たす一を一とする
新婚の孫にひまごを予約する

貝塚市　行天千代

祭り笛だんじり好きの亡父なりし
お祭りの寄付も世間の義理で出す
欲しい雨でも降り過ぎては困る
孫帰らずつるべ落しの陽が暮れる

倉敷市　田辺灸六

自分しか見えない道に落し穴
駈けくらべ勝てない亀となり申す
ぬるま湯で美酒に酔うてる亀の首
ギッチラコ艫音が軋む夫婦舟

羽咋市　三宅ろ亭

これからは地球規模でもの言わん
定退後なおも尻っ尾振る癖で
中東に平和よ還れ開けゴマ
おりますと言ってなかなか出てこない

十和田市　阿部進

世話焼ける老いが憎まれ口たたき
お袋の味には手抜きなどはない
手洗いは何時もデパート借りてます
古希なれどロマンの夢を追いかける

河内長野市　植村喜代

通り雨静かな川が騒ぎ出す
ちょっぴり淋しい私の秋に逢いに行く
草取りの奉仕みな手も口も動き
忠実に稲を囲んで彼岸花

吹田市　茂見よ志子

株下がり友が浮かない顔で来る
統一へ本場の第九聞かせるね
骨粗そう症　世話になります鍼やいと
ごみ出し場　不協和音が漏れてくる

倉敷市　井上富子

追憶にふける月夜のハーモニカ
棒針であなたを縛る縄模様
不倫のしっぽがワイングラスからのぞく
はすかいの美女と乾杯したグラス

境港市　細木歳栄

アレルギーあわだち草の花ざかり
来世もまた此の人ととは果報者
花占い愛してるところで止めておく

石橋をたたいて渡らぬ自己嫌悪
福岡県　横地正好

幾億の細胞消えたか健忘症
事業家の不屈を聞いたクラス会
耳にしたメモは刑事のえんま帳
運動会　園児の裸体絵ともなる
藤井寺市　福元みのる

老人の月に尊厳死の話題
心だよ容姿学歴二の次よ
物探し時間がかかるこれも齢
海行かば丸腰ですよ自衛隊
仙台市　川村映輝

くどくどと言訳ゆるす気になれず
遺伝ではないがボケぬ保障がない
又一つ心配の種　娘の免許
敬老日　子が孫が来て老妻忙し
和歌山市　山田高夫

亡き母は今どのあたり秋彼岸
逆らわぬ妻に手綱を握られる
いろはから習い覚えた二度の職
ええとこでお逢いしました久しぶり
富田林市　松本今日子

熱いお茶恋しくなって赤トンボ
矢のように帰らなければ家事雑多
手間かけてあっという間の栗御飯
秋時雨　朝の灯りもつけたまま
京都市　渡辺圭坊

紫式部彩あざやかに秋の風
木犀の金の絨毯履む帰途
坊ちゃんを百度読んで漱石忌
蕪村忌や路地裏消えた京の街
川西市　野村静雄

きっかけへ黙って酒をついでやり
無礼講のあとがやっぱり気にかかり
肩書を外すとバーの寒いこと
九回の裏まで金を貯めている
川西市　松本ただし

肩当たる程度の距離を保つ人
老春を意識に入れて文字を選る
三叉路の風の硬さに思案する
負け犬はときどき後ろ確かめる
大阪市　渡部さと美

太極拳まさに悠久大河だな
ファジーと機械に少し人間味
手の内を少し見せてくる誘い
西宮市　瀬尾六郎太

額縁にそっくりはいる借景かな
どう見ても一枚うわ手がフセインか
エルサレム　メッカに通ずお遍路さん
箕面市　椎江清芳

年金も松茸一つ買って来る
目を閉じて神のお告げを待っている

一匹の目刺しで酔える父の酒

広島県　田村新造

戦友の訃報がつづき秋深む
泥臭い芝居で泣かす旅一座
八つから後は覚えぬ麻酔薬

大阪市　松永すすむ

祝膳　鯛の姿が揃ってる
傘寿すぎなお艶やかな舞姿
吊橋をわたれば迎えるひがん花

島根県　高野律子

世相等言わず我が道母のみち
堪忍の袋の中味見せぬ老母
隣組笑いながらの路地を掃く

岸和田市　三輪通彦

お互いに物言わぬ日の重い箸
嫌われていると気付かぬお節介
嘘と法螺交え話題を盛り上げる

大阪市　神保拓生

終幕の花博埋める傘の波
左遷されオフィスラブも小休止
年金を点滴にして長生きし

和歌山県　岩崎瑞穂

節約が死語となってる豊かな世
胃カメラに心の乱れ写される
渋滞へスイスイ進む万歩計

奈良市　米田恭昌

白昼夢束の間だけの亡母に会う
いか焼きの匂い雅楽の風に乗り
いつの日かプイと何処かへ出かけたい

和歌山県　西口忠雄

脱線に妻のレールが役に立ち
腹の児に蹴られて妻は自重する
平成の竹に馴染んだ足の裏

出雲市　小白金房子

助手席で妻の指図が邪魔をする
話題豊富ポケットベルがせき立てる
くされ縁耐えた女のすわりだこ

吹田市　井上照子

逆風になると絣の亡母の声
派手な色着るとルンルン出たくなる
躊躇いがトンネル出るとふと消える

大阪市　清水利武

人生の幕を胃癌が無理に引く
又の世も一緒になろうという握手
北鮮へ風穴開けにゆく政治

鳥取県　幸家單車

ロボットにお酒の味は教えまい
節高の父の指には銭が成る
其の垣根外すと平和な街になる

自選集

白衛隊派兵　銃後となる内地
忠臣は金も出します吠えもする
国栄え巷に親馬鹿親不孝
水引とネクタイ変えて今日多忙
紀南っ子に雨を描かせばみな斜め

大矢十郎

嬉しいと握手したがる癖があり
貸したつもりと貰ろたつもりの溝となり
欺しよいお方を選っている名簿
かがやいた頃のわたしが生ぐさい
連れ添うて九年足跡らしいもの

河内天笑

思案した挙句の道だ突っ走る
蟹赤くゆだり高嶺の貌になる
ふる里を恋う民謡を口ずさむ
寝たきりへ祭り聞かせる窓を開け
赤字線　赤字上積みして走る

小林由多香

時時は三人称で書く日記
爪切って奉公袋思い出す
この宮も何時しか進学　えんむすび
裸電球が似合う町角の地蔵様
私より上手に妻が釘を打つ

松川杜的

絵筆洗う私ひとりの秋にする
人間の弱さ泣いたり笑ったり
年輪の区切りキッチリして男
最後にはキット妻の手を握る
軽く病む妻とママゴトごっこする

岩本雀踊子

二十一世紀は男が酒を酌ぐだろう
十一月の次だけでない十二月
秋そぞろ淋しがりやは淋しがり
年寄りの元気はどうせカラ元気
待っていた工藤甲吉様嬉し

工藤甲吉

どうもどうもと本心のぞかせず
血圧がどうもと少し出不精に
どうもこうもあるかと弱み見せている
様づけで待たされる病院待合所
出席できぬ秋の暑さのもどかしき（潮花君七回忌）

正本水客

住み馴れた路地を幽霊出て行かぬ
ビールから酒へと秋が動き出す
恋をしたとこで止っている時計
大物に従いて窓口素通りし
晩秋へいのちが一つ落ちている

遠山可住

いたわられる程も老化はしていない
寝巻ぐらい妻のお古も使えます
狭い日本こんなにもあるゴルフ場
たこ焼で今夜のおかず済ましとく
うまい話に変だと思うのはゆとり

金井文秋

もしかしてあれは破局の雨の音
目を閉じて風の詭弁に聞き惚れる
ラストシーン余韻が胸の中で増え
道端の石の涙が見えますか
坊さんも死の諦観はしておらず

波多野五楽庵

改札を先頭切って出る路郎
何よりも梅志句評に載る一句
子の病い母親叱る生々庵
森繁の樒が届く春巣さん
句会への誘い白柳さんと旅

高杉鬼遊

義理一つ二つ果して暮れの街
来年の命を信じ山炎える
すり切れてそれでも回る母の独楽
おでんコトコトとても優しい顔になる
所詮はひとり枯葉舞う道踏みしめる

藤村〆女

人間をもう諦めてペット飼う
ヤジロベーやはり女の味方する
洒落一つ言えぬ男に喜寿が来る
まだ働かすつもりか竹を踏めと言う
女に黒着せて戦い好きな国

月原宵明

四つ辻の地蔵にだけは会釈する
金余り庶民は馬鹿にされたまま
坪の値が上がって暮し難くなり
良い話落ちていそうな年の暮れ
葉ぼたんが正月の顔まだ隠し

児島与呂志

野晒しにされて椿のみる夢は
枕すこしずれて傾く夢になる
透明な壺なら夢を隠せそう
銀河見ている　思えばながい夢といる
夢なれば実らぬままに散らすなり

八木千代

流れ解散させたら乗ろうひとり旅
決断は一つ線香尽きるまで
退き際の男の低い次元見た
音無しの構えハンドル手放して
ふるさとの海鳴り過去を消しにくる

野村太茂津

迂闊な事は言えない連れをつれている
仲のいい振りをカメラに拾わせる
薔薇の棘位はかくしている微笑
三三九度ああ友情も遠くなり
紀子様の様な女を知らないか

有働芳仙

年金暮らしメリハリのない日を送り
晴れやかな顔で出てくる美容院
雨読の日なのに昼寝をしてしまい
子は育つどんどん親を置いて行き
キャンペーンの甲斐なく今日も死者五人

野田素身郎

助け舟その名はバアチャンと申します
名が売れただけふところが寒くなり
お見それをし合うて嬉しい久し振り
生煮えの議題延々と睨み合い
捨て切れぬ欲ぶらさげてとぼとぼと

本田恵二朗

慰めは要らぬひとりにしてほしい
平気だと心いつわる言葉吐く
老夫婦　利息で行ける旅を撰る
錯覚をそろそろ呆けに間違われ
吊橋の風さわやかでも怖い

辻白渓子

宝くじあの世へゆく迄あきらめず
一年の早さに満で歳を言う
自分だけのこころにしまっておくゆとり
言葉の乱れ世相悪を助長
少年の無謀助ける術ないか

藤井明朗

平成富嶽彩魂自若百一寿
だあまってふたりはげましあっている
右折左折たのしく探しくたびれる
もて余す知恵の重さを知りました
追伸もありお願いを申し上げ

水粉千翁

一つずつ忘れることも美徳だな
つまらんことがあったのでまた模様変え
隣の席の赤ちゃんとすぐ仲好しに
幸せなままで死ねると思えない
焼き芋の匂いに母の笑みもどる

小出智子

ニアミスの一つ二つは我が家にも
空缶が桃のかわりに流れつく
悔むまい稲が倒れたことくらい
捗らぬ鍬に秋日は暮れ易い
生き方の違いお前に笑えるか

久家代仕男

小休止させる景なり紅葉散る
連れて来た犬も焚火に座り込む
寒き夜を猫またぐらに入れてやる
久し振り来た銭湯のあたたかさ
手を添えてくれる女ありあたたかし

黒川紫香

時代が違うと妻は何でも捨てたがる
眼鏡拭き拭き妻の叱言を聞いている
娘のとこから帰って妻は風邪をひき
握手するだけのロボット立っていた
喋り過ぎ男の影がうすくなる

阿萬萬的

息子もう家の夢より車買う
類は友呼んで騒がし西成署
有利だと信じる欲の目の狂い
町内の奇人で通るマイペース
世界一　国旗粗末にする日本

西田柳宏子

日の丸も咸臨丸の今昔

義母急逝（二句）

くるくるとつるべ落しの死と夕日
逆縁の台へ急がるる急がるる
かにかくに祭かにかく白い菊

橘高薫風

第25回　岡山県川柳大会

と　き　**平成3年1月27日**（日）
午前9時開場　正午締切
ところ　岡山県邑久町立中央公民館
兼　題　「恋　人」　橘高　薫風選
「　絆　」　小松原爽介選
「　膝　」　田中　好啓選
「　学　」　寺尾　俊平選
「追　う」　浜野　奇童選
「偶　然」　森中恵美子選
「　飯　」　（当日発表）
特別課題　1題・当日発表〈各題2句〉
会　費　1500円（昼食・参加賞呈）
投句料　500円
投句先　**1月25日**必着で下記へ
岡山県邑久郡邑久町山手1116
嘉数　幸枝宛

主催　白百合川柳会

川柳太平記（151）

川柳の群像

平松圭林

東野大八

昭和14年（一九三九）秋、北京川柳会が結成された。月一回の句会場は、北京の色街（チェン）前門（メンチェ）街の真っただ中のナニワホテルだった。

このホテルは、和華折衷の二階建てで、日本人の女中二人に、経営者の和田黙然人夫妻だった。集まる川柳人は石原青竜刀、平松圭林、加藤笑鬼、渡辺雨明、それに筆者ら総勢十人見当で、少し遅れて古川柳研究の森東魚、東京都の論客品川陣居が加わったが、量より質の川柳人の集まりだった。

この会合で筆者は、初めて圭林と顔を合わせた。これがこの後、半世紀以上にも及ぶ圭林と筆者の風交が続いたわけである。

この初対面の折の二人は、ともに三十歳前後で、圭林は、陸軍省嘱託で、NHK派遣の北京放送局管内の双橋勤務だったので、句会の折はこのホテルに彼は泊る。北京チョンガーの筆者も彼につき合ってよく寝酒を飲んだ。

彼は眉目秀麗の美男子で、風呂上りなど

「あら、東海林太郎そっくりね」

と大和なでしこの女中さんにもてた。その風呂上りの洗い髪の人気があるところから彼は泊るたびに髪をボサボサにして得意だった。

晩年、拙宅へ遊びにきた折、この話をするとイヤーな顔をして、ナツメのような禿頭を撫でた。

彼の勤務先の双橋というのは通州で、通州というば、昭和12年（一九三七）7月25日に勃発した、第二の尼港事件として騒がれた邦人虐殺事件の現場である。

この事件の直後、筆者は新聞の仕事でこの地を訪れたが、七百九十余人に上る虐殺された気の毒な人々の集団墓地は、弁当の折箱の蓋を二つ折にした、粗末な紙のような木片が無数にべったりと地上につきささり、折柄の曇天にまさに鬼哭啾々、その荒涼たる地上にただ息を呑むばかりだった。

日本の一個小隊50人の兵隊も全滅していて、その哀れな兵隊たちの墓は、そのときただ一本の白々とした杭に過ぎなかった。

戦後の東京裁判で、南京虚殺事件の反証として、日本側の弁護団は、この鬼畜さながらの中国保安隊反乱の手口を提訴したが、全く問題とされなかった。

「こんな地獄の通州で、よくも一年余も辛抱したものだ」

とよく彼と顔を合わせる度にそういって、当方は憮然としたものだ。

昭和四十年結成して爾後十九回にわたり、旧大陸柳人たちが懐旧の想いをぶちまけあった大陸川柳人同窓会には、彼は皆勤組の一人だが、その会合で彼が北満で敗戦を迎え、シベリアに抑留されていたことを知った。

本名、平松啓三。明治42年8月25日大阪市生れ。阪大工学部の学生の頃から俳句、川柳をたしなみ、俳号は圭草、柳号は三行だったが、昭和9年平松綾子と結婚を機に、漓江の奇勝で知られる桂林に魅かれて、柳号を桂林

と改め、昭和17年大陸から大阪のＮＨＫに復職したのを機に圭林と再改号した。番傘同人は戦後の昭和24年で、一度戦前に辞退しているので二度目である。

さて、圭林は、ＮＨＫを停年退職後、民間会社に嘱託として就職中、愛妻が病臥し、爾来11年間もその看護にあけくれ、再就職も四年ほどで辞めている。しかし、その病妻も昭和52年死去した。享年65。釈尼妙綾。

彼の句集『星は瞬けど』は、昭和56年の刊行だが、その冒頭の二百句は「妻を詠う」という愛惜の病妻記で飾っている。昭和9年から同52年に至る夫婦生活44年間の哀歓の詠章は、鑑賞者の胸をうつ。

ポマードの匂いも妻に選ばせる
四面楚歌　妻の味方の子が育ち
良妻という美しい糸切歯
旅に出て鞄の隅に妻が居る
病妻と心中する気　入院す
僕の名が呼べなくなった失語症
手を握る間は僕を知っている
花見ても笑えぬ妻の冷たい手
夢二の絵掛けて病いは不治と知る
ふところを風吹き抜けて妻の逝く
妻の遺影抱けばこぼれる萩の花
永遠の愛を瞬く星に告げ

以上の圭林の句の最後の作品が、この彼唯一の句集のタイトルとなったわけだ。

「真の愛妻というのは、花も嵐も踏み越えていく二人の愛が生きてこその話だ」

と大陸川柳人同窓会の酒の中で彼はこんなことをいう。

「だから養子になったんだといいたいんだろうが、お前さんだけでなくおれも養子だ」

とこちらがいうと、彼はニヤリとして

「おれは技術屋だから、養子もプラスとマイナスの接続部分だけの話さ」

「東京では、東京みなと番傘川柳会の顧問として、多くの会員の信頼を集め、毎月みなと句会を唯一の楽しみに、好きなゴルフも止めて生きる喜びをかみしめている、と語っておられた。この度の告別式に参上し、自宅から交通機関を乗り継ぎながら、品川の句会場まで長い間よく通って下さったことと、その熱心さに皆はいまさらのように驚いたわけである。彼のマイホームは、京王線桜ヶ丘の小高い丘陵地にある。長男（ＮＨＫ）一家とともに、また娘さんの婚家も近接し、羨しい、しあわせファミリーとも言えるであろう」

（『番傘』榎本聰夢悼文）。

「桜ヶ丘っていい名だな。丘の上に桜が満開で、その下の青い芝生で好きなゴルフの練習をして、夜は川柳だな。あんたはしあわせもんだ」

と拙宅へ現われた時、そういって微笑しあったのが最後になった。

昭和63年12月5日肺炎で死去。78歳。法名釈圭聞。

筆者はわが生涯でただ一度だけ編集割付をした本を出している。『夢詩朗の本』（昭和51年刊）というのである。出口夢詩朗を知る友人知己たちの執筆原稿を集めてＢ6判二百頁に仕上げたもの。

この本のため、圭林は北京での夢詩朗歓迎句会のことを執筆寄稿してくれた。その折、その原稿に添えて一葉の古写真を送ってくれた。それは昭和14年北京の加藤笑鬼居で撮したもので、若い夢詩朗や青竜刀にはさまって、丸刈の二十歳代の筆者の顔もあるという懐かしいものだ。この好意に応えて筆者製作の本には、二十歳代の圭林の若々しい軍服姿をサービスに挿入した。軍刀を手に戦闘帽に国民服姿の、白皙の貌に眼鏡の颯爽たる若武者ぶりに、彼が大喜びしたのはいうまでもない。

▼次号は「吉川亜人」

柳籠裏三篇研究（五丁～六丁）

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原　亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助　故岡田　甫

87　**瓜畑びっこ引キ〳〵りちぎ者**

紀内＝『文選』「楽府君子行」に「君子防未然　不処嫌疑間　瓜田不納履　李下不正冠」とある。無用の疑いを受けぬよう、具合の悪くなった履き物をなおさずにびっこをひいている。実直な人間を詠んでいるのであるが、要は、瓜田不納履のたとえを生かしただけの句。

岩田＝賛。

瓜でんより炬燵の足のうたがわし　末三3

瓜田はもとより炬燵もいましめる　二二4

岡田＝賛。しかしつまらぬ句なり。

六丁

88　**脇差で礼者を招キかへすも**

西原＝礼者は年賀客のことで、年賀することを「年礼」、その人を礼者といった。町家の年礼にあって、その礼者のスタイルは「主人、黒羽二重紋付小袖、麻上下、白足袋、雪駄をはき、小刀一腰」（『絵本江戸風俗往来』）の如くであった。

主題句は、辞した礼者が脇差を忘れたのである。なにしろ普段はもちつけぬもの故、無理もない。それを家人が熊谷ばりに脇差を振って、「オーイ、お忘れですぞ」というところ。

青木＝賛。引用の『絵本江戸風俗往来』には、右に続いて「…これ町内屈指の大町家の年礼なり…」とあるので、町家で脇差を差しての年礼を見掛けるのは少なかったことでしょう。

岡田＝賛。町人も年礼のときは肩衣（上下）を付け、脇差一本を腰にさすのが礼服。（ただし中級以下、下賤の町人はなかったでしょう）。このことを礎稿に欲しかった。その脇差を忘れたとは、門礼ですまさず、招ぜられて座敷にあがったからで、そうすればトソや酒が出る。少しは酔ったこととは思うが、脇差を忘れたのは、むしろ差しつけぬ刀だからです。

89　**竹帯に抱付イて居るにわか雨**

西原＝帯を干して置いたところ、にわか雨でそれへ一目散に駆け付け、必死になって濡らすまいとする様子を詠んだ句。

青木＝突然の俄雨に裾を端折って余所の軒先に飛び込んだが、雨は益々激しくなるばかり。雨に濡れまいとして身をすくめる様が、あたかも我と我が身の帯に抱き付くが如くで

あると。観念的色香の感ぜられる句。この句をものした時、作者心の中でニタリだったかも知れない。主題句から離れますが…。

にわか雨娵をくづすに見世を借り　玉13
にわか雨娵をくづすに人だかり　三〇17
雨宿り娵はしょったりおろしたり　二九20

岡田＝外出してのにわか雨に賛。帯に抱き付いているとは、後帯では不可能。前帯にしめている場合です。いくら大事な帯でも、体に巻いているのはどうにもならず、また比較的に濡れる量が少ない。だが結んだ部分は濡れる率が多い。抱き付いて濡れるのを少しでもよけようとする。女性の衣服への執着と、その帯が大事なものを描いている。

90　**素人のにぎりこぶしをうなぎ出る**

西原＝うなぎを摑むのは玄人にかぎる。昔から、うなぎ、どじょう、なまずは摑みにくいものの代表。

わるい思ひつき生たうなぎをくれ　笛一27

青木＝賛。

しっかりと握れば鰻指ばかり　安七梅2
鰻を丸で貰ったも困るもの　笛一7

割く事はおいて鰻とつかみ合い　宝一二松3

紀内＝賛。落語「素人鰻」の趣向。

岡田＝賛。

91　**わるひ言出しハおやすひ御用だが**

西原＝縁を切るとか、何かを断わるなど悪い事の口利きを頼まれた者の言。大抵の人は、「わるい言い出しはおやすい御用だが…」とまではいうが、そのあとは、何だかんだといって結局は引き受けない。

悪口はわっちがかぶと女房いい　二四9

佐藤＝大体礎稿のいうところに賛成ですが、意味のはっきりしないところがある。つまりは、「おやすひ御用だが」は、安請合の常套語で、その後に必ず但し書きがつくものである。簡単にこちらの頼みを聞き入れてくれそうな言葉だが、実はその後にくる「しかし何々だから」の方に意味があるので、依頼者にとっては、まさに「悪い言い出し」となる、の意ではなかろうか。

七久保＝佐藤氏説賛。借金など頼まれ、その断り文句の常套語。

岡田＝同。句にカッコを付ければ、

悪い言い出しは「お安い御用だが」

となるわけです。

92　**素見眼をやすめて通る惣仕廻**

西原＝素見は、吉原の素見物で、大抵はその人をいう。惣仕廻は女郎の総あげである。

江戸から京まで残らず素見也　一四27

絢爛豪華の遊女を、格子先から見とれて通るわけで、誠に目に毒である。それが、たまたま惣仕廻の見世に来ると、一人もいないわけだから、目をやすめて通ることになる。

見るが目の毒とはけちな素見物　一〇36

佐藤＝賛。張見世には「仕舞札」が張られ、見世先の行燈は大方消されて暗くなるのである。

七久保＝賛。

地廻りの向ふへ切れる惣仕廻　六16

岡田＝賛。

お願い

「川柳塔」「水煙抄」「銀河系」「課題吟」などへの投句は、**川柳塔用箋**（1冊200円）をご使用ください。ご入用の方は、本社事務所あてにお申し込みくだされば郵送いたします。

美濃の狂俳なるもの

東野　大八

本誌八月号で阿達義雄先生が、美濃の狂俳について触れられていたので、その関係地に住む立場で、このことの解説を試みたい。

筆者の居住している美濃加茂市は、まことに旺盛な狂俳のメッカである。数年前のことだが、例年11月上旬に開かれる恒例の地元文化祭の分科会的な催しで「川柳」をとりあげたが、定刻過ぎても誰も来ない。部屋には岐阜市の『柳宴』同人のT君と私だけの二人。アッケラカンと手持無沙汰のまま、昼食時を迎えてしまった。

ところが階下に何気なく下りたところ、近くの部屋がまことに騒々しい。見ると入口辺に「狂俳会場」の貼紙がある。人の出入りがはげしいまま、廊下から内部を一べつしておどろいた。そこは七、八十人の人混みで酒が入っているせいか、赤い顔でケンケンガクガク賑やかなこと一通りでない。部屋に戻るとT君が索然たる面持ちでつぶやいた。

「狂俳にはかなわん」

爾来、筆者は二度とこの文化祭には参加しないままで今日に及んでいる。

岐阜市・岐阜公園の一角に「狂俳発祥之地」と刻んだ石碑がある。幅二・五メートル、高さ約一・五メートルもある大石で、去る昭和47年暮、岐阜調狂俳の地元愛好者団体である「東海樗流(ちょりゅう)会」(本部同市領下英町・沢田亜声会長)が、狂俳発祥二百年を記念して建てたものである。

この碑文によると、この短詩文芸が始まったのは安永二年(一七七三)である。伊勢の人で、俳諧師の三浦樗良(みうらちょうら)が来岐、美江寺観音付近に草庵を結び、半歳あまり滞在した。この間、彼は界隈にいた俳人桑原東坡(とうは)と親しみ、四文字の題に十三字を加えて一句とする伊勢笠付(かさづけ)を教えた。

東坡は弟子の八仙斎亀遊とともに深く研究俳諧に準じた形態に改め、前句と呼んだ。間もなく、定座と序列という形式が確立し、天保年間から「狂俳」と呼ぶようになった。

この狂俳は作りやすさ、機知に富んだ明るい笑いなどが受け、農閑期の農民らの間に広まった。幕末から明治初め、明治中期から大正にかけての時期には大ブームになったが、太平洋戦争に前後して衰退した。句会も全く開かれなくなった。

そこでかつての指導者、点者らがさる昭和25年ごろから、郷土文芸を再興しようの合言葉で結成したのが東海樗流会、当時百人だった会員数も昭和50年には90グループ千八百人、愛好者の数は約一万人にもなった。現在では、これの若干増だと同会の機関誌『樗流』(昭和25年創刊・現在21巻)は伝えている。

この機関誌A4・38Pを持ち、隣県の愛知・三重両県と区別し『岐阜狂俳』と称し、独自の貫禄を示している。

この「岐阜狂俳」なるものの特質はどうかというと、狂俳には必ず「題」があり、この

題に向って十二音字の句を作る。題はもと五音字と定められ、五・七・五とよんだが、のち字数の制限はなくなった。例を挙げておこう。

帰り行く鳥（三月）

秀逸　大寺・霞に浮いて鐘遠い

二番　春愁・琴の弦さへゆるみくる

三番　慕う徳・五香水をもて身を洗う

（といった調子で十番まで進む）

見返えし　ふわふわ・綿虫高う低う飛ぶ

大尾　倖せ・生の余白を趣味に老う

こういう十二番の序列には、一つずつ約束ごとがあり、順序は変えられない。秀逸は季節の句、二番は恋の句、三番は神仏といった調子で、十番は俳句でもよく、しんがりの大尾は重厚な句を選んでジャンルは問わない。

句会ではあらかじめ決められた十～三十の題について、一～二万句の作品が集まるというから、以上十二の最優秀句に選ばれるのは、並たいていのことではない。

狂俳の流行は、和歌→連歌→俳諧→雑俳（川柳をふくむ）という文芸大衆化の歴史の中でとらえられているが、実は俳諧史のなかには雑俳がほとんど登場しない。この点について鈴木勝忠岐大教授（国文学）は、著書『川柳と雑俳』の中で

「有閑的文人趣味と、近代文化人の深刻面とに、いかにもよく適合する嗜（し）好的選択が、俳諧としては特殊に属する蕉風の悟性的観照的風雅観を規範とし、これに合わぬ俳諧や雑俳を低俗堕落とおとしめた」

と説明。さらに娯楽性を俳諧の本道とする見方から「純俳と雑俳の別は慣習にすぎず、その虚像から抜け出さなければならない」と主張している。

狂俳は川柳とともに雑俳の一種としてほぼ同じ時期に生れながら、地域的な偏り方で江戸期から現代までうけつがれていることに、筆者は深い関心と興味をみせている次第である（この狂俳については、機会を見て詳しく発表したいと考えている）。

夜市川柳募集

	題	選者	締切
第7回	「女」	**住田英比古**	**12月末**
第8回	「妻」	板尾　岳人	1月末
第9回	「積む」	古川　一高	2月末
第10回	「猫」	中尾　藻介	3月末

投句先　〒593　堺市堀上緑町2―9―2　河内天笑方　堺川柳会

NHK学園 川柳近畿大会

とき　**平成3年2月16日**（土）
午前11時受付
〈午後1時～同4時半〉

ところ　ラポルテホール（JR芦屋駅前）
（兵庫県芦屋市船戸町4―1―303）

宿題　（事前投句・各題2句）
「磨く」　西尾　栞
「多い」　堀口　北斗
「波」　去来川　巨城

席題　（当日出題・各題2句）
梶川　雄次郎
小松原　爽介

講演　「川柳のポイント」　森中　恵美子

宿題事前投句締切
平成3年1月21日
（当日消印有効）

投句先　〒186―01
東京都国立市富士見台2―36
NHK学園川柳近畿大会事務局

投句料　1600円（入選作品集代含む）

入場無料　（返信用ハガキを同封、申し込むこと）

五煙抄

黒川紫香選

和歌山市　山口三千子

条件反射作り笑いをしてしまう
鼻薬かがされ王手かけられる
奥様が出られて困る電話口
甘い水飲んで中毒症になり
良い返事来たので花に水をやる

砂川市　大橋政良

言い訳を聞いてるほうが疲れます
笑わせることに疲れているピエロ
酒の量老化の目盛りかもしれぬ
二日酔シャツの裏を着ておきる
よそ見する思いやりならしてやれる

浜田市　中尾まゆみ

園児の輪ふつふつ童話わいてくる
風を背に悟るやっぱり君が好き
傍にいてほしくて涙とまらない
ジョーカーを握って運が向いてくる

雑草が好きできれいな夢拾う

摂津市　木下道子

夢多き男履歴書ばかり書く
軽やかにファッションモデル夢を売る
種明かしされて驚く思いやり
ダイエット中と満月顔出さず
不機嫌なタクシー家はまだ遠い

名古屋市　藤井高子

老猫の顔が哲学めいてくる
弥陀の掌に眠れる如し冬陽さす
夜話に初恋なども出る小雪
生きている証抗う風もあり
時々は持ち上げられている女権

尼崎市　児玉歌子

人ひとり許し女の回想記
学ぶより慣れろと父が手厳しい
復縁を迫られている鎌の月

輪が一つ解けて添う気にやっとなる
ふる里の全貌峠茶屋にいる

大阪市　新井朋子

女子校生おとぎ話を聞きたがる
大人とはどんなものかな赤ワイン
日曜日パパを横取りした会社
成長期なのですおなかが空くのです
瞳にはこぼれんばかりの星と夢

八尾市　高杉千歩

落葉や戦は遠きものならず
お国柄越えてお箸がおいてある
お師匠はんもゴミ出してはる木曜日
故里訛り亡母といるよな始発駅
ぽっくり寺生き急いでる長い列

静岡市　沢田きん

花と花思いのままに活けて秋
旅立ちへ嫁が気遣う包み紙
正直に季節に咲いたこぼれ種
健康が支えてくれる手内職
戸惑いは見知らぬ人にお辞儀され

佐賀県　寺中三枝子

ひとっ飛びの旅空港までが遠い
あらためて家長としての背を伸ばす
実力派は恐妻家だと風が言う
合鍵を持って少女はオンナの目

てんやものの死角に妻の怠け癖

今治市　野村京子

疑似餌まき男をさそうイヤリング
風は旅人甘い言葉をおいて行く
どうしても遍路に出たい罪がある
マジシャンを裏切ったのは鳩だった
迂回してあなたの愛が見えてくる

松江市　佐野木みえ

傷心の影が私につきまとう
若き日の日記余白にある思い
子の背の高さになって聞いてやり
栗の皮剥いて夜長を母と子と
女一人庭に向って爪を切る

広島市　流奈美子

影しばし振り向くことが多くなる
ノックするように陋屋風が訪う
一日一善野良猫に餌をやる
注意して聞けば小骨のある言葉
瞬きをしてウインクに間違われ

大阪市　上田柳影

ぎんなんの落ちてつぶれて秋愁や
倦怠期隣の菊が美しい
点滴の雫見つめているいのち
踏切りでいつも手を振る共稼ぎ
同じ血の絆どの子もお人好し

大阪市　新井泰子

山ひとつ持って都会の仮住まい
まっ白な障子坊やは苦手です
秋風に小さな朝顔ゆれている
厳重にしまった場所を忘れてる
真夜中に家具の移動を思いたつ

旭川市　朝倉大柏

自己採点怖くて眼鏡拭いている
平凡が似合う背広の彩を選る
シナリオにそこで笑うと書いてある
トンネルの向うは春と限らない
凡夫婦平行線で仲がよい

熊本市　宇野昭代

駐在も走る分校運動会
暇つぶし程の用事を頼みましょ
親切が空回りした日の疲れ
寝ころんで読んだら何も残らない
性格も趣味も違って居て夫婦

熊本県　大川幸子

好位置でやさしい風につつまれる
飼い主の方から鈴を付けてくれ
星空へ小さな悩みが馬鹿げて来
どこからが本音ほどほど超えた酔い
ギックリ腰笑い事ではない痛さ

酒田市　永澤裕子

スローモーを馬鹿にされてるような老い
見え透いたお世辞で若さ褒められる
此の辺で仏の慈悲が欲しいうつ
告白をされてそれから逢えぬ仲
天才と言ってくれるは夫だけ

和歌山市　堀畑靖子

秋の宿素足にここちよい畳
どうお洒落しても家庭の匂う指
年寄りの仕事と母は医者通い
開幕のベルは私をときめかす
怒りから淋しさになる待ち惚け

尼崎市　森安夢之助

初恋を塩漬にして嫁に行く
隣から飛んで来た葉っぱは憎らしい
そば枕夕べの内緒知っている
妥協してゆっくりちびる父の靴
スポーツ靴はくとお前もライバルだ

久留米市　鶴久百万両

枯葉舞う視野に広がる阿蘇五岳
悲話ひとつ師走の風に捲られる
黒揚羽の媚びにときめくことはない
はんなりと傷つけあって恋すすむ
逢えるなら雨にこわれた虹登る

尼崎市　野瀬昌子

事情だけ聞いて行政動かぬ気
南向き皆幸せな家だろう
「おまけです」三人目生むおっかさん

雲の上少うし降りて新陛下
和歌山市　北山好笑

秋めいて旅行プランがすぐきまる
ことごとく杖をもらって庭の菊
帯を解くように流れる錦鯉
子供抱くごとく案山子を抱いて来る
藤井寺市　高田美代子

蝶結びが上手でやさしいおばあさん
炎え尽きて山は冬帽子をかぶる
森の絵が好きで時々夢拾う
首売りに行かねば正月が近い
堺市　楊井二南

物好きな人を待つ気の売れ残り
しくじりを直ぐ顔に出す依頼心
生真面目な顔冗談が通じない
悪役に甘んじている芸達者
堺市　桜沢あか里

秋には秋の歳時記とゆくバスの旅
ステレオのボリューム上げている孤独
忘れるであろう雨傘持って出る
触れるのと触れてみるとの違いなり
尼崎市　的場十四郎

土ついた畠の野菜もらう朝
愛情と校則交じる学び窓
雲行きを眺めて旅の支度する

自然の美パステルカラーに実る秋
尼崎市　尾宮弘治

悪いこと言わぬと赴任押しつける
町工場の頃の話が長すぎる
里の母養子の味方ばかりする
お下がりの服を気にせぬ三人目
鳥取県　石尾かつ乃

当分は向うで暮すと行ったきり
老母さんの歩幅に合わすむつかしさ
じっくりともつれた糸を解く会議
初孫が泣いた笑うただけで寄り
羽曳野市　芦田絢子

泣き声の大きささえも自慢する
たまさかの無心が老母をよろこばす
米びつが減らずストレス溜めている
君の目に私はきっとピエロだろ
岡山県　清水悠貴女

生きざまをとんび舞い舞い考える
振り向けば小さくなった影法師
それぞれの暮しが走る十二月
ヘルメット脱げば女の瞳に戻り
柏市　上鈴木春枝

設計図同居を迷う線を引く
叱られた涙を吸わすぬいぐるみ
職業欄姑も私も主婦と書き

キッチンとトイレに分ける花の束
兵庫県　森脇和子

ひとりには独りの祈り甘んじる
お互いの身軽さ笑うお付き合い
筆まめな友の便りに冬の音
地球儀を回す子の手に小さな欲
岐阜市　渡辺杏村

本当にサンタがいると孫信じ
日本髪の予約に走る美容院
一年がアッという間に年の暮れ
スキーバスもう満員の札が出る
姫路市　松本一郎

一刻も無駄には出来ぬ齢となる
転宅もこれが最後か走馬灯
窓あける老母の部屋から朝が来る
窓際の椅子にも未練職を退く
大阪市　藤森小雅子

佳賓聚楽素敵にグルメするも秋
禁酒した意志の強さを淋しがり
脱サラと転職組と屋台の灯
十二月小猫一匹貰われる
尼崎市　鈴木良征

三文判押して不安な日が続く
束の間の彩に染まったカメレオン
一欠け二欠け小粒になってきた政治

AとBとの会話途絶えた長い雨期
米子市　新正子

らくがきの傘がうれしい二人です
一張羅ばかり着ている金魚の子
その癖がとても気になる倦怠期
薄墨の何と悲しい文字の色
東予市　小山悠泉

大船にのった気になる里帰り
お薬どうぞ可愛い孫の手がやさし
宅配も柿でこみ合う柿どころ
姑の情け別居をせいと言う
唐津市　山口ふさ子

若葉マーク一家総出でバック指示
虫好かん人がとなりへ来て困る
歩幅など合わせてくれた夫は逝き
熱帯夜やっとさよならしてくれる
出雲市　岸桂子

米二合炊いて今日も忙しい
事なかれ主義を通したカタツムリ
日が沈むさよならしよう影法師
神さまよ呼んでいるのは私です
吹田市　山本希久子

追い風を背に満帆の船出だが
雨の音ひとりの部屋が広過ぎる
旅先の妻はよく食べよく笑い

ふくらみ過ぎてはじけた夢のシャボン玉

尼崎市　山田保蔵

ダルマさん両目になって威張りだし
名月にやっぱり合掌してしまう
しみじみと語学の弱さ悔いている
外食も見本ばっかり豪華です

尼崎市　佐野六浦

祝日も連休もなくペダル踏む
表面張力我慢が切れて子を叱る
冬木立枯葉が裾へ舞う舗道
譲ります内の子猫は美人です

鳥取県　乾隆風

欲のない顔でお膳にかしこまる
賓頭盧（びんずる）さまもみんな頭は禿げている
投げやりな言葉を案山子聞いている
住み馴れたこの世離れる霊柩車

熊本県　岩切康子

ネクタイの趣味にひかれる旅心
佐渡の海無月となって波に揺れ
田舎道逢う人毎に挨拶し
弁当は持参しますと誘われる

寝屋川市　宮崎菜月

大方の知識わが家の電波から
捨犬のはやもう家族になりきる目
一草もなき運動会の赤い砂

期待ほど返事は来ない好きな人

十和田市　阿部喜久江

わだかまり捨てた心が弾んでる
ピッタリのサイズ値段が折りあわず
口笛をはずませ帰るランドセル
まな板が時どきかわく倦怠期

貝塚市　池田寿美子

別れがあるたび賢くなって行く
じっくりと深く腰掛け自信持つ
覚悟して箱ずしになるエレベーター
人情が紙風船のようになる

和歌山市　谷口信子

文化人のつもり秋を満喫し
まだちょっとシルバーシート遠慮する
村祭り祝儀張紙にぎにぎし
満月へ思わず両手あわせてる

大阪市　川原章久

がらくた市姫鏡台に鰯雲
恋すれば足が遠のく娘の帰省
農継がぬ人のど自慢に田植唄
こいさんと斜かい橋の昼下り

鳥取県　中村幸代

ひとしきり無心になろう秋の空
どんぐりころころキャンパスで詩うたう
迷いから覚めてまあるい月に逢う

魔女になろうと心のドアを開けておく
鳥取県　大角正道

フィアンセに大きな夢を見せておく
寝ることに決めて飛行機好きになる
今日もまたケンカしようという彼女
盛り皿を囲む質素な宴でいい
熊本市　北川一進

一通り料理覚えた単赴任
義士伝の話師走に見るテレビ
又釦とれたと今日も元気な子
余生などまだ考えぬ生きる今日
今治市　渡辺南奉

本当を言うから溝が埋まらない
少年の視線は二十一世紀
飛ぶ鳥を落とした父が呆けはじめ
神主で食えずパートに出ています
鳥取県　西浦小鹿

日ノ丸が吉報を抱く夕暮れよ
無防備に構えて愛がみえてくる
包丁の音が病んでる朝の雨
夕焼けに妥協をしない手をかざす
尼崎市　木下義嗣

足の裏昨夜の罪を知っている
裏道を通って帰る若夫婦
嬉しさに祝いの酒で長い夜
特価日は押される覚悟で家を出る
尼崎市　中澤向西

和解してそれから機嫌麗しい
茄子トマト貸農園は花盛り
社員寮眺める月に里心
独房に月を眺める窓がない
岡山県　伏見すみれ

苦も楽も共に回った夫婦ゴマ
夢みてるようにきれいな朝の月
火祭りの炎男の血が燃える
藍染めの両手も青く染めている
豊中市　三宅つえ子

朝市で蟹を買うのは下駄ばきで
夕暮れに哀しみ流す喪のあかり
夢さめてぬれた枕を裏返す
ひとり言実ったでしょうか車椅子
兵庫県　酒井靖子

生き残るための握手は熱がある
底知れぬ知恵を噴き出す友のペン
好きだから後ろ指にも耐えられる
孤独感捨てた女が虹を織る
鳥取県　鈴木公弘

カメラでは写らぬ夢をもっている
昼寝した隙に熟柿を盗まれる
匿名で本音かくしている愚か

提灯をかざし過ぎても叩かれる　西宮市　菊池トミエ

ベランダに禁煙のないパパの椅子
ふる里は思い出を掘る芋を掘る

北海道を旅して

十勝峠沈む夕日も雄大に
阿寒湖は錦を映しマリモ浮く　三木市　岡本蛮拙

秋さやか今年も障子が張れました
年金に見合う役なら受けようか

インドにて

裸の子ちゃんと戸籍があるのかな
タジマハル観光料を稼ぐなり　米子市　足立由美子

老いたのか姉妹で昔よく語る
顔ぶれが揃うと元気倍になる
松活けて大事な客を待っている　和歌山市　田中みね

売約済みの娘に良縁がくる皮肉
推敲が欲しいあなたの言葉じり
資産家に嫁いだ姉に距離ができ　京都市　小林英子

いつからか青いリンゴのもの想い
天邪鬼になってストレス溜りだす
余生なお炎えるもの有り姫鏡　高槻市　芦田静江

夫見送って涙かくした喪の舞台
人住まぬ庵に秋がこぼれてる
ボス一人趣味の空気をわるくする　熊本県　高野宵草

ハンドルが出社も退社も陽に向い
病室を出てから癌だなと見舞い
道祖神めっきり寒くなりました　熊本市　黒田緑

当分は亜流の席で風見鶏
背中まで鏡で見ようなどは無理
ふとくしゃみ孤愁の中の音一つ　大阪市　今西静子

ゆっくりとワインわびしいひとりの夜
いまだから言うがと聞きたくない話
てのひらにひとり芝居の絵を描こう　岡山県　土居ひでの

知恵借りて来ようか隣もベレー帽
捨てられてからの命が風に乗り
ばあちゃんの部屋までチャンバラ攻めて来る　尼崎市　吉永伊三郎

くり返す汚職選んだのは誰だ
せがまれて擦って揉んだ妻の肩
猿回し客がほめると見栄を切り

悪玉が涼しい貌で街を行く　尼崎市　明壁敏之

信濃路は畠一面のそばの花
月の出を待たずに酔いが先に出る　尼崎市　長浜澄子

里心ポケットに詰め墓参する
月を背に寄り添う影と遠まわり
知らぬ子と童心になり栗拾う　田辺市　染道佳明

寄贈者の名前ぎらぎら幕が開く
タバコなら自分で買いに行く夫
日の丸を出すと日の丸観て通る　鳥取県　今本早苗

ひと言が多すぎ椅子がぬくもらぬ
おむすびの塩味きいて山歩き
一人っ子よく泣くくせに暴れん坊　広島市　名和喜一郎

手を叩く方へは来なくなった妻
はずれクジ捨てきれないでいる男
昇進の名刺妻にもご挨拶　鳥取県　鈴木芙美

看護婦が痛み忘れるジョーク呉れ
チンと鳴るまで待つ料理なら出来る
赤字ですピンチ親父に頼もうか　米子市　小塩智加恵

七五三小さな花嫁見る平和

お隣がきらいな猫を二匹飼う
ガラス割る音の向こうに孫の舌　和歌山市　森茜

コルセットきつめに締めて負けられぬ
ロボットのように腰いた動きだし
老眼鏡はずすと一層空深み　鳥取県　石谷美恵子

鏡台を覗けば亡母がそこにいる
念入りに羽づくろいしてチャンス待つ
いらいらをこらえる母の拭き掃除　八尾市　向井しづ子

弓張り月とんでいるのはただ二日
ほほ笑みは今日のおなすのつかり様
横道にとことんそれてもう夕べ　枚方市　中山おさむ

畳みかける若さが先を見ていない
善光寺さんの煙にむせかえり
嫁姑のドラマへ主婦の眼が光る　鳥取県　太田幸枝

祝宴に酔うた跡かたづけしてる
餅一つ貰ってからの恋ですが
願いごと賽銭追加して重ね　鳥取市　萩原美雪

夜の蝶身の上話タンと持ち
ボーナスがヒラヒラ飛んで出ていった
要点をつまんで言えと急かされる

数日は孫の習字の軸を掛け
面白い屋号は声を出して読み
入院の居酒屋のママ面白い
守口市　森川春子

月下美人二輪咲いた夜月は出ず
吊ったままの簾　秋雨腰据える
チマチマと一日雑事に追われてる
枚方市　森本節子

英会話舌噛みながら挑戦す
夕焼は思い出彩に染められて
米寿なおシャキッと生きて母老いず
河内長野市　柏本靖子

内緒ごと鍵の穴から筒抜ける
常連の舌を女将は心得る
一言で足ります愛の意思表示
寝屋川市　北岡波留吉

美まし酒長き友あり酔芙蓉
のし紙が張り替えられて三度笠
神主の妻が賽銭かぞえてる
八尾市　片上英一

発車ベルぎりぎりまでもソバを食う
夢のある話サンタはいつ来るの
首すじのホクロがちょっとチャーミング
岡山県　大石あすなろ

窓ぎわの位置でくすぶるあの火種
岡山市　中嶋千恵子

そこそこで暗号とけぬ夫婦坂
ほころびをつなぎ合せてああ夫婦
鳥取県　西川和子

じいちゃんに似れば大きな懐に
芋飯を盛って我が家のグルメです
いい顔に写す鏡を磨いてる
八戸市　島田昭治

六十になっても母はよく叱り
どうしても馬鹿になり切れず腹を立て
運命とばかり黙々ペダル踏む
鳥取県　岩原喬水

地獄耳尾鰭をつけてすぐ喋る
火消壺また燃えあがる夢を持つ
テストだと聞いただけでも頭痛する
静岡市　片平静代

中流の顔して嵩む交際費
二番手にチャンスを狙う顔がいる
秋夜長夫婦話題に飢えている
出雲市　森山健歩

つぎはぎを着ていたころの人情味
粗衣粗食でっかい夢を見続ける
マイペースなどと勉強せぬつもり
兵庫県　奥野テル

お地蔵さんの肩に甘えた赤とんぼ
本当の自分でおれる一人部屋
お陽さまが真っ赤に笑う子の画帖

島根県　菅田かつ子

木犀の香りがしばし引きとめる
古時計捨てるまぎわで動きだし
車間距離とらず寄り付くこわいひと

鳥取市　西村黙光

おだてあげ炊事軍曹またやらす
雨しきり手抜き工事を暴露する
妻の背を流す幸せ噛みしめる

河内長野市　大西文次

逃げ足の早いところが親に似る
猫の手も借りたい猫に手がかかる
役員にされて祭の寄附集め

唐津市　浜本治幸

店員の気前の良さに無駄を買う
名も知れぬ路傍の花も自己主張
蚊一匹飛び込んでから落ち着かず

島根県　今川三津江

健康ないびき夫の布団干す
雨雲が走る私も走らねば
峯寺句会山菜料理と句を競う

鳥取県　上田俊路

さりげない別れも深い訳がある
猿まわしよりは賢い猿がいる
満ち足りたひととき好きな人といる

京都市　山海友熙

小学校の前の家です賑やかで
東京に住む子が帰る栗ご飯
片づかぬ用事が残る秋の風

八尾市　吉村一風

冷戦は三日と持たず妻に折れ
静かすぎ別れがちょっと言いにくい
青信号違う生活がすれ違い

静岡市　小木久子

せわしげに人動いてる駅の顔
別れの日初めて好きと言った恋
資本論　書棚の隅に小さくいる

枚方市　山崎彩子

今少し彩を添えての自己主張
手のふるえ誇りを捨てたコップ酒
魂が飛び跳ねている師の句集

島根県　佐々木芳正

きっと古老が住んでいそうな裏長屋
点滴と歩く廊下の足の冷え
いさかいを見つめる子の目澄んでいる

鳴門市　八木芳水

限りなく広がる空に吸いこまれ
一匹の蠅にすっかり仰天す
薄味を好む夫婦に辿りつく

今治市　渡邊伊津志

濡落葉などと陰では言うらしい
額縁を何所で創ろか道化の絵
蛇の道草が冷たい音立てて

芦屋市　根来　敬

お助けを乞うてしまった敵だった
漫画から貰ったギャグをつこてみる
喉の飴ききすぎたのかよくしゃべる

新潟県　高野不二

草生やす土地で米よりもうけてる
恥ずかしい署名をさせる書道展
誤字脱字でも通じたかラブレター

静岡市　永倉柳華

姑となる覚悟花束受けて泣く
太陽の温もり布団から貰う
寝ていると寂しい顔になってくる

吹田市　西岡　豊

テープオン集中心を駆り立てる
カチカチとグラスならして盛り上げる
出無精の妻は孫からせかされる

島根県　松本聖子

孫は言うパパはいつ出ていつ帰る
緞通を買って保管に困り果て
縫うよりも長い時間の針の穴

熊本県　立道善太郎

ふだん着を取れば調子が狂い出す
生きて行く幸せつなぐミシン針
ちぎり絵をつなぎ合せて生きる幸

南国市　窪田和広

しつけ糸母の糸切り歯が笑い
喫茶店子供のマンガ置いてある
残業をする男とは付き合わぬ

岡山県　江口有一朗

逃げ道を一つ残して追い詰める
泥沼の粋を吸い上げ蓮の華
神様へ電話なかなか通じない

佐賀市　古川一徳

正義感出世コースを棒に振る
真直ぐに本音を吐いた話下手
矢印の通りに行って罠に落ち

堺市　神原　文

子等皆が嫁いで帯を緩くする
パジャマのままよそゆきの声インタホン
お色気を風からもらうほつれ髪

鳥取県　西原艶子

秋風にのって面影届きます
洗い髪今日一日の彩捨てる
赤い靴履いてしあわせとり戻す

島根県　加本義良

彼岸花ノーネクタイの秋の風
みの虫も動かず台風やりすごし
高潮のしぶき画面からこぼれ

寝屋川市　河合時弘

乾電池とり替え脚もリフレッシュ
爪染めることも覚えた趣味の会
つき添いの機嫌気にしているベッド

月蒼く夜間高校に灯がともる　青森県　福士トキ

天高く鍋が恋しい魚菜市場

十五夜にお供え物のない飯場　泉佐野市　真崎浪速子

一線を崩すと見えてくる自由

いい事がある包丁のリズミカル

ぐっとくる鬼の短気が迸る　岡山県　牧野秀香

お地蔵さん曼珠沙華の首かざり

おしゃれせよと心つこうて呉れる孫

チャンネル替えてもよいかと孫は問い　大阪狭山市　桜井荘次

思い出の糸が縺れた車椅子

よろこびを包む袱紗の温かさ

身に覚えあるから怖い風の向き　池田市　岡本吉太郎

来賓の数で司会者そり返る

嘘泣きにしたたかな女かいま見せ

電話ベル虫の知らせか悲しそう　八尾市　籾山隆

痛ましい記事は素直に読み返す

私には弥次さんあって名コンビ

ファミコンを持って遊びに孫が来る　広島市　中村要

因習がペレストロイカねじ曲げる

手ぐすねをひいて待ってる火縄銃

正直に歩いて流れ矢に当たる　香川県　木村明人

血圧の薬も共に旅をする

美人薄命私長生き出来そうな

旧婚の旅外国の夢を見る　羽曳野市　麻野幽玄

獅子舞の獅子に咬まれた遠い日よ

自販機でお墓に供う酒を買い

雑草という野の草に花が咲き　藤井寺市　菊地繁男

ハイハイと牛追うような生返事

蹴った石無心に転がり逆らわず

警策が道場一杯響かせる　鳥取県　黒田くに子

老人保険何か空しい気にもなり

保険屋のねばり命へ値をつける

交通違反赤い車の王女様　鳥取県　伊吹富恵

青蛙青い葉っぱの上が好き

トタン屋根コロコロ柿が秋運ぶ

蜜柑二つ転んでるよな君と僕　和歌山県　森三枝子

仲直りしたいチャンスを待つ背中

長雨に稲うなだれてうなだれて

秋祭母は主役の味を見せ

羽曳野市　徳山みつこ

台風を待ってるようにテレビつけ
お互いに遠慮している気の同居
男達いなくて夕餉の早じまい

相生市　中塚礎石

病院の窓で三回目の祭り
耳に口よせた話は高が知れ
空き缶があるからやけにけり飛ばす

静岡市　浅子まつゑ

田圃から豊年知らす稲の色
帰省の子言葉少なに仕度する
京都とは千枚漬の美味いとこ

箕面市　岩津ようじ

長いものに巻かれだしたらきりがない
からっぽのくせに頭の重たい日
どうせ腹を立てさす電話待っている

橿原市　西本保夫

聞いてみて面白くも無いその秘密
鯛などは食べぬ室内犬にする
妻が買うこんな簡単なにぎり飯

茨木市　藤井正雄

涙腺のゆるむドラマが好きな母
咳ひとつ加えて詫びる電話口
株相場どうのこうのと縄のれん

熊本市　遠山夏生

見守ってやろう階段のぼる孫
教会を囲み天草椿咲く
盃はうす口がよい秋の酒

藤井寺市　田中孝子

遠花火きいて病む身をいとおしむ
糸トンボ健気に季節を生きて飛ぶ
万歩計腰にぶらさげ露を踏む

鳥取市　松本伊都子

甘過ぎた親へ積木が崩れ落ち
信楽の蛙が池に住みついた
掛軸の鶴が晦日を締めくくる

青森県　波　ただお

この広い宇宙に存在わが命
わが家では一番奇麗なのはトイレ
カーテンを開ければ海の広い顔

米子市　服部朗子

飛行機でロマンの旅としゃれている
横たえて紅引く程に快くなった
ひっそりと屋敷に松が根を下ろす

豊中市　田中道胤

絵日記のパパはげじげじ眉に描く
発車ベル硝子戸越しに掌を重ね
相手には不足はないと負けている

寝屋川市　井上すみれ

方言を団体で聞く新幹線
ひとり旅やたら老夫婦前を行く
足向けて寝られない人ばかり出来

家出しよう冷蔵庫には食べのこし　大阪市　清水絹子

銘仙も着ることなしに防虫剤
別れたらあかんと松葉枯れて落つ　鳥取市　森山豊子

甘酢っぱく赤いリンゴがささやいた
浅智恵に合った世渡りして生きる
いらいらが煙草のけむを吐き続け　宝塚市　末次真

姿見は嘘もお世辞も申しません
ふる里で母を肴に呑む兄弟
夕陽背に長い影踏み老い思う　唐津市　入江喜久亭

出帆の銅鑼に波止場の灯がうるむ
喝采の無いスピーチにちとむくれ
株を売り家を建て替え逝った父　堺市　井上たかし

終電の娘出迎え一家中
娘は足して親引き算で見る彼氏
懐手師走の風に立つ無職　宇部市　野田豊子

古米でも戦時思えば銀の飯
用心を重ねて古希の岸につき
大和路に古代の秘密追い求め　鳥取県　武田帆雀

缶コーヒー上向く上に蜘蛛の糸
脈搏を繋ぎ弁解などしない
継ぎ竿をたたもう風と雲怪し　鳥取県　山本正光

ほそぼその暮らしながらも酒は酒
橋の名が万葉仮名で読みとれず
松茸の出る山息子にも言えぬ　箕面市　中嶋民子

どちらともとれる笑いで逃げられる
いい事ばかり考えて橋を架け　神戸市　木村貴代子

ほほえみを浮べて急所ついてくる
貯水池も月を浮べて物思う　宇部市　廣石政子

私には見せない顔で孫を抱き
青春の画布はピンクの彩に染み　広島県　岸田武

助手席で妻は糸屑まるめてる
新米の味は雀が知っている　岡山県　森下正子

苦労など人には見せぬいい女
人差し指が他人の噂聞きたがる　和歌山県　三原三究

一度出た嘘に自分もだまされる
飽食の歪み家庭に不協和音

仕合せは嫁と一緒の露天風呂　静岡市　柳沢たま

電話口寂しくないと言った嘘　神戸市　岩田信義

では次と回転椅子が背を向ける

手のほてり移ったグラス突きつける　鳥取市　加藤二代

ときめきの胸でマグマが目をさます

新築へ夫の新品欲しくなり　米子市　小西五十鈴

手糸編むそばで大豆が煮えてきた

ペアルック今年も編む気毛糸買う　奈良市　米田芳子

一日を目一杯の日が終る

みとめられ厳しくなった師の眼　大阪市　小糸昭子

贋物でブランド志向笑われる

重いロマイク必死で喰い下がり　宇部市　中村三良

ためろうて見せて本音は決めている

無人駅手持ち無沙汰で来る電車　姫路市　谷清柳

もう少し端を歩けば風いでくる

もう一度叱ってほしい墓洗う　静岡市　中西雅

台風よ来ないでほしい運動会

行きすぎて匂いのとどく焼芋屋　松江市　原長三

近道と思いこんでた行止り

まわり道しても行きたい店がある　兵庫県　倉垣恵美

いつの日かヨロンの島で泳ぎたい

平和論あれも足りないこれもほし　大阪市　乾哲静

親の子と諦めている子の不出来

他人には手の裏返す嫁姑　豊中市　滝北博史

台風は近づき雨戸しまらない

僕のことやせたやせたと言う他人　静岡市　三浦つね

立ちかけた腰また下ろすいい話

見合して親が喋ってまとまらず　富田林市　山原昭水

へそ繰りを隠したとこを探してる

久しぶり愚痴を流しに海に行く　富田林市　浦田トシヱ

一人っ子親の期待があふれてる

好物を食べて治った肩の凝り　兵庫県　北川とみ子

裏切らぬ花に情けの水をやる

ふり向くと財布が空になりそうで　岡山県　後安　ふさえ

祝い酒呑めぬ盃祖母も受け
リハビリの杖と杖とが立ち話　広島県　森川　抜智

すき焼きになれば亭主の出番なり
気分の晴れるまで酒をのむ　鳥取県　山内　芳江

敬老の日が済み主役からおりる
浅学非才ひと言添えて立候補　静岡市　青柳　金吾

今日という若さ大事に老いの日日
子供等に約束破る自己嫌悪　河内長野市　岡崎　実

垣根越えのぞけばここも喧嘩中
ケチとグチのぞけば実にいい男　鳥取市　美田　旋風

近づくと醜さだけが見えて来る
太陽が秋の旅路を急がせる　静岡市　宇佐美　寿美

乾パンに心のすきを埋め直し
風邪に伏す夫にささやく卵酒　今治市　和田　宏

口紅がずれてる訳の嘘をつく
妻二日旅して炊事しんどいな　兵庫県　西井　つや子

輪の中に居るそれだけで灯が点る
おだやかなお人で皆に愛される　大阪市　家村　高雄

表彰状もらった頃から呆けはじめ
二浪より金はかかるが私学入り　姫路市　福島　姫女

逢うたびに言いたい放題言える仲
腹の虫見えすく嘘に煮え返る　寝屋川市　豊福　路子

アルバムの夫みな若し年忌の座
エリートの短い命惜しがられ　鳥取県　浜田　民子

夕焼に染まる渚を小がにはう
取分でもめる遺産に血まで冷え　広島市　森田　文

そろそろと歩けばバッタジャンプする
しっかりと釘をつけて義母に着す　熊本県　増田　一乗

ＪＲで遠回りしたのり放題
朝まだき犬の散歩で友がふえ　鳥取県　美浦　美代子

どさくさがつけめきれいな花盗む
角砂糖ゆっくり溶かす母の部屋

岡山県　後安江山

してやれるたった一つの電話番
咲き切ってバラは満足安楽死

岡山県　富坂志重

炎となり燃えた日も有る老いの愚痴
地の温み野のやさしさをしる素足

出雲市　伊藤寿美

老母の手紙にまだムチがある元気だな
追伸の本音に眼鏡かけ直す

静岡市　増田扶美

産みたての卵の重さいとおしむ
閉めるには惜しい窓辺に月が冴え

岡山県　杉本伊久栄

常連で明るい灯がつく縄ノレン
一日も早くと願う皇太子妃

香川県　工藤吟笑

嫁が来て肩の荷下ろし父無口
我が事のように話してる目撃者

和歌山県　吉田武治

検査終え医者の笑顔にほっとする
時々に弱気持ち出し丸くなる

姫路市　福本好花

姑さんがいつまで居る気か聞けもせず
書写山に登って
あらたかな札所麓も観光化

島根県　渡部好栄

墓地がなくまだまだ逝けぬと笑い合い
娘に向い老母と同じ事思い

藤井寺市　武部敦子

兎小屋おんな世帯に男下駄
手を握るだけなら助けしてあげる

島根県　福間博利

メモ帳に書いてメモ帳見つからぬ
七十の坂せきたてる秋の虫

香川県　辻上よしみ

さまざまな人の出会いで磨かれる
勘違い平気で通す気の強さ

米子市　大田みさと

まなうらに亡父の太鼓がいつも在る
天国へ届く梯子を探しとこう

奈良市　井上大

冷房費やっと払えば灯油代
スーパーも大分値札を変えてます

唐津市　池田遊女

全くだ孫は来てよし帰ってよし
憂うつな日々をお酒に助けられ

今治市　藤本のぶ夫

横文字ばかりホテルで行き止まり
大会へつれてた方がよくはいり

大掃除一日のばし歳の暮れ　鳥取県　中藤俊子

歳末の空くじなしにティッシュだけ　唐津市　野崎ハル

幼顔口もとだけが残る友

干ばつに降った昨夜の水たまり　鳥取県　木下芙葉

里の路ゆったり歩いてなつかしみ

野菊咲く路を小走り稲刈りに　大阪市　尾崎黄紅

背をいつも曲げてはいるが貯めている

朽ちるほかなしふるさとの水車小屋　静岡市　大村正雄

手刀は心という字　勝力士

料理本たくさんあってお菜なし　藤井寺市　中島志洋

高らかに校歌で閉じるクラス会

戦友会未だ階級が生きていた　大阪市　森崎忠禄

市庁舎がやけに威張って中之島

造幣局此処からおあし旅に出る　鳥取県　谷口侑里

過疎の家老松だけが生い繁り

神様に一つお願い彼下さい　米子市　中井ゆき

すて犬がついて来そうで目をそらす

宍道湖に神をむかえる虹が立つ　泉南市　坂根流水

出口ない中東紛争もてあまし

白髪を見上げ入場値引され　大阪市　平井露芳

花泥のニュースで花博しめくくり

浄水器うちのは美味しい水でっせ　寝屋川市　坂上高栄

鍵っ子の背の淋しい秋の暮れ

弁解がアリバイ崩すもとになり　東大阪市　松山隆

母と娘の内緒話が株らしい

登山靴童謡が脚軽くする　鳥取県　野口重富

子に呼ばれ居留守がばれて脂汗

言いわけの裏まで母に見すかされ　静岡市　大石たき

へらず口たたく暇さえ無い私

若き日の道楽懺悔聞いてやる　鳥取県　中西智恵子

体重を気にかけ秋を乗り越える

黒猫も全力疾走する師走　大阪市　岡田一枝

松茸の前を行ったり来たりして

そと面を写す手鏡持ち歩く　東大阪市　大平太一郎

囲まれてみんな元気で月に神酒
台風も日本叩きに走り過ぎ　羽曳野市　福田悦子

恥じらいを見せて紅葉の山の秋
乱れ飛ぶうわさの渦にいる女　唐津市　野田旭恒

辷りつつ蔓に縋って越す峠
肩書はつらい自由の身を奪う　池田市　林すて

何となくつい手を合わす月眺め
親友へたよりもみじの赤を入れ　鳥取県　大坪天涯

天井からポタリ孤独に雨が添う
ぼんやりと父が猫背になってゆく　鳥取市　前田一枝

赤い舌ペロリと出してテレ隠す
ゆずられた席何となく落ちつかず　大阪市　山北三三三

位置変えて見ても目が合う絵の女
尾も振らずこちらも向かず犬が病む　鳥取市　中居武士

敬老も何処吹く風の登山靴
赤い羽根善意の人の胸に咲く　島根県　岩田三和

ふるさとは長生きできるいい噂
お日さまも笑っているから稲刈り日　唐津市　山下剛司

休みの日何の事なくすぎて行く
山笠囃子聞けば唐津っ子胸おどる　川西市　田中喜俊

待ちわびた便りワープロで気ぬけした
聞きあきた孫の自慢の友さける　島根県　兒玉幸子

秋なすの美味も秋風にかわる
会えばみな一年の早さ口にする　鳥取県　谷岡寛陽

寝た切りはいやだ私も日向ぼっこ
検診を受けておいしい酒を飲む　大阪市　武田昌三

生きるのが楽しと米寿の声楽し
レセプションわくわく弾む厚化粧　岡山県　三村美恵子

いま脱皮この世のけがれ知らぬ蝶
畑出るたのしみ失せる長い雨

◆ジュニアの部

すず虫も三匹いたら騒がしい
あおむけで熟睡してるうちのコロ　八尾市　山中智子（中三）

—同人吟

秀句鑑賞

—前月号から

春城　武庫坊

生者必滅妻を失う日が怖い

小西　雄々

古希を迎えた男の本音がずばり、平均寿命から言えば妻が残るかもしれないが…。やっと平和の境に達し、大事な余生を楽しむ日を送っている時、若し妻を失うようなことが起これば…。

時々は休む時計を持たせよう

小野　克枝

何時もいつも時間に追われ、働くことが生き甲斐のように習性となったシルバーたち、休む時計を持たせて休ませたい温い心がほのぼのと窺える。

駄菓子屋の棚にならんでいる昔

林　荒介

駄菓子屋の棚と言えば、ちょっとうす暗い棚。そこにミカン水、めんこ、おはじき、独楽など、昔なつかしい品が並んでいる。少年期への追憶、しかし、こんな温い昔を思い出させてくれる店がなくなった。米子にあれば、ぜひ案内してください。

リフトというずぼらなものに乗っている

安藤　寿美子

昔はスキー場でも、一歩一歩登ったものだが、今はちょっと登りがある名所観光地にはリフトがある。ずぼらなものに乗るという表現見事リフトにずばり。キュロットスカートを風になびかせて景色を愛でておられるお姿が目に浮かびます。

女尊男卑かけこみ寺が入れかわる

石川　侃流洞

ずばり今の世相をつかんだ句。定退と同時に、妻から離婚を宣言された夫はどこに助けを求めたら？

悲しいほど弔辞の嘘に飾られる

中川　滋雀

柩の中の故人が苦笑しています。現代形式主義をずばりキャッチした見付けに感服。

七つ若い妻がにんにく買うてきた

槇田　英詩

お父ちゃん、近頃、元気がないと案じている奥さんの気持が切実に…。とりようでは非常に幅のある句。男性がんばれ、そうそう今年は路郎賞も川柳塔賞もオール女性でした。

投げ返す石がポッケで風化する

赤川　菊野

人間に幅ができたとでも申しましょうか。角がとれて自己反省の修養の結果の境地。

鍵掛けぬくらしがくにでまだ出来る

石垣　花子

現在のユートピア、一度訪れたいですね。住んでいる人の円満な顔が目に浮かびます。

石橋を叩く間に逃げた運

青枝　鉄治

残念！ちょっと慎重すぎました。時代のテンポは、早くなっています。決断力の不足？次の機会を待ちましょう。

久し振り逢うた友より若かった

宮崎　シマ子

女心の本心、願望をズバリ。その若さをいつまでも大事にしてがんばってください。

ガムに似て味はいつしか無き夫婦

長谷川　春蘭

夫婦お互いに長命で、幽玄の域に達したお姿と拝察します。味は無くとも、香しい匂いの残る夫婦像、幾多の苦労を乗り越えたこの境地はお二人の努力の賜物と言えましょう。いつまでも仲よくお元気なことを祈ります。

スペースの都合で句だけを記します。

キープしたボトルに自由奪われる

松川　芳子

預かった孫に宿題ついてくる

茂見　よ志子

古手紙　恋の化石を見るように

佐藤　奏月

甘い話へ片足だけを乗せておく

小池　しげお

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

桜井千秀

近付いて見れば鬼にも泣きぼくろ

藤井高子

どのような強い意志を持っている人でも、他人に知られたくない脆さがあるはずです。近付いてそれに触れた時、この人にもこんな弱い面があったのかと、その意外性にびっくりする。泣きぼくろがくっきりと印象付けられたことにより、その驚き振りが窺えます。

母の手に悔いを溜めてる返し針

野村京子

要所要所での返し針には、女の業が溜まり込んでいるに違いないのです。母の生きざまをずーと見て来た作者、そんな返し針の跡はそっと労わってあげたいとお思いでしょう。母と娘の絆がひしひしと伝わって来ます。

鳳仙花思いのままにはぜて行き

野瀬昌子

今までは、はじき出されるのを唯待つだけ・だった鳳仙花の種も、自由に、自分の思うがままに飛び出して行く時代になったのです。私たちも古い風習にとらわれないで、いろんなことに挑戦すべきなのです。思い切って。

陰口を言われるうちは脈がある

山口三千子

いいじゃありませんか。言いたい人には言わせてあげたら…。確かに人の口に上らなくなったらもうお終い。脈のあるうちに、精々羽根を伸ばして噂の種を蒔いてみたら…。

余命より預金の残が気にかかる

大西文次

余命なんてどんな偉い神様にも、解りません。だから心配するだけ野暮。でも預金の残高は通帳を見れば、一目瞭然です。調子に乗っての無駄遣いはお心得くださいね。

しなやかな妻の手綱がほどけない

中山おさむ

しなやかな手さばきを甘く見てはいけません。手品師のような妻の手にかかったら、どうする術もないのです。ここは我慢、我慢。

ベテランに聴いて心が楽になり

菅田かつ子

知ったかぶりに教えて貰っても納得できない。くどくど回りくどい説明はこっちから願い下げにして、そこは餅は餅屋に。それで万事OK。すーとすること間違いなし。

通せんぼしている方が泣いていた

森山健歩

「天神さまの細道じゃ」「どうぞ通して下しゃんせ」。頼んでいる方が泣いているのではなく、通せんぼしている方が泣いている。余っ程の事情があるらしい。通せない訳が話せる位なら泣きはしない。この涙には世の中の義理の重さが含まれているのでしょうか。

子に出合い咄嗟コノヒトオトモダチ

遠山夏生

こんなに慌てふためいたことも珍しいのではありませんか。「コノヒトオトモダチ」とのカタカナに、それが表現されている。さぞ上がりっ放しで、ちょっと見苦しい感じだったと思います。さてこの結末は？

子は鏡　かがみが憎い事を言う

美浦美代子

この夏婦省した娘が出合い頭に「まあ、お母さんすっかり皺が増えたわねーびっくりしたわー」と言うのです。子は鏡、その鏡から一番気にしていることをずばり言われたのですから、なんと憎い事をと思いました。でもやはり鏡は正直だなあ…と感心もしたり。

下心あるので椅子は浅く掛け

吉村一風

そうです。あまり深々座り込んでいたのでは、さあの時の間に合いません。話合いには潮時が肝心。適当に逃げることも考えて。

結び目がとけた所で昼にする

富坂志重

やっとほどけた結びこぶ。本当にご苦労さま。ゆっくりと昼餉召し上がってください。

銀河系

河内天笑選

鳥取県　新家　完司

ある時は鯨になって群を出る
今日もまた脳細胞が消えてゆく
株暴落おちつくとこへおちついた

岡山県　矢内　寿恵子

満天の星とひととき流れよう
散華した命　美学とせぬように

和歌山市　青枝　鉄治

甘くみたカード墓まで追うてくる
名水と言われポンプのフル稼動

青森市　工藤　甲吉

敬老の日を忘られた歌手唄う
臨月の腹を抱えて生コン車

弘前市　波多野　五楽庵

異人館キリストに似た人が住み
うつむいて下着売場を通り抜け

堺市　中川　楓

ブレーキを妻にまかせてまた走る
旅の途中で赤い絵の具を足している

鳥取市　西村　黙光

約束は腹の底からするもんだ
天も地も金の亡者がわやにする

名古屋市　藤井高子

哀しみを洗うて酒の寡黙なる
くしゃくしゃの笑顔でなさけ贈られる

藤井寺市　高田　美代子

昭和史の影曳きずって逃げられぬ
代役の椅子で上向く運拾う

倉吉市　渡辺　菩句

人間が住む星も一ついりまっせ
ハンドルを握っておしゃべりをするな

和歌山市　福本　英子

ああ都会ビルが浮いてる水溜り
常識の枠が邪魔する山の宿

羽曳野市　吉川　寿美

ひとつ捨て一つ拾うた処世術
少し嘘まぜて人生面白い

大阪市　桝本　路児

笑ってる閻魔はことに恐しい
あの女　肉食獣の目をしてる

米子市　政岡　日枝子

結び目を解いて仲直りをしよう
妥協せぬ時計　柱で鳴っている

守口市　結城　君子

じっくりと動かぬ聴診器がこわい
余生です　いざこざ無しでいきましょう

和歌山市　田中　輝子

思い止まることを教えてくれた月
大きいヤマひとつ越えたら鳥になり

海南市　三宅　保州

何もかも一緒へそくりだけは別
ぬり絵からはみ出た分が個性です

倉敷市　井上　富子

大変な時には居ないうちのひと
評判の女たらしと斜向い

川西市　松本　ただし

ぶっちゃけた話に湧いた宿浴衣
正論は玉虫色を好まない

和歌山市　上西　幸子

軍服の遺影平和の灯を知らず
果てしない海に私の青い鳥

大阪市　山北　三三三

一度限りと思うこの世が忙しい
塩漬けにしていますとは株のこと

岸和田市　三輪　通彦

ウーマンの非婚願望ふえてくる
残業が減ると中流維持出来ず

和歌山市　堀畑　靖子

畳には箒わたしを押し通す
半泣きの肩へ追いうちかける風

岸和田市　島崎　冨志子

六十路過ぎあちこちネジがゆるみ出す
住んでいる我が家を値踏みする他人

倉敷市　田辺　灸六

自分しか出来ないなどと思いこみ
肩書がいつまで欲しい猿のボス

大阪市　神夏磯　典子
出る杭になって反応たしかめる
一枚の絵から脱皮を考える

鳥取県　鈴木公弘
それからも教練の笛なり止まず
口裏を合わせて結ぶ手が寒い

米子市　光井玲子
ペットまでグルメブームに乗せられる
振る舞いに乗って思わぬ落し穴

西宮市　奥田みつ子
古い話たくさん持って姉と逢う
どしゃ降りに半分流すわだかまり

和歌山市　木本朱夏
自転車が好きで免許は持たぬ主義
封切りの秋にわたしの彩を選る

宝塚市　丸山よし津
休日の方が過密な予定表
修羅越えて居直りの術　身につける

和歌山市　堀端三男
黄金の波の向うは無人駅
天の邪鬼きめて苦手をやりすごす

西宮市　西口いわゑ
叱り上手おだて上手に乗っている
台風一過コオロギ同じとこで鳴き

弘前市　村田善保
海鳴りへ津軽三味の音溶けてゆく
こだわりを捨てると蒼い空になる

大阪市　松尾柳右子
野良犬を師走の風が剛くする
結納も入り娘は他人めき

堺市　小西小雪
一日を二言三言　夫婦です
木犀の香に酔うているいわし雲

寝屋川市　平松かすみ
洗濯機　夫のパンツもご一緒に
ピーマンの辛さおへその辺りまで

鳥取県　乾喜与志
足を鍛えて白寿の夢が近くなり
大嘗祭の宴をすなおに祝います

寝屋川市　宮尾あいき
消えかけた残り火あおる彼岸花
冬の蚊よさあ安楽死させてやろ

吹田市　山本希久子
翔ぶ夢を持ってあひるの列に居る

和歌山市　山口三千子
いざと言う時は正面から逃げる

米子市　八木千代
抱き人形やっぱり箱に戻される

和歌山市　後藤正子
両肩の軽さに堕落してしまう

和歌山県　西口忠雄
久しぶり妻と意見が合いました

有田市　松井かなめ
幅跳びをした遠い日の喝采よ

米子市　新正子
夕陽からもらう別れのテクニック

佐賀県　寺中三枝子
しんしんと冬西瓜哀しい顔をする

米子市　小村てい子
貞淑な人とは話くい違う

岡山県　荻野鮫虎狼
秋日和誰も来ぬので草を抜く

鳥取県　江原とみお
汗かいて鄭重な嘘ついてはる

川西市　野村静雄
同情と惰性で妻が居てくれる

米子市　林荒介
弛緩してゆくワンルームの音楽

米子市　金山夕子
ステーキが噛めなくなったお父さん

今治市　藤本のぶ夫
地獄までころんでやるか夫婦独楽

和歌山市　山田高夫
背伸びして無理に合わせる肩の位置

寝屋川市　岸野あやめ
会者定離　紙縒ぷっつり切れました

砂川市　大橋政良
遮断機が上がると雪が降っている

尼崎市　春城武庫坊
無造作に着て二枚目に艶がある

高槻市　川島諷云児
固まって泳ぐしかない雑魚の群

大阪市　津守柳伸
終点に温泉があるハイキング

熊本県　立道善太郎
チンプンカンでもありがたい三部経

吹田市　栗谷春子
も一人の私に叱られてばかり

堺市　井上たかし
やんわりときつい取り立てする女将

岡山県　富坂志重
本音吐き合えばとても寂しくなる

姫路市　福本好花
息子の部屋の男臭さにこわくなり

箕面市　岩津ようじ
撫でられてかえって痛む傷もある

米子市　沢田千春
矢印はないが只々歩くのみ

鳥取市　武田帆雀
抜きません斬っても斬られても痛い

尼崎市　春城年代
とっても買えぬ値段安心して覗く

倉吉市　野中御前
風よ吹け君なら森を動かせる

出雲市　竹治ちかし
つまずいた石には亡父の顔があり

岡山県　清水悠貴女
晩成の男に潮が満ちてくる

和歌山市　森　茜
ほこ先をすこしずらした牽制球

米子市　中井ゆき
ハンドルをふっと放して見たくなる

藤井寺市　中島志洋
LLにじっと耐えてるハイヒール

岸和田市　古野ひで
ペーソスを秘めたピエロの厚化粧

出雲市　園山かおる
散り際はこうだと椿落ちて見せ

米子市　茂理高代
弱虫の巣に流れ矢がよく当たる

和歌山市　内芝登志代
社会の水に馴れた息子が他人めき

出雲市　森山健歩
ゴルフする汗と奉仕をする汗と

姫路市　丁坪サワ子
地雷火を埋めて平穏　嫁と姑

豊中市　田中正坊
自動巻きの時計でいつも休めない

堺市　山本半銭
仁丹をだまってくれる友と旅

伊丹市　樫谷寿馬
振り向けば独りよがりの多きこと

大阪市　板東倫子
テクニカルノックアウトで恋終る

堺市　桜沢あか里
難関をパスしてからの遠い道

寝屋川市　江口度
あきらめか悟りか友の遍路笠

唐津市　久保正敏
脱税も賄賂も申告洩れで済む

唐津市　筒井朴竜
人助け死後くれてやろ腎バンク

和歌山市　坂部紀久子
滑稽に見える議員の胸バッジ

広島市　中村要
癌に勝ちアルツハイマにしてやられ

唐津市　浜本治幸
台風を心待ちする熱帯夜

大阪市　藤田頂留子
街並をでこぼこにするビル工事

田辺市　染道佳明
不倫ふりんで儲けてる週刊誌

米子市　服部朗子
故郷につんとすましたビルが建つ

米子市　小西雄々
自分史に深い傷あり反戦歌

門真市　藤田翔
賽銭に三パーつけて願を掛け

福岡県　横地正好
使い捨ての嬌りを叱る焼却炉

熊本県　増田一乗
底力出しJRよみがえり

堺市　高橋千万子
飛行機で修学旅行飛んで行き

大阪市　中西兼治郎
学校の門扉スイスイ赤トンボ

羽曳野市　福田悦子
統一に光と影のあるドイツ

岡山県　江口有一朗
武器支援されて平和をかき乱し

京都市　松川杜的
夕焼小焼ビルの向うでしています

芦屋市　根来　敬
反対ばかりせんで缶なと拾うたら

守口市　森川　まさお
集金に行くのに赤い羽根をつけ

唐津市　仁部四郎
コーヒーを飲みにと妻が出たっきり

岡山県　伏見すみれ
底辺に住んで嘘などつけぬ性

大阪市　町田達子
縫いぐるみのような小犬がよく吠える

兵庫県　北川とみ子
聞き役に回り言葉の裏を読む

兵庫県　遠山可住
酒が飲めんとは情けない婿殿だ

唐津市　山口高明
ミシン踏む側で夫が不貞寝する

今治市　月原宵明
路地裏が逃れきれない温い風

和歌山市　古久保和子
顔しかめながら悪口楽しそう

鳥取県　西原艶子
男の中の男で居たい貌してる

堺市　神原文
扇風機しまう億劫だと思う

出雲市　吉岡きみえ
おつむてんてんうすい頭を叩いてる

高知市　北川竹萌
ここまでと言葉のみこむ喉仏

岡山県　松本元江
雨の日は雨に懺悔をしています

堺市　近藤豊子
姿見に華やぎのこる媼の部屋

唐津市　浜本ちよ
民謡の耳に息子のジャズも良し

唐津市　浜本義美
納得のゆくまで撰って買わず去に

出雲市　小玉満江
稲刈機どうもえんこが好きらしい

和歌山市　粉川道子
命乞いされて思案の千羽鶴

羽曳野市　芦田絢子
評論家が一人集いを白けさせ

豊中市　田中道胤
藪から棒回り回ったつけが来る

倉吉市　奥谷弘朗
佗しさは他人の心ばかり読み

弘前市　真喜内實
好きなことする最高のいい休養

宝塚市　末次真
美しく枯れきって散る葉に思う

貝塚市　行天千代
朝顔の大きな種に夏終る

米子市　林瑞枝
風の街　銀杏がロマン抱いて降る

枚方市　森本節子
花の香に襖をあけて眠る夜

兵庫県　酒井靖子
月の出に合わせ詩人の顔になる

広島市　名和喜一郎
補聴器を外し仏と対座する

岸和田市　芳地狸村
花博へ妻を運んだ車椅子

寝屋川市　堀江光子
ひと夏の恋の挽歌か土用波

吹田市　藤村〆女
花いちもんめみんな白髪の友となり

尼崎市　住谷石舟
ひっそりと老妻が謀反を企てる

唐津市　山口ふさ子
好きな色染めて逝きたい老い独り

宇部市　江本久女
青春を語る傘寿の目も燃えて

唐津市　田口虹汀
名月と尾花の長いおつき合い

豊中市　安藤寿美子
もくせいが香りどこかで亡母が呼ぶ

鳥取県　土橋螢
また冬が山越えてくる薪を割る

鳥取県　さえきやえ
台風一過森の水子に逢うてくる

茨木市　堀良江
話したげに小首かしげる赤とんぼ

西宮市　瀬尾六郎太
素朴なる宿屋に似合う木看板

今治市　渡辺南奉
ふと我に戻るお寺の鐘が鳴る

▼投句は、毎月15日までに川柳塔事務所へ。

女性コーナー

黄香の忠

八木千代選

秋の彩にまぎれて遠い駅に着く

和歌山市　後藤　正子

野の草を吹き分けて風が冬に向かいます。山々の景色も空を行く雲もみんなみんな秋の彩です。人の往来も言葉すくなに、何処まで行く身にしても目立ちません。秋の中にすっぽりと包まれているからです。遠野からしのびよる冬の音も聴きながらの、さびしい重い旅が続いています。大きな袋の中身を出したり入れたりして、少しずつ軽くしていって、秋風にまぎれるように、こんな遠くの駅に立っているというひそやかな情感が、読み返すほどにひたひたとにじみ出てきて、私の中にも果ての駅の景色が届いてきたのです。

階段を降りてくるのは誰ですか

松江市　竹内寿美子

二階には誰もいないはず。それなのに確かに聞こえるしのびやかな足の音。いったい誰なんでしょう。読むほうも不思議になってきます。払い切れない過去の中の音かもしれません。迷いから抜けられないでいる今の心に、何らかの助けを渡すために降りてきてくださった神様の足音ともとれます。幅のある川柳なので、どう受け止めればこの句のこころに近づけるだろうかと、わたくしも真剣で向かっています。ただ全体からの感じが、優しくて静かな調べなので、これは明るいほうへいざなう音だと響いてくるのです。

あっさりと流す、得意技ではないか　堺市　板野　美子
傘立てで傘はとっくに乾いている　堺市　山本　半銭
かりかりと歯の音がするけもの径　倉吉市　野中　御前
何処から何処へきめてはいない秋の旅　出雲市　石倉芙佐子
わたくしの罪嗅ぐように犬の鼻　和歌山市　堀畑　靖子
いい友でずっと居れそうポストとは　大阪市　西出　楓楽
姫鏡　嘘にこだわりすぎないか　和歌山市　西山　幸
住みついた風の噂が出てゆかぬ　米子市　中井　ゆき
許せない縄が少うしずつ弛む　大阪市　神夏磯典子
わたくしに経文くれた秋の蝿　米子市　林　瑞枝
物語のごとくに煙たなびくよ　寝屋川市　宮崎　菜月
野仏の流す涙は雪になる　北海道　山田すみ子
初恋は虹にくるんでおきましょう　寝屋川市　平松かすみ
赤ペンで嬉しいことは書いてある　鳥取県　田村きみ子
やさしさが尻尾の先で揺れている　名古屋市　藤井　高子
銀行がいやに目立っている町だ　松原市　佐藤　奏月
お伽噺の続きは鬼にくれてやる　島根県　松本　文子
子宝へ幕引きの手は不足せぬ　米子市　石垣　花子
るす守る時計　手錠のようにはめ　岡山県　富坂　志重
かまきりはきっと乱れぬ食われても　堺市　神原　文
雨漏りの壁の涙に嘘はない　米子市　金山　夕子
つるし雲やがてやがてのまま消える　藤井寺市　高田美代子
しばらくぶり夫に愛をあげましょう　大阪市　田中　弘子
もつれ糸ほぐす温みのあるうちに　和歌山市　桜井　千秀
つづら二つ　聖人の手が迷う　富山市　舟渡　杏花
喪が明けるって悲しい言葉だと思う　羽曳野市　芦田　絢子
責められているのか空気うすくなる　富田林市　池　森子
内ふところの薬に覚悟告げてある　米子市　政岡日枝子
胡桃固し　古い女と言われても　羽曳野市　吉川　寿美
割り切れと言うた私も割り切れず　吹田市　藤村　〆女
走馬灯の祈り　極限を知らず　米子市　坂口　一江

殺人の原因そこらにある話　堺市　高橋千万子
花が散る　昨日の罪は埋められず　岡山県　漬水悠貴女
こんな時　何をしたなら逃げられる　河内長野市　植村　喜代
刃こぼれの好きな鋏と庭に立つ　和歌山市　福本　英子
月の矢の届かぬ速さ毬走る　米子市　川上より子
パントマイム犬と私の長い影　枚方市　森本　節子
亡父に似た人がこの世にいるものだ　鳥取県　西原　艶子
静けさへ言葉を一つひっこめる　和歌山市　森　茜
喉が渇いてコイン一つに救われる　米子市　寺沢みど里
痛そうなヒール　隣にいる電車　大阪市　新井　朋子
弟と不仲そのまま萩こぼる　尼崎市　春城　年代
保身術こころ得ている格子窓　佐賀県　寺中三枝子
ふり向くと夢も消えますわたくしも　岡山県　千原　理瑛
せめてなら明るい笑顔作りましょ　和歌山市　木本　朱夏
ほんとうに涙流して泣いてはる　茨木市　堀　良江
仏様と話す　命のつつがなし　岡山県　矢内寿恵子
水甕に水が溢れて亡母に逢え　倉吉市　淡路ゆり子
一滴の蛇口の漏れがあるわたし　松江市　安食　友子
天のこらしめか切ない業に会う　米子市　服部　朗子
道草でだんだん人間らしくなる　和歌山市　内芝登志代
音の出ぬ笛だが力いっぱい吹く　米子市　茂理　高代
ひとりごとの時代はメモを取っておく　貝塚市　池田寿美子
夢売りが素通りをする冬枕　岡山県　山本　玉恵
反応の鈍い男にトライする　和歌山市　山川　克子
里ごころのひとつに木の香恋しくて　八尾市　宮西　弥生
まんじゅうのグラム計ったことがない　広島市　森田　文

丸腰の私へ攻めてくるうわさ　和歌山市　古久保和子
吉報を届ける役目引き受ける　米子市　足立由美子
肩の荷を下ろしたような秋日和　吹田市　栗谷　春子
我儘の宿る枝なら持っている　兵庫県　倉垣　恵美
仮縫いの鏡はお世辞使わない　守口市　結城　君子
ピカピカに磨かれている霊柩車　千葉県　上鈴木春枝
亡夫に逢う水引き草の咲く小路　岡山県　松本　元江
玉子割りながらむごさをふと思う　米子市　新　正子
留守番へ落ち着かぬ椅子ばかりなり　西宮市　西口いわゑ
さよならがつらくてしゃべりつづけている　大阪市　本間満津子
若くないから美しい恋しよう　大阪市　板東　倫子
約束を残した道へいってみる　鳥取県　さえきやえ
火の鳥になろうなれない齢を食う　米子市　小村てい子
わたしって馬鹿ねと女嬉しそう　寝屋川市　岸野あやめ
シャボン玉のような小さな幸でいい　鳥取市　小谷美っ千
泳いでいる素顔が一番正直だ　西宮市　門谷たず子
私の負け　あなた大きく見えるから　和泉市　中川　楓
夕鶴に似た女が来る秋の夕　寝屋川市　井上すみれ
酔芙蓉少し気まずい昼の月　出雲市　園山多賀子
萩　桔梗　おんなごころはすすきの穂　大阪市　津守　柳伸
許されて白い祈りの年の暮れ　竹原市　信本　博子
耳もとで娘がいい事を告げて去ぬ　姫路市　中塚　遊峰
癒えてのち会う人すべて輝けり　米子市　大田みさと

◇

▼投句先　〒544　大阪市生野区勝山南1—18—10
小出　智子（ハガキに3句）

ひみこさるん

何が一番大事か

信本博子

最近、体の不調を感じ、いつ死がやって来るかも知れぬ不安から、自分の一番したいことは何かと考え、旅に出た。

約一か月間、九州、山口、四国、大阪、東京、信州と、旅から旅をした。それは若い時の夢だった。見たり、食べたり、湯に入ったり、とても楽しい日を送ったけれど、不思議に梅干し入りのおむすびが欲しくなったり、思い出は、見知らぬ人の親切と、優しい言葉だった。私が求めて旅をしたのは、美食でも、きれいな衣服を着ることでも、珍しいものを見ることでもなかったような気がする。

先日、恩師が昇天された時、私たちに遺産として残して下さったのは聖書のお言葉だった。「自分を愛するように隣人を愛しなさい」というルカ伝だった。簡単なようで実行をするとなると難しい。なお、イエスキリストのお言葉に、「愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。誇らない、不作法をしない、愛は高ぶらない、いらだたない、恨みをいだかない、不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを耐える」とある。

物質よりも目に見えぬ「愛」こそ、人間にとって一番大事なのではなかろうか。

花言葉知らなくてよいみんな愛　博子（旧作）

私の大事なもの

津守柳伸

人恋し人煩わし波の音

西尾栞主幹の句ですが、いつも私の脳裏を離れようとしない一句です。

謡や狂言の好きだった父に連れられ、神戸下山手通りの能楽堂への往き帰り、必ず俳句を作らされるのを重荷に感じながらも、雪の日にマントの袖で握られていた手の温みは、半世紀過ぎようとしている今も忘れられない一コマです。

六甲道八幡商店街で、㊐津守呉服店をわりに手広く奉公人三人と六人姉妹、病弱な母を抱えた父の憩いは、幼い私の手を引いて狂言を観に行くのが、煩わしさを逃れる唯一の手段だったのかも知れません。

お正月には皆に振り袖を着せて、店には金屏風に名刺受けを置いて、同業者やご近所の方たちが紋付袴で年始に来られ、私たち姉妹はまるで大奥のお姫様的存在だったようです。

時代とともに呉服も切符制になり、店員も召集されたり、店も防火用水池にするとかで強制疎開になり、戦災やら気がつけば私たち四人姉妹だけが戦後の荒海に取り残されていました。

小中学生の妹三人を連れて長姉の辛苦は、子供心にも分かったのでしょう。姉妹共通して世話やきが少し過ぎる性格に育ちました。

私の大事なものと言われましたら、即座に「友人」と答えます。有形の物は人の心を変えますし、無くす恐れもありますが、真の友は陰に陽に支え合い励まし合って、まだまだ未知の世界を開拓できる可能性を秘めています。良い意味で柳友をライバルに見立てて。

今年は病魔に魅入られましたが、来年こそは頑張ります。

ほほ笑めば微笑み返す野の仏　柳伸

路郎賞・川柳塔賞の風に吹かれて

田中透太

川柳も俳句や短歌と同様に、作句の喜びと鑑賞の楽しみをもつ。作句意欲をかきたてるような句に出会うと、うれしくてたまらない。しばらくはその句を口誦しながら〝いのちある句〟として胸に刻む。人間が好きになり、川柳をやっていてよかったと思う。

『番傘』誌九月号の近詠鑑賞で、柏原幻四郎氏が次のようなことを書いておられた。

「良い作品とは、なにか。答は、人によってさまざまに違うであろうが、その人に会ってみたくなる作品だ、と私なら答える。

会って、どうする。別に、どうもしない。顔を見る。声を聴く。多分、その人の住む町の駅には、来てよかったと思わせるような風が吹いているであろうから、その風にしばらく吹かれて帰る…」。

路郎賞・川柳塔賞の受賞句、推薦句は、万余の句の中から選りすぐられた秀句、佳句である。当然、一句一句、おろそかにはできない。趣きの異なる句、自分好みの句、おのずと鑑賞にも力が入り、それが選外の句にまで及ぶ。私は、そんないい風に吹かれて、川柳冥利のときを過ごす。

十月の本社句会で、「二賞」の受賞者のみなさんにお目にかかったが、みんないい顔をしておられた。

雲に来てひばりはやっと巣を想う

詩情豊かに、格調高く、母性を詠み、人間の年輪を感じさせる句を作られた栗谷春子さんは、想像していたよりお年を召しておられたが、かえってそれが句と相まって、とてもうらやましく、うれしく感じられた。

それにしても、今年は「二賞」ともすべて女性が手にされた。内心、男性よ奮起せよ！と檄をとばしている方もおられるだろう。特に、川柳塔賞は昭和56年以来、女性である。

女性作家の作句向上の理由はいろいろあるだろうが、一つには、「茴香の花」が考えられる。この欄は、女性作家の句を競う場として設けられた。智子、千代の二人の個性の異なる好作家が交代で選をしておられるが、その適確で鮮度のある秀句鑑賞は、大いに作品の向上を促していると思われる。

今一つは、女性の社会的地位の向上と「自立」が確立されてきたことである。このことは、社会や人間の見方、とらえ方が、もはや受身ではなく、能動的で積極的になり、それが川柳に反映され、女性の感性がいっそう研ぎすまされて、深みと幅のある人間凝視の句が作られるようになったと思われる。

作家、田辺聖子さんが『古川柳おちぼひろい』のあとがきで、興味ある一文を書いておられる。

「古川柳になじんでいると、人間を見る目のあたたかさが養われる気がします。

私はことに、女性に古川柳の研究を趣味とされることをおすすめしたいと思います。川柳と言うものは男性的発想の産物であり、われわれ女性が馴染むことによって、思考のバランスがとれるような気がします。——と言うより、楽しくおかしく、やがて悲しい世界なのです。「この悲しき」は「愛(かな)しき」といってもいいでしょう。こんなすばらしい宝庫をほっておく手はありません。

江戸時代の酷烈な言論思想統制のもとで、古川柳の作者たちは、告発の刃を人間の内部に向けました。古川柳にみる鋭い人間凝視や客観性を、私は興ふかく思います。

それは、社会の矛盾をあばき、時代の政治を批判するという外向的発散を超え、人間の内なるものを鋭い歯で噛むものでした」。

女性作家がどれだけ古川柳に馴染んでおられるかはわからないが、そうなればさらに面白い、機微に富んだ人間諷詠の川柳を生み出されることだろう。

路郎賞、川柳塔賞の風に吹かれて、私は、そんなことを思い、感じた。

特別

筒井朴竜選

特別にお酒が美味い秋戸口　清水
次期狙い特別寄付でコネつくり　一乗
特別に助力が欲しい隠れみの　軒太楼
トイレあるだけで特別室と言う　宵明
特別の話無いがと惚気られ　木魚
駐禁へ特別がない赤キップ　愛論
特別に好きなお酒をとめられる　温子
太り過ぎ別注の服もう合わず　文
特別な仲で目と目がものを言う　義美
陛下さえおほめになった松浦潟　高明
特別の扱いをせぬ思いやり　希久子
死んでまで特別という窯があり　虹汀
特別な好意が怖い寡婦の城　正敏
人間は皆特別な人ばかり　新一郎
特別で育ち心の友が無い　あずき
天下り特別職の公務員　倫子
特別な仲と合鍵知っている　佳雲
招かれた特別料理食べ切れず　姫女
特別の厚意に胸が思案する　智加恵
子の帰省特別メニュー母の味　博子
特別の配慮があって義理ひとつ　右近
イブニングドレス特別嬉しい日　豊
特別な扱い里が他人めく　京子
還暦の特別赤いチャンチャンコ　しげお
特別に育てて咲いた花のエゴ　元江
嬉しい日　山も特別高く見え　みつ子
特別の中と見られたティールーム　理瑛
病院の特別室に冬の蠅　保州
特別な部屋で待っている火葬場　規不風
亡夫のいる星座私の指定席　寿恵子
特別な気遣い恋が匂うてる　艶子
万雷の拍手お成りの貴賓席　光子
特別にされて正座がくずせない　たつみ
よめはんに家事の特訓受けている　正坊
特別の開扉に秘仏笑み給う　蕗児
あんただけ特別殺し文句言う　柳五郎
特別の善意が欲しい年の暮れ　ろ亭
特別視される孤独の風当り　雀踊子
金蓄めて特別席が欲しくなる　可住
特別席等おまへん縄電車　杜的
どの子にも特別はない握りめし　忠雄
特別な情けはこばむ痩せ蛙　雄々
特別の主義は持たない太い指　和子
特別という扱いは大嫌い　螢
特別な人に逢う日の紅を選る　いわる
親友は特別席へ案内しよ

助ける

奥山美智子選

ペンを持つゆとりの雨に助けられ　多賀子
助けられた命一途に奉仕する　富子
手助けにならぬ幼児と菓子造り　澄子
沈黙へ電話のベルに助けられ　いわる
神さんが助けてくれた事に決め　ただし
助けられ今日まで生きた日記帳　昌子
助かると信じてお経読んでいる　螢
子を救う医学に倫理などはない　ちかし
助走路でゆっくり風を待っている　みつ子
四面楚歌　天の助言が届かない　高夫
一徹な父のヒントに助けられ　春枝
原点に位置して助ける如来像　博友
損得を天秤にして助けられ　弘朗
沈む気をナースの笑みに助けられ　敏之
助けると思った金が仇となる　杏村
どんぞこで受けた援助は忘れない　正坊
躓きをお国訛りに助けられ　和子
人助け結局　金でケリがつき　繁男
法律が助けてくれる訳でなし　不二
運命の助けも借りて永らえる　文子
ちから貸すだけで善人　金が無い　雄々
友情が何より私の助け舟　理瑛

助けてと言えぬ男の意地がある　佳雲
影だけがちらりと母の助け舟　かおる
ライバルが助言をくれた屋台酒　恭昌
うかつにも乗ってしまった助け舟　清柳
助けたいけれども生きるのはあなた　渓声
笹舟を漕いで助ける母の愛　夢之助
頃合いに横から母の助け舟　白光子
傷心を夕陽の色に助けられ　どんたく
他人は他人助けはいらぬかたつむり　寿美
ロボットがきっと助けに来てくれる　恵美
助けてくれたはも一つの影法師　杜的
手助けはいらぬ私の守備範囲　雀踊子
人間の弱さでお祈りばかりする　寿恵子
側に居るだけで気持が助けられ　明水
無心せぬから助けたくなってくる　重人

佳

補助席の人生でしたわが生活　ちよ
サラ金の助け一気に冬がくる　たつみ
錠開けて助ける術を考える　芙美子
父の樹はいつも助ける位置に立つ　富恵
助け合う胸にさわやか赤い羽根　十四郎

人

昨日までの敵を助けるパンを練る　可住

地

助けたら君は一生泳げまい　しげお

天

助けたり助けられたりして夫婦　度

軸

助けあう嬉しさ恙なく暮れる　しげお
神様へも一度頼んでおくラスト　きみ子
夕映えのラストシーンに明日がある　愛論
伝言板ラストの文字が怒ってる　敬
ラストからとことゆく亀である　南奉
余命表ラストシーンは君の手で　寿恵子
ラストでは素直に言おうありがとう　重人
ラストにはきっと素顔を見せるだろ　四郎
妻よ待てラストヘビーはとっておく　螢
走っても跳んでもラストばっかりで　虹汀
棺を覆うときまで花に見守られ　妻子
好々爺いう名でラスト飾りたし　典子
スタートの時からラスト画いている　小鹿
ラストのラストにどんでん返しある　みつ子
ラストスパート己が弱気と勝負する　公弘
ラストまで続くか起伏ある小道　正子

佳

ラストシーン元気なうちに考える㊟　文子
ラストでもわたしは今のままでいい　志重
スタートもラストも人間手ぶらです　のぶ夫
一対一の掟重たくなるテスト　杜的
終章の余白はたんととってある

人

ラストチャンス鰻のように逃げられる　枯梢

地

神さまのお口がかたいラストタイム　路子

天

日めくりのラストゆっくりちぎりたい　艶子

軸

ラストタイム少しおまけを貰えそう

ラスト

田中亜弥選

美しいラストを思う夕茜　いわる
ラストには真白い菊にうずまろう　幸子
人生模様ラスト幸せ彩で織る　彩子
ラストらし指揮者の髪が立ち上がり　伊津志
ラストまで切り札取ってある強み　よし津
ちちははの愛をラストになって知る　正敏
ラストイニングまだまだタオル投げられぬ　寿美
ラストシーンだけは覚えている名画　正坊
言い分へラストは親が一歩退く　博子
人生のラストを飾る句も持たず　ちよ
奴の切り札にラストチャンスを与えるな　はるお
ラストダンスもう門限は気にならぬ　達子
終焉に倖せほしい紅椿　雄々
完結のペンを両手で暖める　白光子
土牛逝くラストの富士も描き終えて　たかし
咲きほこる花のラストを乱す風　玉恵
ラストには言いたい「妻よありがとう」　京子
ラストダンスは独りで踊る冬の部屋　元江
カーテンコールに酔って奈落を見失う　保州
ラストシーンただそれだけをまたも観に　遊峰
野の花で良い埋めてほし我がラスト　右近
本命のはずがラストで消えている　通彦

初歩教室

題―末席

辻　白渓子

今月の題「末席」は、末席からの野次や発言と着想が多く、同想句に少し傾いた感があり、残念でした。誰でもがすぐ浮かぶ着想は避けた方が、進歩の早道だと思います。

末席も自動扉は開いてくれ　章久
（末席も同じに自動扉開く）

末席で意見通らぬ血の騒ぎ　芳水
（末席で通らぬ意見主張する）

末席に的をつかれていた会議　洋
（末席の発言痛いとこをつく）

末席の拍手はやけに大き過ぎ　(糀)隆
（末席の拍手が宴を盛り上げる）

末席で居眠りをする太い奴　杏村
（末席の居眠りいびきかき始め）

末席で気楽な酒を飲んでます　和子
（末席の幹事気楽な酒を飲み）

末席で世辞のいらない旨い酒　時弘
（世辞抜きで末席旨い酒になる）

末席が難問出して抜けられず　すみれ
（手古摺らす質問末席用意する）

末席に座れば上座よく見える　ふさ子
（末席の目に来賓が多すぎる）

重役も村に帰れば末席に　吉太郎
（末席へ重役座った村祭り）

おばあさん末席で愚痴ばかり言い　志重
（末席は相手にされぬ祖母の愚痴）

末席に野次のお好きな敵が居る　敬
（野次好きなのが末席にいて困る）

末席に小さく座る影の女　高栄
（目立たないのが末席にひとり居る）

末席が左遷と知った苦い酒　春風
（末席も左遷と聞いて減らぬ酒）

末席にいて天下取り考える　渓声
（天下取る野心末席持ちつづけ）

末席が不意に要所をついている　静子
（末席の発言厳しいとこをつく）

再起への力末席から溜める　(石)美恵子
（再起への決意末席溜めている）

末席でいいから登校続けてや　高雄
（末席で卒業丈夫なのが取柄）

末席に居れば無難と好む人　茂章
（末席の顔おとなしい人ばかり）

末席で次のチャンスを狙ってる　清柳
（末席へチャンス来るまで我慢する）

末席に居ても良いことよくしゃべる　一枝
（口軽いのが末席に居て困る）

末席に遅れて座る保護者会　昭子
（末席の保護者の席が喧しい）

末席に居て皆の温かさをもらう　彩子
（末席へまで記念品配られる）

末席にいても晴れ晴れ父と母　絢子
（末席へ両親感激して座り）

末席の野次はチクチク急所刺し　繁男
（野次りよいので末席に来て座り）

末席で野次る人やら眠る人　はる子
（野次るのが居て末席に落着けず）

末席で満足そうに腕を組み　静江
（末席の気楽さ二本目の煙草）

肩書もとれて末席のんびりと　明吉
（肩書がとれ末席に座り馴れ）

末席も阿弥陀さまには照らされる　幟
（末席へ阿弥陀の慈悲が行き届く）

末席が似合わぬようない発言　昭治
（末席の発言無口見直され）

後詰めを無事に果したしびれ足　君江
（末席でしびれを怺えている正座）

正客が末席好きでもめている　ようじ
（末席へすぐ酌ぎに来て喜ばす）

末席が混み合っている婦人会　志華子
（末席を奪い合ってる女性たち）

末席も上座も区別せぬ仲間　㈢美恵子
（秀才が末席に居るクラス会）
末席の雀は本音知っている　隆雄
（末席の雀とっくに知る本音）
末席で幹事徳利の数をよみ　義
（末席の幹事が銚子出し渋り）
中座する事考えて末席へ　ひさ子
（中座する機会末席考える）
末席に誰が来るかと皆気にし　紫晃
（末席が空いてて幹事気が疲れ）
年のこう末席にいて立たされる　春子
（末席へ座れば幹事すぐ呼ばれ）
末席に甘んじますとこわい奴　みつ子
（末席を固辞し油断の出来ぬ人）
空けてある末席亡母が来て座る　富喜子
（亡母いつも居た末席をなつかしみ）
末席の意見なかなか浮上せず　民子
（末席の意見あっさり無視される）
末席で時々欠伸噛みころす　富恵
（末席でやっと我慢をした欠伸）
料亭の末席で幹事落着かず　廣子
（料亭の末席幹事まだ不馴れ）
末席にお客をすえて披露宴　芳枝
（末席の客やかましい披露宴）
末席で椅子取りゲーム見る余裕　みね
（末席は女性が揃うて席を取り）

末席の議員採決だけ写る　忠禄
（末席の議員へテレビやっと向き）
余興では末席トップに指名され　一乗
（末席から唄い宴会もり上がる）
末席で謝礼の言葉新夫婦　秀香
（謝辞述べる末席夫婦まだ若い）
末席を指定席でと陣取りぬ　芙美子
（末席を女性の席に指定され）
末席で未来の王座温める　和枝
（末席に未来の有望株が居る）
招待されはずんで出たら末席だ　侑里
（末席へ招待されたのが不満）
奉加帳末席らしく書いておく　金吾
（末席へ白紙で届く奉賀帳）
末席でキラリと光る生き字引　しづ子
（物知りが居て末席が妥協せず）
末席で下手な談義が泡を吹く　友子
（末席の談話楽しいクラス会）
苛々と末席抱く黒い金　軒太楼
（末席がいらいら抱いている疑問）
末席で祖父は乾杯除夜の鐘　太一郎
（末席の乾杯祖父へ除夜の鐘）
代理で来てただ末席にかしこまる　保夫
（末席へ代理は浅く腰掛ける）
末席を下戸と芸無しが指定席　㈱隆
（芸無しと下戸末席へ来てならぶ）

忘年会末席の下戸食べに食べ　ちづ子
（末席を下戸は食べたいので狙う）
末席であって料理に舌つづみ　幸枝
（末席も料理とっくに平らげる）
女大出が末席にいてお茶を出し　呼風
（末席へまでお茶を出す女子大出）
末席で料理の味が楽しめる　豊子
（末席の気楽さ料理の味が好い）
とりあえず末席を選る初会議　春枝
（意見ないから末席にした会議）
末席で居眠りしたい休み明け　伊都子
（居眠りをしたいが末席空いてない）
候補者のうちは末席笑顔よし　美代子
（末席へ笑顔を忘れない候補）
貫禄があって末席似合わない　幸枝
末席で不協和音と共にいる　彩子
末席の無口に背負い投げをくう　美恵子
末席にいて人間がよく見える　渓声
末席から出る正論が通らない　敬

私の句

末席は幹事の座に取っておく
末席へ指名が掛かって唄わされ

◇

題「**番組**」　**11月15日締切**（1月号発表）
宛先　〒569　高槻市桜ヶ丘北町3—19　辻　白渓子

■句集紹介

工藤甲吉百句集 北の貌

橘高薫風

川柳塔あおもりでは、会員の百句集を発行することになり、その第一集に工藤甲吉さんの『北の貌』が選ばれた。波多野五楽庵さんの序に、

「ジャーナリストをしていらっしゃったせいか、句の中には正義感あふれるペンの冴えがあり、痛烈極まりない社会風刺も数限りなく存在している。しかし甲吉さんはその反面まことに童顔の好々爺であり、この句集をご覧になっていただけばわかるとおり、一本芯の通った叙情作家で、人情家でもあったのである」と書いておられるように、五楽庵さんの抄出による百句は、甲吉さんの表の顔よりも、むしろこだわりのない一市井人の屈託が、センスある軽みの形で表出されている。

荒武者に似る鱈の貌北の貌

句集の題名ともなったこの句は、

竜飛岬風はひねもす石を研ぐ

のんのんと降りしがらみの雪となる

とともに、厳しい風土に触れている。

折りあらば卵こわれてやるつもり

松茸は贈収賄になる値段

タラバ蟹君とは握手出来んワイ

これらは、ユーモアの味にまぶした作者の反骨が垣間見え、

杜甫に非ず李白に非ず酔いつぶれ

レントゲン我が酒ガメの偉なるかな

の句では、李白の末裔を自認した路郎先生の不肖の弟子であった私には、うらやましいスケールの酒徒ぶりである。

甲吉さんが奥さんを亡くされてからの句には何度も心を動かされたが、この句集には、

妻逝けば地球も落ちてゆく思い

反核の署名へ亡妻の名も加え

などが掲載されている。

二十九頁には、

すずらんや純情無垢も又さみし

人生はよいしょこらさにどっこいしょ

の二句が並んでいるが、甲吉さんの作品のA面とB面を見る思いがする。甲吉さん生涯の集大成ではなく、晩年の一面を浮き彫りにした甲吉さん風呂上りの一齣のような気分の百句集である。

句集を読みながら、去る八月三日、熱気のるつぼの中でビールのコップを傾け、勇壮なねぶたを見物した夜の甲吉さんのやさしいまなざしが浮かんで消えない。

お知らせ

同人費・誌代を郵便振替で送金された場合、いままでは領収書を発送してまいりましたが、会計事務簡素化のため、平成3年4月からこれを廃止したいと存じますので、ご諒承をお願いいたします。

なお、現金または郵便為替で送金された場合は、従来どおり領収書を送らせていただきます。

川柳塔社会計部

「茴香の花」選者交代

「茴香の花」欄の選者は、平成3年1月号より八木千代さんから小出智子さんに交代します。

したがって投句先は、選者の自宅（〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10）へお願いします。

川柳塔社

北川竹萌集
藁稭（わらしべ）

橘高薫風

北川竹萌さんは大正元年生まれ、八十歳に近いが、生涯独学力行の人である。このたび近代文芸社から句集『藁稭』を出版された。

竹萌さんは高知県の公立青年学校の教員や地区農業改良普及所に勤務のかたわら、好きな短詩文芸をたしなまれる。

句集の命名が何よりうれしく、親しみを覚えさせる。

藁稭に托した夢の人生譜

教え子に先を越されてうれしい日

鮎逃げて香の残りたる指見てる

出迎える猫は尻尾を高くあげ

素朴な写生と実感からの腰の据わった詠みぶりは、家族に触れて温かい句が多い。

孫が手を引いて呉れたわクリーム屋

毬のよな返事が返る孫になり

酒一合飲んで二合を喋り出す

母心ついトラブルのもとになり

母一人赤いカンナの炎える家

かつて、佐川町の桜の下で杯を交わし、大会の席でも何度か顔を合わせたことのある竹萌さんは、その作品からしのばれるように、地味に訴えていつまでも印象に残るやさしい「おんちゃん」である。

川柳塔社常任理事会（11月1日）

▽会計部から新年度会計の勘定科目について説明、了承。

▽平成3年4月から同人費・誌代の振替送金の場合、領収書を発行しないことに決定。

▽常任理事会の各部構成（職務分担）について審議、決定。

▽正本水客氏の辞退に伴い、路郎賞選考委員に阿萬萬的氏を決定。

▽『川柳大阪』50周年記念川柳大会（平成3年3月3日）の後援を承認。

▽坊農柳弘氏（大和郡山市）の同人推薦承認。

▽新年おめでとう会の要項を決定。

川柳塔わかやま吟社から
創立二十周年内祝として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

日本全国川柳叢書　第12集

北川竹萌集—藁稭（わらしべ）

近代文芸社刊　B6判・98ページ

頒価 1800円（送料共）

申込先　〒780　高知市縄手町65－2（電0888－73－3661）

北川竹萌

★着金次第、送本させて頂きます★

本社　十一月句会

十一月七日(木)午後五時半
メンズファッションセンター

秋冷ということばがふさわしくないような陽気つづきの中で開かれた十一月句会では、司会が去る三日の「文化の日」、西尾栞主幹に八尾市から市民文化賞が授与されたことを紹介して満場の拍手が起こった。

おはなしは吉岡美房氏、例によって警察が事件を起こした直後に登壇したことから、元警官の立場で軽犯罪法や指紋押捺など、内側から見た警察裏ばなしを披露した。

初出席は富岡温子・灘渉（大阪市）瀬尾照一（枚方市）の三氏。月間賞は、神原文さんが獲得した。

（司会―天笑）（受付―福本英子・登志代）（記録―金太・月子）（清記―楓楽）

出席者―雅文・柳影・悟郎・〆女・しげお公一・萬的・章久・武庫坊・年代・紫香・柳伸・太茂津・千秀・狸村・遊美・はつ絵・白渓子・いわゑ・光代・喜風・諷云児・みつ子照子・凡九郎・眉水・達子・満津子・典子・東雲・勝美・小林英子・金太・温子・正坊・ただし・半蔵門・トメ子・登志代・規不風・友熙・美代子・福本英子・杜的・芳子・勝晴房子・文・奏月・度・英壬子・三男・冬葉・小路・柳宏子・利武・重人・悦郎・美房・けんたろう・愛論・楓楽・岳人・照一・頂留子透太・恭昌・洋敏・安藤寿美子・栞・弥生・寿美・保州・美幸・文秋・渉・白洋・英輔・磯子・天笑・月子・庸佑・一二三・寿子

席題「めっきり」　山本　規不風　選

卒寿を越してめっきり足弱り　利武
娘をやってめっきり減った笑い声　(福)英子
子を産むと女はめっきり強くなる　遊美
好きな人できてめっきり痩せる夢　洋敏
病抜けめっきり角が取れた姑　英壬子
めっきりと冷えて血圧気にかかり　登志代
毒舌がめっきり減った父の老い　正坊
ふる里の川もめっきり汚れてた　金太
そして秋めっきり風は喋らない　岳人
かまきりにめっきり木枯し強くなる　美幸
めっきりとたくましくなったのは女　正坊
めっきりとエイズがふえてくる恐怖　白洋
過疎の母めっきり痩せて冬になる　美幸
中毒騒ぎからめっきりと客が減り　文秋
勉強家めっきり来ぬが引抜きか　トメ子
嫁が来てめっきり増えた母の愚痴　諷云児
カルチャー通いめっきり若くなった姑　満津子
枯葉散るめっきり薄くなったなあ　度
晩酌がめっきりうまくなって秋　洋敏
いたずらがめっきり減ったおもちゃ箱　諷云児
めっきりと色づいてゆく紅葉狩り　雅文
父卒寿めっきり影が細くなる　みつ子
山もえてあとはめっきり寒くなる　美代子
めっきりと快方に向き粥も濃く　光代
ブルースを聞いてめっきり秋となる　友熙
めっきりと冷えて響かぬ父の笛　悦郎
めっきりと大人になった子に遠慮　登志代
恋する娘めっきり化粧うまくなり　三男
気にかかるめっきり増えた酒の量　満津子
あれ以来めっきり化粧薄くなる　重人
金貯めてめっきりケチにならはった　楓楽
めっきりと腕前上げて親迎え　悟郎
どんな風吹いたかめっきりへる小言　度
罪ひとつめっきり影が細くなる　はつ絵
酸性雨めっきり減った赤とんぼ　三男
自分には厳しめっきり丸くなる　太茂津
涙腺がめっきり脆くなる余生　保州
留守三日めっきり痩せた夫と猫　(福)英子
めっきり痩せたと言えば女がうれしがり　文秋
人
めっきりと秋の深まる色を着る　年代
地
ベテラン主婦めっきり手抜き増えました　みつ子
天
何食べてはるかめっきり艶を増す　典子
軸
帯解けばめっきり色気のない太さ　規不風

兼題「嫌う」　春城年代選

嫌われても嫌われてもついてゆく　磯子
嫌われる訳が毛虫に解らない　典子
爺ちゃんは臭いと横向く孫になり　繁男
値の高いものは嫌いと言うておく　月子
嫌われるどころかとんと無視される　天笑
最後まで妥協を嫌うコップ酒　金太
故あって嫌いな上司の酒受ける　照子
酒癖を嫌われながらよく喋り　萬的
嫌われても一番大事なのは嫁　典子
嫌われながら街の鼠はよく太り　萬的
あれ以来　海の嫌いな母となる　瑞枝
一病を背負うておんな人嫌う　紫香
恋人が嫌いな父をもてあます　白渓子
同じこと三度も言って嫌われる　美代子
家中が嫌う煙草を外で吸う　友熙
おばあちゃんまで巨人毛嫌うのが嬉し　小路
饒舌の輪から逃げ出す人嫌い　狸村
長生きの手相を嫌うちの嫁　〆女
人間が嫌いになったことがある　はつ絵
みぞおちに嫌いなわたし棲んでいる　楓楽
嫌われて背中が重いかたつむり　悦郎
贅を嫌った洗濯板に亡母がある　白洋
鉛筆をやたら尖らす自己嫌悪　寿美
嫌われ役買って出たのは母の愛　雀踊子
あれほどに嫌った姑の味になる　奏月
自己主張リボン嫌いなマルチーズ　達子
嫌い抜いた訳を知ってる百舌の声　みつ子
泣き顔がとても嫌いな水鏡　正坊
嫌われたミミズが必要になる病　悦郎
いやなもの嫌いと言うのにも遠慮　柳宏子
嫌いきらいと自分の影に言いきかす　みつ子
父を嫌い母を嫌って血に負ける　緑良
好き嫌いまでよく似ています夫婦箸　武庫坊
団地は嫌い白い風が吹き抜ける　勝美
好きも嫌いも言うてくれない仏様　冬葉
のぞかれているので嫌う花の芯　岳人
我の強いわたしを嫌う姫鏡　千秀
親の苦労が解る家業を子は継がず　美代子
秀
死ぬときに嫌いな人のないように　楓楽
軸
嫌い抜くことも出来ない血の流れ　年代

兼題「根」　吐田公一選

根が生えたように動かぬ土俵際　庸佑
根っからの悪役仮面外せない　芳子
運鈍根うまく揃わぬから困る　敬
出稼ぎの父へ根雪が降りしきる　千秀
根回しのうまい男ののど仏　栞
ナニワの芸　天王寺村の根が育ち　武庫坊
根まわしが行き届いたか椅子もらう　照子
根掘り葉掘り聞いて何にもしてくれず　杜的
一枚の辞令に負けた根なし草　一二三
一触即発アラブの葱は根が深い　奏月
球根に春のプランを話しかけ　みつ子
やんわりと打たれた釘が根をおろす　達子
病根を断ち切る悲願の手術室　どんたく
いつか花咲かす深さに根を下ろす　緑良
左遷地のぬくい情けに根をおろす　けんたろう
根っからのピエロに父を見てしまう　保州
根に持っていたとは善人見抜けない　白渓子
父の樹は深く深くに根をつける　小鹿
根も葉もない噂　雀が来て喋る　諷云児
女には過ぎた根性を惜しがられ　〆女
根回しの一端漏れていた不覚　(福)英子
根が生えたように娘の里帰り　妻子
根の深いはなしを嫌う夫婦松　岳人
根まわしがまだまだ足らず酌ぎにゆく　月子
無機肥料なさけを知らぬ根が育つ　楓楽
活け花の根締へさえる花鋏　萬的
悪の根を切る包丁が錆びている　諷云児
根無し草時の流れに逆らわず　庸佑
根分けして明日の大樹を信じてる　光代
佳
かみさんの根っこが少しずつ太る　(新)正子
でっぷりと女　茶の間へ根を下ろす　寿美子
したたかな一生母は根を育て　美幸
根回しをぼちぼちしとこあてがある　章久
根を下ろす覚悟荒地に種を蒔く　典子
人
草の根をわけても探すものがある　雀踊子
地
根の深いはなしへ秋は暮れ急ぐ　岳人
天
きっと咲く花の命を根にためる　元江

軸

草の根を分けてもらった今の妻　公一

兼題「めくる」　板尾岳人選

アスファルトめくって投げるのは止そう　金太
日めくりが残り少なくなる重さ　保州
アルバムをめくると痛む母の胸　芳子
過去めくる一枚ずつの罪と罰　美幸
辞書めくる好きな言葉に出会うまで　寿美子
ぎくしゃくと生きて六法すぐめくる　楓楽
賀状書くあと一枚のカレンダー　冬葉
過去帳をめくると白い空がある　妻子
夜叉の面めくると泣いていた素顔　千秀
パラパラとめくれば数え唄がある　美代子
日めくりをかためてめくる旅帰り　〆女
早くめくれと吊皮の盗み読み　度
啄木をめくると人が恋しなる　保州
カレンダーめくれば恋がやせてゆく　栞
袴をめくると淋しい鬼だった　楓楽
人形のスカートだからめくれます　白洋
父ちゃんは留守ゆっくりと本めくる　月子
めくったら思わぬ本音出して来た　磯子
カレンダーめくると宇宙がそこにある　柳影
子がめくるカレンダー二十一世紀　公一
辞書ばかりめくる哀しい癖がつき　諷云児
カレンダーめくると師走風に合う　光代
ひと眠りすると暦をめくり出す　柳伸
どのカードめくってみても三りんぼ　重人
運のない札をめくっただけの事　温子
六法全書めくる必要ないくらし　いわゑ
閻魔帳めくって人事裁かれる　満津子
古手帳めくると軍歌流れだす　正坊
ページめくると美女がとび出てくる本だ　白洋
美人画をめくると亡母の顔浮ぶ　照子
六法をめくる話に肩が凝る　諷云児
二枚目の舌を少しずつめくる　(新)正子

佳

自分史をめくると怖くなってくる　螢
アルバムをめくり淋しさから逃げる　月子
立読みの本屋でめくるやせた首　悦郎
キャベツ一枚一枚めくってゆく殺意　寿美

人

カレンダーめくるとあざやかな冬で　照一

地

ページめくると恋の化石がうずくまる　奏月

天

古日記めくると馬鹿と書いてある　雀踊子

軸

終章をめくると消えていた門灯　岳人

兼題「倒す」　阿萬萬的選

砂時計倒して自由の日曜日　信義
ゴルフ場桜も邪魔と伐り倒す　繁男
五百羅漢倒れているのが自分に似　信義
汗見せぬ積木を倒す親になる　小鹿
由緒ある古木倒すに異議が出る　庸佑
父の樹を倒すと森の絵にならぬ　(新)正子
砂時計倒すと逃亡者になれる　雀踊子
踏み倒す仲間も読んである予算　小路
強敵を倒す二の矢が見つからぬ　多賀子
ステッキの倒れた方へ秋の旅　太茂津
欲望を倒す聖書が見当らぬ　はつ絵
酔ったかな起き上りこぼしが倒れない　美代子
ドミノ崩れてエリートコースここまでか　照一
王様を倒す力を歩は見せぬ　弥生
苛めっ子をやっと倒した虚脱感　年代
踏み倒さないと言ってて雲がくれ　頂留子
株低迷ドミノ倒しがまだ続く　寿子
射的屋の人形倒しても落ちぬ　白洋
ライバルを倒そう本を読みふける　度
井の中の視野でライバル倒せない　達子
試歩の朝静かに倒す松葉杖　愛論
エンピツを倒して順番きめている　いわゑ
髭面は見掛け倒しで気が弱い　照子
書けば画になる倒れかかった廃屋も　杜的

平成二年度本社句会皆出席者（11月現在）

阿萬萬的・川島諷云児・松川杜的・川原章久・辻白渓子・小林英子・西口いわゑ・清水利武・野村太茂津・町田達子・本間満津子・神夏磯典子・春城武庫坊・奥田みつ子・上田柳影・山添眉水・北山悟郎・西田柳宏子・玉置重人・芳地狸村・河内月子・稲葉冬葉・西出楓楽・山本規不風・福本英子・板尾岳人・山本けんたろう・田中透太・藤田頂留子・河井庸佑（30名）

倒れそうなのも混じってる羅漢さま　白渓子
食い倒れの街で病院混んでます　天笑
輪廻かな風倒木は地に還る　武庫坊
共倒れしない身内の合理主義　柳伸
雲早し倒れたままの野の仏　みつ子
愛妻が倒れた夢を見た夜寒　恭昌
棒倒し消えて寂しい運動会　金太
無人駅コスモス倒れたままに咲き　杜的
倒れたままでいたいダルマも居るだろう　一二三
北山杉倒すきこりの悲しい目　弥生
計画倒産ひそかに鬼が研ぐ刃　寿美
いい音で倒れた昔のラムネ壜　白洋

佳

満山を谺でかえし樹を倒す　紫香
屋久杉倒すどこかで神の怒る声　楓楽
痛まない方へ倒してやる木樵　しげお

秀

断腸の想いみかんを切り倒す　登志代

軸

排仏毀釈以来倒れた石仏　萬的

兼題「その後」　西尾栞選

ああその後噂はつむじ風になる　雀踊子
シンデレラのその後は聞かぬ方がよい　(新)正子
協議離婚その後は違う釜の飯　多賀子
自衛隊派遣その後はどうなるの　螢
原節子のその後を誰も聞いてない　金太
その後母　男勝りの下駄を履く　岳人
白い菊散ってその後は雪になる　螢
天安門その後変らぬ赤い星　公一
その後は小声になった電話口　満津子
その後又紺の背広が好きになり　英壬子
石投げてその後の様子見るとする　庸佑
病友のその後案じる十三夜　(小)英子
人質のその後が少し判りかけ　達子
あの女のその後を知っているネオン　照一
名馬シンザンのその後へカメラマンが来る　萬的
その後のアリバイが無い恐ろしさ　満津子
再会のその後他人でない二人　諷云児
犬が追うその後巡査走ってる　紫香
日本のその後謝罪がまだ足りぬ　美房
その後のことあんたの方が知っている　磯子
月に帰ったその後は聞かぬかぐや姫　正坊
三回忌その後も独りという噂　弥生
その後は起死回生の道拾う　悟郎
その後はあわだち草になる噂　ただし
別れたと妻には言ってあるその後　重人
師のその後訪ねる駅の菊花展　三男
栄転のその後は聞かぬ振りをする　保州
医を信じその後は頼る百度石　多賀子
その後に凄い美人が従いてくる　紫香
先妻の長男その後顔見せず　友熙
風便りその後に尾鰭つけてくる　千秀
女下駄その後男を信じない　しげお

佳

さりげなくその後を聞いているお世辞　白渓子
未亡人その後もやっぱり未亡人　眉水
子供だけその後の行き来しています　重人
金庫番死んでその後藪の中　洋敏
その後は嫁と分け合う秋なすび　楓楽

人

結婚のその後は餌をやってない　金太

地

義兄さんの視線その後からさける　弥生

天

灰皿はその後冷たくあしらわれ　文

軸

紀子さんはその後なまずの髭を撫で　栞

お願い

このたび本誌各地柳壇に投稿されている各地句会の担当者に「各地柳壇についてのお願い」を差し上げ清記用の原稿用紙を発送いたしましたので、今後は必ずその用紙を使って、直接、本社事務所あてに毎月二十五日までにお送りくださるようお願いします。

（編集部）

社告

このたび阿萬萬的が編集部長を退任して副理事長専任となり、代って田中正坊が十一月から就任いたしました。

前任者同様、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

川柳塔社

川柳化粧櫓　植村客遊子報

埋れ火のまま初恋を抱いている　岳詩
亡き母の仕草まで似る姉も老い　遊峰
滝音が聞こえる友の旅だより　輝月
老いて行く脚へ欠かせぬ嫁の杖　サワ子
も一つの言葉を字引きから貰う　葉香
俎上の鯉に負けたと思う手術台　大鷹
なつかしい校歌の川は泥と化し　礎石
社の内緒　掃除おばさんみんな知る　悲子
これ位ならばと許すかすりきず　三青
外タレが円高稼ぐコマーシャル　鈴代
これからが花よ六十路のパンツルック　アヤ
信じきる止り木有って生きられる　朱玉
出世には縁の無かった亡き夫　美代
此の夏は毎日サウナで痩せたかな　茂章
おふくろの味も三日がよいところ　嘉
どうにでもしてという酔いまわる　姫女
安物の手鏡だから皺目立つ　好花
虫すだく秋を待たれる熱帯夜　はる子
視力落ち眼鏡掛けても良く見えず　永楽
よう来たとパパいそいそと飲ける口　客遊子

富柳会　池森子報

退職の余暇好日の退職金　花子
空港は金と余暇ある人の群れ　(田)勇
余暇のある齢で楽しさわびしさも　トシエ
その余暇をフルに使っている絵筆　維久子
口出せば養子のくせにとばやかれる　智久
養子でも俺は俺の道を行く　昭水
二枚腰の養子　愛人あったとさ　柳太
横やりの入る覚悟で話し出す　二三子
横やりを入れて出世に遠ざかる　文次
嫁の座の幸せを盛る白い皿　透太
息抜きが巧い養子の曲り角　荘次
いばってる養子ばかりで家せまい　生子
おとなしい男養子と間違われ　(伊)勇
誘惑に余暇の相手と言いきかす　トシ子
愛ゆえに長男養子に行くと言う　花梢
余暇に吹く風やさしくて戯れる　岳人
秋日和余暇を楽しむちぎれ雲　森子

岸和田川柳会　植山武助報

別途から探る歴史のおもしろさ　すみえ
本業と別途にぼろい儲け口　勝晴
髭整えて大事な人を待っている　狸村
髭付けて見れば成程父に似る　武助
髭剃れば何かあったんかと問われ　萬的
気短な妻にしたのはぼくのせい　一弥
気短な主人に犬も防ぐ癖　こう
反省のなかで短気をもてあます　さよ子
母さんの短気が治る給料日　月子
俺に似た息子の短気叱れない　甘平
奥さんがまた輪をかけた短気です　白光子
カッとなる癖を知ってる免許証　天笑
便利さについ買い過ぎるクレジット　通彦
マイホーム交通の便言うとれず　恵空
便利さが仇ハイウエイに泣く店舗　浪速子
スイッチで動く便利にミスもある　ひで
食生活便利で家の味がない　冨志子
先走る便利においてきぼりにされ　柳宏子

川柳クラブわたの花　片上英一報

初盆の段取りをして夏疲れ　シマ子
熱い茶をすすって夏の胃を守る　美津留
ステレオが少しうるさい夏の午後　芙美子
空襲のこわさ花火を見る平和　初子
青い目も灯籠流し　原爆忌　龍寛
枝豆とビールが冷えて夏座敷　トシエ
ひまわりに塗ってあげたい日焼けどめ　みき子
夏バテの窓にやさしい虫の声　君江
もえにもえ思い出つづる球児達　朝子
渇と洪　日本の夏は紙一重　信江
わたしから話題の枯れていく怖さ　隆
ご馳走につられ約束してしまう　一雄
新緑の旅の土産に新茶そえ　道子
四季彩のたおや小枝に萩の花　暁子
村祭り若者居ないミニみこし　泰成
ふるさとの祭りへ若さ取りもどし　一風
イヨマンテ　伊藤久男が甦る　英一
一族も皿鉢も並ぶ秋まつり　その
よそよそし様変りした故郷まつり　春子
祭壇の菓子のこぼれや地蔵盆　幸枝
お祭りにうかれて財布かるくなり　ますみ
まつり唄　川面をよぎる秋の色　弘直
思い出す　太鼓の響き母の背で　友甫
国勢調査　間取り数えるかたつむり　鬼遊

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

健康で恋という字に齢はない　志重
十七の文字も暑さにバテている　すみれ
親孝行出来て幸せ当たり前　江山
如何にせんいつか崩れる砂の城　半仙
取りやすいとこのサシミを猫がとり　吟平
ついて来ぬ一人よがりの当り前　恒心
保護色にかくれ青虫食い荒らし　甫正
戦時下の吾が青春に悔い残る　美恵子
リトマス紙　赤と青とで物を言う　秀香
青い鳥探す旅路の温い風　山人
青春の木霊が返るうれしい日　伊久栄
信号の青も忘れた立ち話　ふさえ
宇宙から青い地球を見て回る　邦人
満たされぬまま秋の虫鳴き続け　賛平

南大阪川柳会　中川　滋雀報

秋の電車で憂いを一つずつ捨てる　智子
そして今　笑い話になる憂い　恒明
山へ憂さとばして山彦の返りうち　凡子
憂い顔したら可笑しい私です　凡九郎
原点に憂いが解ける鍵がある　悟郎
写真は正直で憂いをそのままに　久子
弾くほどに憂いを含む津軽三味　公一
文盲で愚直　立派な母でした　柳宏子
次の世も妻に会えると信じきり　章
差し出したマイク愚問と思てない　頂留子
タイムカードきっちり埋めている愚か　勝美
アメリカの旗になびいている愚か　憲太郎
正確な答がほしい愚痴になる　雀踊子

補聴器をはずして母のいい寝顔　作二郎
老人を先に寝かせにくる睡魔　文秋
寝る時間削った母の手内職　滋雀
睡眠のベッドの母に癒え近し　喜風
睡眠は十分なのに出ぬヒント　文江
良く眠り良く働いて平和です　シマ子
世の常と他人事だから軽く言う　庸佑
常習犯またお前かと顔馴染　覚然坊
常識と情熱の狭間で揺れる　冬葉
普段着のままの自分を見て貰う　新造
常連の一人が鍵をにぎってる　千梢
常連を覗けば指定席に居る　シメ子
ぬるま湯で育ちストレスためている　度
平家村の話へぬるい茶をすする　萬的
ぬるま湯の中で決心ゆるみ出す　寿美
ぬるま湯に浸りマンガが放せない　柳伸

川柳東大阪　森下　愛論報

ご先祖のくらしがしみる石の臼　孤舟
秘話哀話　先祖が話す墓の石　章久
失業保険貰う暮らしに泣く先祖　度
ご先祖の家紋が残る祝膳　慶三
台本が子役の演技で救われる　隆
台本のセリフに乗れぬのど仏　愛論
台本のとおりに行かぬのも夫婦　晋吾
台本のない人生の綱渡り　百合枝
エリートも人の弱さを見せつける　庸佑
エリートのつまずく先に女いる　湖風
風鈴が追憶の糸たぐり寄せ　千石
風鈴の音もうるさい失意の日　勝美
忘れられた風鈴家で泣いている　柳宏子

爽快な風に風鈴浮かれ出す　半蔵門
里帰りどっさり貰う物がある　文秋
青雲の希望果たして帰る村　真柳
水引いたように帰った後の里　しんじ
ほおずきの赤も帰省を待っている　作二郎
里帰り噂の種はサングラス　辰蔵

おっぱこ川柳会　松村迷観子報

どん底へ落ちて絆が強くなり　白柳子
むなしさは時間割のない朝がくる　スミエ
たし算も引き算もない愛一つ　ひかり
未来図は明るい彩を塗っておく　迷香
逆縁という順番に狂わされ　迷観子
倖せを支えてくれた母の愛　よしみ

佳句地十選（前月号から）

森下　愛論　選

罪ひとつゆるすゆとりのある心　夏彦
この人も言葉の端に鬼を飼い　賛平
どこで幕引こうと悔いは残さない　文子
心と心ふれあう痛さ抱いている　凡九郎
聞こえない振りも時々して暮らす　雄々
迷ってる背中を風に押されてる　美智子
馬鹿に効く薬探している私　小雪
黙ってる情けもあって子は育つ　吉之助
まだ余裕あるから涙こぼれ落ち　有佳
白い壁しみの痛みは語らない　恵子

よりかけて磨いた石が光り出し　マサエ
生涯の不幸しあわせ紙一重　放任
湧き水が一つの流れを作りあげ　伽名子
磨いても土台のせいで良くならず　明人
子供より親が気になる夏休み　迷貫
八十の老母に甘えに来た帰省　かおり
責任を果して案山子背を伸ばす　いさむ
敬老に手がとどいたか疲れ増し　チカエ
嫁姑仏具磨いてあと頼み　吟笑

後楽吟社　従野　健一報

赤トンボ二日酔いみたいに飛んでいる　拓治
善人らしく仏の仮面離さない　哲郎
貼り替えし障子　影絵の亡子と遊ぶ　美智子
いい事はなかったねえと盆の窪　草風
かぐら面　男の涙を知っている　青銅
呆けはじめトンと忘れが多くなり　佐加恵
聴診器たばこやめたをほめてくれ　柳五郎
おかしさはボケがボケてるのを笑い　浄美
やがて来る閻魔の裁き指を折る　金吾
神様もいたずら好きか落とし穴　進
まだ夢があるのに米寿追っかける　吟平
幸せを崩して石仏へ今日も行く　博友
原点に戻ればあすの彩がある　桃風
熱帯夜ふたりの誤解まだ解けぬ　健一
くず籠の中で誤解がうずくまる　白龍
けじめ忘れた男が家裁の椅子にいる　義親
もう仮面要らぬけじめをつけてくる　正秀
アレルギーのように男を避けている　吉則
誤解から核のボタンを押さないで　秋月
茶柱にルンルン気分家を出る　照路

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

柿熟す田舎に祖母も母も亡し　年代
はんなりと少女の恋が熟してる　〆女
半熟の卵の中に愛がある　定人
熟睡の無いまま未練抱いている　歌子
家康の前に熟した柿ぼとり　伊三郎
熟すのを待とうと水車回る音　作二郎
熟し柿一つ残っている不安　はつ絵
洗脳をされたと思う言葉尻　園歩
洗脳された女に愛が通じない　武庫坊
洗脳のそれからペダル軽くなる　杜的
洗脳をしても春には春の風となる　正一
女気のない部屋ギターおいてある　水声
コーヒーのにがみ初恋つのらせる　文夫
妄想が闇をめぐって夜が余る　敬
冗談へ互いにとぼけ合う夫婦　梨枝
彼岸花庭の角にて緋がこぼれ　正子
おしゃべりが生きがいという旅仲間　みち子
雨漏りを刺激して去る豆台風　英子
赤とんぼ案山子の上を行ききする　保蔵
いたわりを素直に受ける白い杖　芳子
花博の人出花屋が聞いている　紫香

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

聴診器打診の後で思案する　六浦
アレアレと思案投首さげっぷり　敏之
思案して誘いにのった三面鏡　澄子
思案橋渡れば秋の陽も沈む　義嗣
横着な鍬にやきもきする畠　夢之助
荷を解けば故郷の畠の母が見え　弘治
子の代になれば売るだろ此の畠　江美
茄子トマト貸農園は花盛り　向西
眠ってた種が畠で目をさます　いわお
一坪の畠で野菜よくとれる　保蔵
新しい畑へ懺悔の種を蒔く　歌子
花畠でちょっと恋でもしませんか　美智子
花博の蝶の行方が気にかかる　修水
偏屈な一人にみんな気を遣い　昌子
ほろ酔いの女房と覗く窓の月　十四郎
それからを知り度くなって電話する　すみ
それからの事はしゃべらぬ父の墓　武庫坊
手をふって別れてそれから会ってない　紫香

三幸川柳教室　桜井　千秀報

老婆心果ては小言で小競り合い　千枝子
まだ足りぬ小言　寝言で補足する　孝子
ナイターのない日へ小言溜めておく　育子
長逗留の孫にぼつぼつ出る小言　かなめ
胃袋で溜めた小言が消化せず　公子
励ましの小言に気合い入れられる　昭枝
補聴器に妻の小言がこびりつき　美子
水割りの中に沈めている小言　精子
切りのない小言に打てぬ句読点　保州
条件を飲めと名刺が幅利かす　博章
人の世を条件つけて狭く生き　芙美子
条件が揃えば月にとんで行く　(松)幸子
手のとどく条件今日の汗を拭く　茜
条件も愚痴も消えてく碧い空　桂香
条件が揃いタクトの良いひびき　由梨
箇条書きする条件に情がない　千秀
条件を左右に乗せたヤジロベー　和子

条件をならべて愛は冷めている　靖子
条件は出世払いという情け　高夫
悪条件のんで自分に賭けてみる　三千子
嫁ってから財布の紐の堅いこと　当代
コーヒーブレイク堅い話は抜きにする　敬子
左遷され異郷で堅い椅子が待つ　親踐
堅すぎてポキリと折れることもある　正雄
堅実に生きて無欲の米を研ぐ　みね
静かなる怒り拳を堅くする　朱夏
仲人は堅い男と褒めちぎり　町子
へそくりで株買ってから落ち着けず　可笑
株買って又気苦労が一つ増え　(中)幸子
株市況どうあれ明日の米を研ぐ　鉄治

川柳塔とっとり　岩原　喬水報

髪を染め気分も少し若やいで　一歩
アデランス被る勇気は更にない　輪多朗
髪型を変えて嬉しい人に逢う　旋風
ヘアスタイル変えて産休明けて出る　帆雀
出直しの証し短く髪を切る　由多香
小心な鬼で噂にまで走る　洋々
借金に走る時計は止まらない　喬水
ビリ走る孫はやっぱり俺に似る　秀和
使い走り頼んだ後が高くつき　友夫
標識の無い人生へひた走る　山人
煤けてる大黒柱には成らぬ　呼風
人柱立てた橋だと銘悲し　粗粒
怠惰心柱暦に責められる　圭一郎
柱暦カルチャーメモで埋めてあり　侑里
氷柱の花にも燃える日もあろう　俊路
人生峠やる気起こすに遅すぎる　砂山花

起こされてまた寝る秋の味のよさ　一枝
ジェラシーを起こす本能もちあわせ　艶子
社を起こす手だて労組も加担する　多可志

いさり火川柳会　尾崎三代治報

おいしさへ太り気になる秋ですね　智恵子
不機嫌をおいしい料理笑みに変え　八重子
旅に出て据え膳の味忘れない　豊子
おいしいと胃の内側で声がする　武士
新米の粒かがやいて秋うまし　三代治
手を拭いてこれが最高にぎりめし　孝人
嫁の味ほめておいしい膳囲む　伊都子
喪があけておいしいものが欲しくなり　由多香

城北川柳会　神夏磯典子報

洗濯機蟹のようだと孫は言う　きみ子
想い出の中に燃えてる秋まつり　登美子
大物は逃がし雑魚だけよくあがり　秀夫
大海の心になって許そうか　寿美礼
息子の釣りし小魚鯛の味がする　みさ子
こおろぎがジャンジャン鳴いて夏は去り　午郎
肩や背に荷物預けてハイキング　佐津乃
滝つぼの泡立つ流れに座れそう　ふみ
許すとは言わずに花を買ってくる　満津子
濁った川魚は文句言えず住む　勝美
ゴルバチョフどんな手土産さげてくる　敏子
許せない縄が少うしずつ弛む　典子
活造り山菜料理に酒うまし　輝月
星月夜逢えば本音も何時か出て　八重子
輪の外に出れば冷い風に逢う　白峰
もう髪も梳けない櫛の同期会　新一郎

ラブホテル出ると他人の顔になり　静歩
ジョッキ干す女ののどに見惚れたり　テルミ
感激の拍手は合図なく続く　文子
あけすけにもの言いあえる虫の夜　春蘭
知らぬ間に認知している消費税　倫子
新しい言葉に脅えて行く孤独　ただし
夫婦茶碗欠けても代えぬ愚夫愚妻　公一
女にも出せぬ色気を玉三郎　静子
亡夫の汗しむ休耕田の土乾く　きくゑ
花占い老いてロマンを探してる　昭子
買って出た苦労へ運がついてくる　温子
戦とや理性失う恐さかな　達子
鼻ひとつ出て賞金の五〇〇〇万　史風
つまずかぬように歩こう残る道　右近

岩美川柳会　羽津川公乃報

無にかえり仏と対話する尼僧　嘉津江
拷問にかけて無実を塀の中　芳江
引きのばし写真で顔の皺を知る　さなへ
引き際を飾る余力は溜めてある　美恵子
妻が袖引いて予感が当りだす　忠良
葱きざむ祭り太鼓に手も弾む　民子
村祭り今年も息子帰らない　公乃
身から出た錆とは悲し命取り　美代子
この山を取ると故郷絵にならぬ　單車
掌の中の不幸をとり替える　螢
大統領の行動ひとつ世は変る　大漁

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

浜昼顔あわいピンクに母恋し　寿々子
浜風の試練の末の姿松　より子

砂浜に不協和音を消しに行く　ふみ
宴会に浮かれ浮かれて三次会　八重子
水入らず小宴ながら満ち足りる　玲子
喜雨に濡れ子の祝宴に父の顔　朗子
ふるさとの宴に母の座が消える　冨美子
リンゴ咲き別れたくない花の宴　てい子
終の日の宴は白い花で埋め　花子
壁の花になって宴の裏を見る　恵子
宴終えて蝶はそろそろ脱皮する　千春
一人では哀しい色の宴です　ゆき
自作自演の主婦のうたげの華やかな　瑞枝
宴はずみ自分の顔は箱の中　晶子
宴果てておもい思いの道に散る　松子
ときどきは宴もまぜる都市砂漠　登栄
宴果てて自分の影と向き合った　田鶴
二時間の宴のための二十年　正子
サミットの前の宴に刺がある　やえ
ほとぼりがさめると白い宴となる　豆弥
闇の夜の宴だひとりでいいだろう　日枝子
この街の宴の中で亡ぶべし　荒介
灯を消せばすぐ海となる宴の部屋　千代

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

クリスマス迷う心のプレゼント　喜久亭
若葉マーク一家総出でバック指示　ふさ子
狐言う間抜けな狸騙せない　ちよ
プライドが邪魔して縁に遠くなる　治幸
涼風は秋台風が持ってくる　紀一
人恋し今日もポストの音を待つ　義美
終列車車掌が長い笛を吹き　四郎
雁が行く後と先には智者をつけ　虹汀

米粒が立って美味しく母の味　旭恒
父さんに内緒と里の荷が届く　高明
親子猫門柱の上日向ぼこ　ハル
虚ろな目どこを見ている過去見てる　遊女
今日も又平凡に生き湯が溢れ　弘
スズ虫の鳴き音も冴える秋の夜半　剛司
特別な寄付は村議へ出馬かな　朴竜
漁火が名月よりも遠く見え　正敏

西宮北口川柳会　林　はつ絵報

知らぬ地で受けた情けは忘られぬ　保蔵
転ぶたび親の情けをふと思う　香子
情実に負けては首がつながらぬ　二南
土壇場の情けに善意溢れてる　白渓子
ある無心黙って許すことにする　美智子
飼い主が悪くて犬が憎まれる　年代
人に首輪つけて散歩をしたい犬　哲夫
ママよりも犬に悩みをうちあける　宣子
飛鳥仏の目元にうっすらある微笑　萬的
弱い者同士が囲むうす明かり　園歩
カルテにはうっすら覆いかけてある　はつ絵
その腕を知っているから叱ってる　いわゑ
叱るだけ叱った後のなだめ方　春蘭
叱らない父に心で詫びておく　諷云児
譴責の処分応える小役人　圭坊
叱られてなおさら思慕が深くなる　みつ子
父の一徹叱られ役になっている　江美
叱ろうかおさめておくか萩ゆれる　武庫坊
母さんを選んだ僕のお父さん　正坊
生き字引にされ窓際に置いとかれ　光代
ジャンプ傘ほどの弾みを女から　暁風

目玉だけの案山子たんぼへ置き去りに　よし津
黙りやの夫の膝があたたかい　英子
ハワイからコレクトコールする娘　柳伸
ポンポンと言葉が返る旅日和　てる
鉛筆を削るこころを研ぎすます　たず子
父よ父よ冬の風鈴鳴りやまず　鬼遊
日が経って父の情けが判り出す　紫香

佐川川柳　赤川　菊野報

いっときを惜しんで蟬の高い声　健二
雷を落とす役目は母が受け　千恵子
雷雲を串刺しにして飛行雲　功
困ったら打出の小槌ほしくなり　春童
すぐ核をかざすアメリカにも困り　佳風
伸び切ったゴムにも似たり昨日今日　菊野

いずも川柳会　吉岡きみえ報

阿波路来て浴衣の鬼も出て踊る　紋次郎
夏浴衣不倫の宿が落ちつかず　裕
浴衣着た父がさみしい顔をする　章峰
捨てられぬ浴衣に過去が綴じてある　秀子
人妻の線はくずさぬ宿ゆかた　きみえ
浴衣着て踊る阿呆になっている　桂子
盆灯籠ゆかたで流す罪ひとつ　重昭
横縞の君の浴衣よ初恋よ　清子
情に負け押した朱印に一家泣く　清吉
人情に厚い女で暇がない　雪子
人情にもろい女の泣きぼくろ　ノブ
人情を語りつぐのは与作だけ　与根一
人情のかけらも見えぬ都市砂漠　萬吉
無人駅　情けの傘を借りてゆく　茂美

人情味だけでゆかぬ金社会　鐘堂
人情に溺れてからの勇み足　佐吉
人情を票にからめる抜け目なさ　呆主
お仕着せの人情ならば捨てていく　桜水
人情がからんでペンが走らない　まこと
無銭旅行　他国の情けあてにして　草丘
人情が厚くて過疎を抜けられず　紋次郎
人を恋う背が人情に飢えている　多賀子
寝たきりの妻へ悲しいうそをつく　多輝子
雨降りの人情傘が返らない　久代
人情の灯に守られて過疎に住む　克子
他生の縁濡れる袖なら拭いてやる　勝平
風呂敷を解けばころがり出る情け　弁治郎
豆腐売り人情ラッパ今日も吹く　小鹿
一日を病めばかけ寄る友がいる　律子
四面楚歌　親の情けは放っとかぬ　芳正

川柳ささやま　遠山　可住報

私をなくした思い爪染める　純子
ど忘れと一しょに損も忘れとく　恵美
結納を迷わす好きなもう一人　美智子
人の世の山又山をいくつ越す　貞子
ためらいの拳あげてる父が好き　とみ子
好きだから後ろ指にも耐えられる　靖子
水準を越す贅沢へ目をつむり　ヒサ子
ストレスを一気に飛ばす上げ花火　和子
愚痴みんな吸うてくれそな空が好き　つや子
矢印へ山彦を追う唄の列　百合子
赤とんぼ山のロマンと秋を行く　テル
真直ぐに歩けと山が言っている　冨美
水準へ足踏み外すヤジロベエ　素水
好き嫌いみんな似合うて来た夫婦　文平
水準の一枚上に敵がいる　可住

京都塔の会　松川　杜的報

行く道を聖書よ教えてくれないか　礫
図書館へ行って昼寝をしてこよう　武庫坊
明日行くの電話へ弾む市場籠　花代子
行く夏を惜しむ間もなく秋の雨　栄
行く行くは独立目指す宮仕え　圭坊
旅に行く予定埋まっている傘寿　英子
ご先祖のこまめさを見る油紙　求芽
油染む作業衣にある父の自負　正坊
作業衣の油まみれの父が好き　百合子
油絵で描く太陽は酷暑めく　白渓子
水と油の性で溝がうまらない　〆女
一匹の金魚と正午の時報聞く　杜的
給食の前で祈りをする正午　紫香
正午までお待ちしました伝言板　芳子
正午集合　御飯のことが書いてない　福子
逆らわぬ妻操縦の確かさで　達子
春駒はるこま若者の汗飛んでくる　英壬子
胡麻油一滴たらすのが秘訣　年代
亡き母が愛でた椿の髪油　倫子
不惑とは人生の正午かも知れぬ　ただし
高速のやっと走れる正午すぎ　巨詩

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

幸せの彼に便乗したわたし　好栄
便乗の裏がわからぬ新社員　聖子
検診に気の重くなる訳ひとつ　智重子
大吉へ便乗しよう朝の靴　はるみ
会うというあなたに便乗してもよい　歳栄
どさくさで人間悟りとりおとし　民子
便乗の恋は何時しか本物に　鈴江
裏窓に怪談の種おいてある　かつ子
怪談よりももっと怖い原爆病　ヒデ子
人の世や命むさぼり天地病む　芳枝
夢多き時代もあったいとおしみ　悦良
怪談の背中へ冷たい一雫　博利
便乗したばっかりに事故に逢い　清泉
便乗のつけが今頃コメへ来る　白汀

川柳岩出　小倉　アサ報

この土の維持に身も遣り心やり　綾子
影に添うことしか出来ぬ老いの妻　精子
持ち前の誠実人をそらさない　瑞穂
心には光と影が揺れている　美枝子
孫の持つオモチャ未来がのぞいてる　正義
持ったとて荷物にならぬ身の技は　義美
強情もほどほどにして和を保つ　永年
パソコンに馴染めん歳の石頭　正直
影になり日向になって嫁守る　千代子
持ち物を預けて軽く道を行く　英子
一人っきり影でいいからいてほしい　幸子
若き日の強情老いて持ちつづけ　喜市
持ち味を生かした嫁の夕餉の和　春子
師の影を偲び教えが今日に生き　和子
揺り籠に置いてあります影ふたつ　愛子
芯ひとつ持って明日に身を任せ　昌子
人事異動序列に僕の影がない　忠雄
言い訳を持つと男も強くなる　与呂志

川柳たけはら　森井　菁居報

秋だからとてもおなかがすいてくる　小三千　枝
えいようのとりすぎホッペ丸くなる　小五史　子
いい事を一つして来た夕焼けや　菁居
亡父の匂いがする絵はがきをたいせつに　蘭幸
針の穴のぞく来世の万華鏡　静佳
子の帰省心わくわく老母なる　麻代
争いの杭とは知らず赤トンボ　喜美子
ゴキブリも今日は見逃す盂蘭盆会　勲
ねじ少しゆるめて行こう老いの道　一枝
私なりに暮して行ける秋日和　浪子
久し振り四人で囲むかき氷　喜久恵
許そうよ個性それぞれみな違う　千年枝
台風よ待っていましたよい雨で　ヤスエ
ちびちゃんが夢のあること言うてくれ　愛子
約束は果たせどさみしひとつの訃　栄恵
恋時雨終着駅はまだ遙か　清水
ワープロへ企業秘密は打ち込めぬ　節夫
向日葵の少し疲れてきた残暑　房子
海変身もう忘れたか夏の貌　一路
ヒロインになりきって出る映画館　淑子
ままならぬことばかりなり夕月夜　比呂子
旅人でなくても白い画布を持つ　笑子
まんだらを織る手に宿る仏たち　博子
評論家後から言えることばかり　伸子
どうみてもフセインのヒゲ気に食わぬ　静風
寿の袱紗めでたい使者が来る　新造
僕の体にトンボが止まるうれしさよ　政己
どの子にも名前ついてるぬいぐるみ　千代美
わたくしを取り戻したい本を読む　白狐
コオロギの餌に野菜の種子を蒔く　蝸牛

川柳大阪　高須賀金太報

熱帯夜ビール四社を試し飲み　亮太
花博の疲れた肩に子が眠り　正之
縄のれん昔むかしの席が無い　与呂志
紙コップ僕には僕の道がある　重人
一日の想いを外すイヤリング　柳弘
クーラーの虜になって土用越す　美津留
ふる里で嫁という名を休ませる　希久志
八月の罪を何回でも洗う　元紀
仙人の気持がわかるふくらはぎ　敏
呉越同舟　胃病の話に馬が合い　洛酔
利口ではないから馬鹿になり切れぬ　雅巣
遅れたは電車のせいにして多弁　比呂志
外国へ有り金投げるゴッホの絵　のもと
日本のタバコがなぜか外国語　一歩
和定食お米の外は外国産　三吉
コンプレックス抱いて外国詣でする　しげお
雨乞いヘダムの深さが気に入らず　笑風
校門に聞く教育のむずかしさ　本蔭棒
本当の甘味は少し塩が効き　鈍泉
アホやなー甘い話に乗るからよ　酒連
甘い詰めまんまと鯛に逃げられる　鉄心
匙加減甘さ引き出す母の塩　司
結ばれた時も訣れも雨だった　金太

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

一升瓶これがあなたの子守唄　寿朗
父さんが一番偉い綴方　久子
酒止めただけで偉いと妻が子が　柳風
山水の絵にかしこまる床の前　とめ子
絵のような女ですぐに近寄れぬ　よしえ
偉い子はいないが九人育て上げ　和枝
偉い人子供は父より母を指す　小生
じゃんけんはいつもチョキ出す癖がある　勝彦
額縁の中で笑わぬ偉い人　秋草
偉いのは家じゃママの方らしい　康子
自画像に花のスカーフ添えて描く　ゆり子
孫の画を天才画家とふれまわり　御前
夕焼けを絵にして与作　山降りる　雄々
偉い人庶民のかまど見てくれよ　碧水
夕焼けに聞こえて来そう子守歌　満春
雲よ雲縁があったらまた逢おう　菩句
じゃんけんで晩のおかずを決めようか　秋女
縁あって三十六で嫁になる　独歩

川柳塔鹿野みか月（十月分）　土橋　螢報

考えを天井に描く紙に書く　隆風
手のひらで転がす終の日のこよみ　諷人
大学の門からジンタ聞こえてる　美っ千
夢刻む時計に終りなどはない　幸代
地図にない町を終着駅にする　正道
終りまで聞けと煙管を振りあげる　はるお
臨終の夢からさめて生きている　早苗
大学が近くにあって子が困り　かつ乃
終点が見えて約束思いだし　静生
入試終え窓の明りが消えている　保子
終点に着くまで手足動かそう　百合子
耳もとに大学生の下駄の音　智恵子
美しい虫の音聞いてしまい風呂　きみゑ
古希迎え川柳習い若返る　しづゑ

座席を譲り恵比須さんいただいた　喜与志
太刀打ちの出来ぬ刀を振ってみる　野草
新婚旅行贈ったバラの行方聞く　正恵
生き抜いてくれよ胎児よわがいのち　夕峰
熱おびた強力磁石秘めている　しげる
儲かっているのか隣　威勢よい　こうじ
音大を中退街のギター弾き　くに子
大学でマージャンだけを覚えてくる　幸枝
嫁の愚痴はなしてならぬマスクかけ　芙美
ハッピーで終わる筋書考える　三千代
ちょっといいマスクに酔っている私　和子
いつまでも笑顔のままで終りたい　八重子
吹雪みちマスクに温い息もらう　富恵
終焉には鬼の面脱ぎ散るつもり　房子
マスクして二十面相つかい分け　汲香
一日が終ると笑う部屋がある　きみ子
お嬢さんマスク外していいですよ　公弘
勝つために愚かなことを考える　螢

翠洋会（生駒吟行）　中西兼治郎報

ハイチーズ笑顔に花を入れて撮る　照子
仲良しが美人でわたし困ります　みつ子
母に似し野辺の地蔵の片えくぼ　みよ子
駅降りて道を尋ねる里帰り　綾子
生駒山くっきり見えて雨近し　春子
街路樹の落葉に帰る土がない　真
吊橋をわたれば迎えるひがん花　すすむ
青空も景気も見えず神無月　さと美
権力へ放火投石するいのち　英一
宅配を開けば漂う里の風　恭昌
マンガ読む四十髭面こそマンガ　宣司
宝山寺壺を拝んで山登る　東雲
おやじ株少し見直す家が建ち　正雄
ときどきは意見が一致する夫婦　正坊
流れ星願いひとつを繰り返す　光子
考える葦には遠くマンガ読む　楓楽
いちにちのいのちぼやっと昏れてゆく　鬼遊

川柳ねやがわ　高田博泉報

間歇泉　地球の溜息かも知れず　高栄
花博の土産話のせいのなさ　一笑
衝突の回避へ面子邪魔になり　藍子
年年に四季の舞台が破壊され　菜月
花博で辛抱強くなりました　波留吉
見え張って生きた夫婦の舞台裏　権太
スタチまで添えてやさしいお裾分け　かすみ
ちょっと耳貸せと味方のような顔　一途
命あるかぎり行きます墓参団　速水
初舞台吾が子の所作にきびしい眼　時弘
秋風がどこかの山で待機する　まさお
仲裁を拳を上げたままで待ち　柳宏子
余生への桧舞台を考える　一芳
花博で郷土文化を踊らされ　一鬼
昇進の宴に思わぬ人も来る　光子
定年の舞台拍手は妻ひとり　良三
塾を出る時　少年の瞳にもどる　雅文
兄弟の仲とる親がもう居ない　あやめ
背景を替えた舞台で生き残り　シマ子
出席の返事　即座に書いて出し　三郎
衝突の昔語らぬ丸い石　頂留子
役者馬鹿　親が死んでも出る舞台　礫
幸せな蝶万国の花に会い　庸佑
青げしの蜜はまずいと秋の蝶　度
春夏秋冬くるくると独楽舞台　三千子
衝突を嗤うカボチャが甘く煮え　勝一
夏ばてに皆出席を棒にふり　勝美
六十の手習いワープロに熱をいれ　白水
大花火帰りの道は遠かった　頓坊
小切手で貰うた金は手切金　紫香

サークル檸檬　大澤三四子報

無理のない姿勢で続けていくつもり　泰子
落ちている財布の中味蹴ってみる　美緒
話する相手もおらず秋夜なが　千代女
秋夜長夢のつづきを期待する　今日子
秋さなか虫が競って恋をする　三四子
熟し柿先に見つけた鳥のもの　雅子
秋が来て夕日の色も二上山　薫風

川柳塔わかやま吟社　牛尾緑良報

装った平気な背が泣いている　正博
それからは閉口ばかり姑の位置　アサ
出たがりの帽子はいつも先頭だ　栄美子
まとまった頃に出たがり顔を出し　三千代
出たがりの鼻緒ゆるんだまま走る　裕美
出たがりへでたがりの友寄ってくる　登志代
古傷を平気で突いてくる女　太茂津
寝返った策士平気で友を売る　高夫
装った平気を捨てに母の膝　光代
途方もない夢を平気でつれてくる　寿子
踏まれても平気でいたい石になる　武雄
オンチでも平気で唄う父が好き　稚代
ガン告知　平気よそおう空威張り　瑞穂

鰯雲のびて減量ままならず　桂香
骨身まですり減らしても職守る　守
悲しみを減らす話なら拾う　静代
戦友が減って平和をかみしめる　武治
減ってゆく一升瓶をにらみつけ　天彦
腕白が減って騎馬戦物足らず　愿
ゼイ肉が減って軽々上がる脚　呑天
水減ってダムの地割れにほしい雨　金魚
口数も鉛筆の芯減るも秋　克子
笑わない客へ閉口するピエロ　鉄治
閉口の父に孤独の顔を見た　忠雄
身の上ばなし何度も聞かすおばあちゃん　英子
誤解とくチャンスがなくて妻無言　勝
閉口をまた聞かせてるお仏壇　輝子
絆多過ぎ閉口してるポケベルで　千寿子
白蟻が大黒柱食っている　信子
遠まわりしても減らない愛がある　緑良

川柳塔まつぇ　恒松　叮紅報

北風に母の背まるく老い給う　きみ子
北風に捨ててあるのは夏の恋　早苗
秋風がおいしい鯖を連れてくる　鶴丸
シャボン玉風と遊んで行ったきり　満江
風が出てすこし早目に烏賊を干す　きみえ
少年は風駅の階段駈けのぼる　みえ
哀しみを超えて情ある風となる　日出子
割り箸の先に書いてるあみだくじ　幸子
割り箸に男やもめの詩がある　与根一
生家ではもう割り箸の席につく　良子
袋から出れば割り箸よく喋る　房子
同窓会方言まぜて箸を割る　幾子
箸を割る前に料理を眼が食べる　ちかし
割り箸が罪を着ている使い捨て　清志
一秒の戦いがある記者のペン　雀踊子
ペン捨てた野武士のインク壺枯れる　たつみ
神様の落したペンを持っている　小鹿
同じペンで友はこんなにうまい文字　清子
お喋りなペンが何もかも話す　妻子
ペン先が亀の歩みで心急く　邦代
幼子の寝顔がみせる亡父の影　長三
働いて得た一日のいい寝顔　すみ子
穏やかな寝顔　観音様に見え　静恵
いい寝顔　仏に一歩近くなる　多賀子
子の寝顔フトン半分借りてねる　桂子
使い捨てとは縁のないぬれ落葉　太泡
使い捨ての兵かも知れぬ深海魚　章峰
使い捨て今も出来ない戦中派　静江
使い捨てに馴れて親まで使い捨て　雄々
商魂にうまくはまった使い捨て　叮紅

川柳藤井寺　高田美代子報

手ざわりで確かめ合おう愛その他　和子
目くばせで他人行儀になる二人　志洋
優しさと暮らすまあるい母の貌　淑子
熱い茶が旨いやっぱり齢ですか　みのる
ちぎれ雲孤独のわれをだぶらせる　雅美
大根も菊菜も植えて冬仕度　悦子
ちぐはぐな言訳してる朝帰り　キミ子
ちぐはぐを繰り返してる凡夫婦　透太
ちぐはぐの演技で笑う三枚目　ときお
一人歩きちぐはぐに履く赤い靴　彩
ちぐはぐもある外人の日本語　きよし
この歳で妻とのちぐはぐ気にならず　与呂志
借景の古都へホテルの近代化　信子
ちぐはぐな時計になれた共稼ぎ　正枝
ちぐはぐな意見を聞いている国旗　おさむ
ちぐはぐな言葉も母に通じます　政代
ちぐはぐに見えてもバランスとれている　繁男
胃袋にダイエットだと記憶さす　敦子
この秋が行ったらしようダイエット　婦美枝
力士ですダイエットなど出来ません　三郎
今更と体重計に笑われる　修六
夏バテも体重計は狂わない　ケイ子
天高く元の太さに戻る妻　美房
ダイエット齢は聞かないことにする　吸江
ダイエットどうせ駄目なら喰べなはれ　たかし
ダイエットしばらく伏せて秋を喰う　治子
ダイエットして八等身になれますか　美代子
家計簿に日照りでつづくダイエット　寿美子
森も街もスリムわたしを責める秋　森子
ほそやかな孔雀の舞を見せんとて　一屯

川柳泉尾　吉川　寿美報

転生を信じて止まる赤トンボ　マリ子
親と子の願いがずれている着地　和子
デュエットの一つ二つは仕事用　伴子
想い出をなぞってまわるフルムーン　みつ子
深入りをせずに夢だけふくらます　洋子
みどり児が女王様になってます　靖子
絵心があって画廊を巡ってる　(中)文子
新築に自作のおし絵香ばしい　美南子
修羅を描く炎は赤でないように　弘子
休憩をさせてあげたい父の靴　淑子

休憩のなかでヒントが湧いてくる　シメ子
健康は休憩なしのほうがいい　恵美
働いて休憩のない過去に生き　みさ子
泥舟の狸は休憩しておれず　あさこ
休憩室隅に野心を持つ女　可愛
長い人生少し休憩したくなる　途子
休憩をしながら歩くマイウエイ　一枝
釣糸を掛けにきたのは貴男です　葉子
声掛けて心ふれ合う古い街　良子
昼寝の子気遣う母の掛け布団　シマ子
掛金に淡い老後の夢を見る　悦子
激しいものが生れる椅子に掛けている　美子
自画像を節目節目で掛け直す　トミ子
雨続きチャンスつかめぬ帽子掛け　敦子
掛け時計　明治生れのネジを巻く　義一
自信ある椅子で深目に掛けている　美代子
ひと言を掛けて優しい女である　はつ子
苦労かけたとひと言言えば済む話　(寺)文子
愛憎のひりひりひりと夫のシャツ　美津子
森を出て少し破調の笛を吹く　寿美

南海川柳会　飯田　悦郎報

一応は叱って置いてから教え　二南
どたん場で母の教えが光りだす　慶
教え子に大きな夢を予約する　悦郎
娘から手ほどき受けているピアノ　凡子
代表に子が出て父の祝い酒　正好
級長より副級長の方が好き　文
代表になって出る杭たたかれる　志華子
鉢巻が代表ですと名刺くれ　ダン吉
代表と言う名で心くすぐられ　真砂
失敗さえなければ非難されず済み　眉水
七十五日又もあぶくが出る汚職　しづ子
世界の目サダトに非難集められ　東雲
基本的ミスでお腹の再手術　柳伸
大卒の新弟子　土俵の砂を舐め　甘平
基本から叩き込まれた腕の冴え　庸佑
負けいくさ基本の鬼に叱られる　重人
歴代の即位に邪魔は非国民　覚然坊
歴代の並ぶ基石に知る歴史　勝美
歴代の老舗も流れには勝てず　文秋
歴代の手あかのれんにある老舗　信博

高槻川柳サークル卯の花　辻白渓子報

一泊を語りあかした戦友会　武庫坊
一泊の旅が気重な不眠症　圭坊
単身赴任秋の虫の名又覚え　暢子
田舎者にしては立派な身だしなみ　波留吉
わがままな芸で主役にまだなれぬ　勝一
三泊の出張一泊は家で寝る　杜的
蓮のうてな艶に酔わせる舞扇　英子
一泊は妻のプランに乗ってやる　諷云児
ご立派ご立派と尻尾をふっておく　礫
原住民の耳飾りに似たイヤリング　萬的
里の一泊小さい母の添寝する　静江
来年は拝まれる身か墓参り　多賀子
恵雨三日続いて愚痴となり　春風
隣席の娘が癖のある字でメモをくれ　冬葉
秋の夜を読書もせずに宵寝する　豊子
弁当が出るので来てる敬老会　とおる
残り火を繋ぎ合わせてひとを恋う　芳子
一泊の旅あれこれと女の荷　〆女
湯の町のコケシの鼻にある情緒　晴美
世話を焼く姿に打算すけて見え　百合子
永らえて無芸大食粗大ごみ　正恋
美しい方言だった里がえり　真笑
暑くてもみんなこなした予定表　紫香
風通し良過ぎて内緒すぐ漏れる　恵美子
老母も娘も茶漬が好きなハッタイ粉　花代子
かくし芸妻が応援してくれる　スミ子
言訳は聞かぬ三面鏡のひとつ　吉之助
彼岸花だけが痛みに耐えている　京童
雨よ降れ降りすぎ降るなと人のエゴ　遊美
下戸だとは思えぬ粋な芸を持つ　白渓子

むらくも川柳句会　藤井　明朗報

焦点が合って握手をして別れ　正朗
番号をもらい台風いきまくり　芳子
台風一過　無事をよろこぶ青い空　秀子
宿浴衣　女にかえる向い膳　文子
台風のつめあと竜巻まで招く　ヤス子
焦点をふたりに絞るめでたい日　一葉
焦点が決まらず話は物別れ　百代
イラク戦　平和の焦点定まらず　久仁
現代っ子迷信なんかと吹き飛ばし　常子
台風のように立ち去る孫の客　仲子
台風のそれて今夜の飯の味　島子
科学の世　迷信話もきかれない　竹乃
物事の焦点はっきり見きわめる　千里
台風の予報テレビとにらめっこ　はる代
どの子にも焦点合わす母心　林蔵
焦点が合わぬ眼鏡で見る世相　カツ子
釣りの宿今年もまめで逢う馴染　幸夫

論戦の焦点ぼかした右派と左派　義良
旅土産どっと疲れを持ち帰り　筆子
孫帰省　大人になった顔になる　藤子
柿の実が色づき冬が早くなる　美恵女
まだ役にたちたい気分だけは持ち　マサノ
一坪の庭にも秋の花競う　幸子
墓参り自慢もぐちも語りかけ　三津江
殿様の作った庭を見る峯寺　峰雪
四季の景　峯寺の庭にある歴史　明朗

八尾市民川柳大会　宮崎シマ子報

森を描くみどりの絵の具枯らさない　隆
洗い米母一粒に眼がとどき　喜風
明日に夢託し一粒種を蒔く　恭昌
一粒の麦にはじまる開拓史　章
一粒の涙が男を狂わせた　朝子
朝の戦争やっと終った姫鏡　春子
苔むした戦士の墓を誰か知る　年代
地球病み戦の火種くすぶらせ　初子
戦争の話が父をまた酔わす　とみを
派兵するニュースに疼くいくさ傷　律子
海亀の子が明るい海を知る　眉水
明鏡止水やはり言いたいこともある　英一
明日から他人ゆっくりねることだ　月子
底抜けに明るい亡母の夏帽子　柳伸
明日のある男に時刻表がある　香豊
空白を明るく埋めて旅に出る　弘直
先生のチョークに父兄と書いてある　年人
師を語るとき少年の耳になる　作二郎
ついてこい雄の一言ルビー婚　暁子
雄弁家の横でだまって首をふる　和子
雄花咲く実らぬ愛と知りながら　芳子
恩師のこと思い出してる金魚鉢　奏月
八起き目へ頑張っている七分粥　鬼遊
すすき野の果てに明るい空を見る　千歩
胸突八丁　静かになった皆の口　龍襄
八百長の花は咲いても実はならず　悦郎
八月はボケッと怠け者になる　幸枝
不用意な医師の一言身にこたえ　君江
コマーシャル流し宣戦布告する　一風
水を呑む師ののど仏すでに秋　美幸

堺川柳会　河内　月子報

父の打つ太鼓昔の音でない　凡子
ひと言を足して私の負けとなり　かりん
負け惜しみ阿呆の上塗りするように　星子
ライバルを避ければ君の負けになる　千万子
左遷地の風は意外にぬくかった　あか里
悔しいがまだ追い越せぬ母の影　小雪
帰宅した男忽ち阿呆になる　文
風除けの夫が痩せてきて困る　彗梢
これも愛塩半分にしています　楓
帰りみちまだお土産がととのわぬ　半銭
私と添うてる影が可哀相　重人
萩の風水子地蔵のわきを抜け　たず子
ポックリ寺から帰って丼飯を食う　美代子
しなやかな心で風に逆らわず　昭子
吊り橋を渡れず帰る恐怖症　狸村
半分は創作による歴史かも　武助
心打つ本を一冊持って生き　ひで
懸命に影もペダルを踏んでいる　さよ子
生きるとはこんな日もある風の中　正坊
あなどって軽い火傷をしてしまう　三千子
翔ぶならば今と私を煽る風　靖子
土壇場で半人前が意地を見せ　みね
何やかや言うても帰る家がある　保州
負けっぷり誉めて下さる他人さま　千秀
壁の向うに想いを馳せている帽子　正子
アラスカの空気を抱いて子が帰る　泰子
切り捨てた半分味方だったかも　森子
子どもには負けた話もしておこう　奏月
帰るまで顔見るまでは信じない　頂留子
帰ったらアカンためされてるのよアンタ　凡九郎

南海川柳会（前月分）　飯田　悦郎報

車椅子押して小さなボランティア　志華子
一回しか着たことのない奉仕品　文
テレビショッピング奉仕ほうしと小うるさい　ダン吉
労働の成果　農家の笑う秋　度
労働の喜び知って子が巣立つ　真砂
労働者自負に不信の日教組　勝美
これ見ろとした労働の背なの汗　しんじ
労働をいとわぬ蟻の長い列　凡子
労働がこんなにうまい酒にする　庸佑
ふる里が展開　渋滞脱けた朝　正好
悲喜劇を展開させる株下落　柳伸
妙な展開母まで父の味方する　眉水
ロープウエー谷に展開する緑　文秋
展開のきざし温い話題聞く　柳宏子
横手から関係のないのが口を出し　覚然坊
横手より応援したくなる喧嘩　信博
ひるむまい横手に妻がいてくれる　甘平
横手から口を出したくなる天狗　重人

横手にはいつも盲導犬がいる　恒明
おにぎりがほんのり匂う秋の山　悦郎
遠足で他人の弁当おいしそう　東雲
弁当箱どこでたべても母がいる　真柳

もくせい川柳会（前月分）　**田中　正坊報**

薬煎じる匂い尼寺　秋となる　萬的
百薬の長　卒寿白寿と寿命のび　明吉
飲み残し漢法薬のコレクション　登志実
ライバルも同じ薬を飲んでいた　正坊
薄衣のせなに襦袢の白い汗　登代子
赴任地へ妻来てシャツを白くする　紫香
滝行の女の白衣すけてくる　蕗児
手枕でなければ寝ないうちのネコ　博史
猫寺の猫でちょっぴりいばってる　杜的
泣きべそは夫の子戻しに来たらしい　富子
善人と見分け捨て犬しっぽ振る　白渓子
飼い犬も夫婦の和解待っている　よし子
人住まぬ砂漠　蜥蜴の生きる知恵　英子
ゴム長にいつしか蜘蛛が住んでいた　寿美子
渇望の雨も三日であきあきし　圭坊
逢うだけの幸せ星が美しい　慶子
羅漢さんの微笑に出会う秋の辻　〆女
ふしだらと言われる娘ほど強く生き　福一
小包に秋が溢れる丹波栗　きく子
堂々と駐車違反が並ぶ道　明光
かくれんぼの鬼追いかける赤とんぼ　悟郎
花博の花に迷っているトンボ　武庫坊
赤とんぼ石の寝釈迦につきまとう　作二郎

もくせい川柳会　**田中　正坊報**

すわ事件くるくるヘリの取材陣　(小)英子
ねばってた市長もやめた汚職劇　富子
夫婦劇紆余曲折がありました　蕗児
城巡り時代のルーツを探る旅　明光
母には母の時代があったどびんむし　作二郎
時代が違うと嫁は何でも捨てたがる　萬的
時代には勝てず門限遅くする　とく子
時代変っても七五三　稚児行列　寿美子
言い負けた口惜しさ溜めるぼんのくぼ　諷云児
秋の陽を背に溜めているロダン像　正坊
陽も月も風も見えます水溜まり　(玉)英子
溜まるほどけちが無口になってくる　武庫坊
雨漏れを溜めて隣と長話　紫香
絶筆の富士が溜息聞いている　杜的
西成で溜る怒りが破裂する　圭坊
ほろ酔いもうまくさけてる水溜り　慶子
老け役の孫が可愛い童話劇　白渓子
風邪の子に本の続きを読んでやる　きく子
きき耳も虚しさばかり聞いてくる　悟郎
借りもののめがねが鼻へすぐ落ちる　福一
五百羅漢どれもこれもが亡父の面　明吉
次郎君反省させてようちの子を　登代子
車椅子に乗らぬ一日　日が長い　つえ子
証人台うそを誓った顔ならべ　吉太郎
許す気になれば言葉が丸くなる　〆女

▼同人名簿の追加・訂正について

同人名簿は、その後の異動もありますので、12月1日現在で追加・訂正表をつくり、1月号に同封して発送します。

住所・電話番号・氏名のふりがななどに誤りがあれば、**12月7日**までに川柳塔事務所へご一報ください。

（同人部）

平成二年度

大阪文化祭川柳大会　秀句

ノラになってもたぶんストレスあるだろう　西出　楓楽
愛の曼陀羅哀しい彩を持つ喜劇　長江　睦子
一冊の本にゴツンと叩かれる　玉置　重人
父の日に翔んだ娘のプレゼント　米田　恭昌
大根も菜っ葉もすこし見なおされ　河内　月子
二十一世紀が瞼に見えている視力　中島　正次
あれは皆まぼろし許し合うことに　奥田みつ子
島つなぐ橋に都会の風が乗る　黒川　紫香

城北吟行記

松本ただし

天気予報をうれしく裏切って十月二十五日の空は爽やかな朝であった。城北川柳赤穂岬吟行の一行十四名、定刻大阪駅からJRで出発。途中、昨春新築された公一さんのお宅で十月例会を開くため、十一時過ぎ、東加古川で下車。二年半に及ぶ闘病生活中の白峰さんは、キリッとネクタイを締め、黒皮のショルダーバッグを粋にぶら下げて先頭を切っている。元気印三重丸。足が不自由で、車椅子を利用されているふみさんには、ご主人のいたわりが皆の心をあつくする。公一さんご家族の温かい出迎えの後、早速、昼食を兼ねて句作・選とあわただしい時を過ごす。当日の題は、共選「赤い」、席題「叫ぶ」が披講の結果、

美しく老いてまっ赤なベレー帽　倫子

が城北月間賞に輝いた。

閉会後、あと片付けもそこそこに、今夜の宿泊先、赤穂簡易保険保養センターへと心をはせる。倫子・温子さんお二人は都合で日帰り、駅で一行と東西に名残を惜しんで別れることになった。駅周辺にあわだち草が今を盛りと黄色い花をつけていた。

四時過ぎ赤穂着。姫路の一つ西に英賀保（あかほ）があり、JRの正しい駅名は「ばんしゅうあこお」と一つ賢くなった。ビルの林を見慣れた目には、城下町のおっとりとした家のたたずまいに、「空ってなんて広いのか」と感じながら瀬戸内の島が見える宿舎に入った。

一風呂浴びて夕食、他の団体客と相席ではあったが、一同お喋りより箸を動かす方が忙しかったらしい。海の幸もさることながら、松茸の土瓶蒸しがうれしい。耳かきを二センチほどに切ったのがすまなさそうに沈んでいた。食事もそこそこに部屋に戻ってお待ちかね二次会。

当日雑感に始まり、登美子さんの〝川柳って何か〟に議論百出、いつの間にか史風さんの江戸時代からの川柳における「女のうりかい」の蘊蓄を傾けた法話？に移り、酔いのまわるにつれて、典子、八重子さんのしなをつくった「浪速恋しぐれ」のデュエット、満津子さんの「ラストダンスの唄」、公一さんの童謡と家族揃っておふくろ自慢の炊きたてのかやくご飯を食べているような雰囲気が部屋にみなぎり、静子・達子さんの歌声は聞けなかったが、頬は最後まで弛み放しであった。あかりをおとして螢の光を合唱した時分、時計の針は翌日を指していた。

明けて朝食後、時間があるので五・七・五を別々に書いて無作為につなぐのや、上中を決めて下五だけ作る川柳遊びに時を過ごし、秀句続出。

雨あがり告白された寒椿
ひらひらとひらひらと舞う君の影
ぽつぽつとぽつぽつときた肩たたき
秋日和ルージュを引いて軽い靴

楽しさも話につられ色に出る

宿を後にして赤穂のメイン大石神社参拝、赤穂城跡・大石邸長屋門・源八長屋と見てまわり、十四時十分の列車で帰路に着く。大阪駅で皆さんとコーヒーでお別れのパーティー、勤め帰りの人に混じって想い出の旅を締めくくった。お疲れさま。

柳界展望

編集部

★第4回NHK学園全国川柳大会が**10月14日**、東京銀座ガスホールで開かれ、本社関係から次の4氏が特選と秀作に選ばれた。

・川柳大会大賞（特選）

恵まれた鬼　人間の顔が欲し　山本希久子

・特　選

その上を狙う男の綱渡り　山田　高夫

川のない橋は渇きを癒やせない　三宅　保州

・秀　作

秋桜　多くの友に恵まれる　奥田みつ子

★第17回堺まつり協賛・堺市民川柳大会は**10月14日**、堺勤労会館で開かれ、本社関係から次の4氏が秀句賞を獲得した。

壁の向こうに想いを馳せている帽子　後藤　正子

負け惜しみ阿呆の上塗りするように　高田　星子

半分はわたしが使うから稼ぐ　河内　月子

生きるとはこんな日もある風の中　田中　正坊

★岸和田市文化祭参加・第40回市民川柳大会が**10月21日**、同市民会館で53名が参加して開かれ、本社関係から次の3氏が秀句賞に選ばれた。

スペアキー錆びて別れだなと思う　三宅　保州

ベテランは近い道など歩かない　小出　智子

名人と呼ばれ手酌の席である　岩佐ダン吉

★第37回八尾市文化祭・市民川柳大会は、**10月21日**、八尾文化会館で開かれ、本社関係から次の3氏が秀句賞に輝いた。

自画像を画き直しても母に似る　池　森子

一粒の砂の重さを知る駱駝　春城武庫坊

八本が邪魔にならない蛸の足　宮口　笛生

★富田林市民川柳大会は、**10月28日**、同市立中央公民館で開かれ、次の各氏が各題秀吟賞を獲得した。

手ぶらでも帰れば喜ぶ母がいる　橋本　弘美

赤とんぼ追いかけているランドセル　田中　透太

無人駅　人に逢いたい月見草　長谷川春蘭

しぶ柿は情けに触れてから熟れる　池　森子

人の不幸聞くと元気が湧いてくる　西出　楓楽

妥協案残す短い杭を打つ　岩本雀踊子

★西宮市民文化祭協賛川柳大会が**10月28日**、同市立勤労会館で開かれ、春城年代さんの次の句が兼題「微妙」で天位に選ばれた。

秋茄子の色の微妙さ愛される

★寝屋川市民川柳大会は**11月3日**、同市立総合センターで開かれ、兼題「走る」で本社同人の西出楓楽さんの次の句が秀句に選ばれた。

やみくもに走るあしたが見えるまで

★ふれあいの祭典ひょうご90「川柳祭」発表大会は、**11月3日**、290人が参加して姫路市の花の北市民広場大ホールで開かれ、本社関係から次の5氏が秀句賞を獲得した。

・兵庫県議会議長賞

あとの祭りの笛をひとりで吹いている　八木千代

・兵庫県教育委員会賞

母と娘が逢う約束の祭りくる　土橋　螢

・姫路市議会議長賞

岐路に立つ男は賽を振りたがる　三宅　保州

・姫路市教育委員会賞

約束のまだ果せない祭笛　西口いわゑ

〈当日出句〉

哀しみを移す寝返り打ちながら　八木　千代

風を手操れば父の椅子が届く　林　荒介

★番傘川柳本社では12月で山本翠公編集長が辞任し、後任に田頭良子幹事が就任した。

新同人紹介

坊農柳弘（ぼうのりゅうこう）

―敏・比呂志推薦

★第30回和歌山城観月句会入賞者の表彰式が**11月8日**和歌山市庁で行われ、第1位の市長賞に

草笛を吹くとあなたが近くなる　杉山　精子

が選ばれたほか、2位に牛尾緑良、3位に中村静子、4位に山川克子、5位に青枝鉄治の各氏が入賞した。

★NHK学園川柳広島大会は、**平成3年1月27日**、広島市中央公民館で開催される。宿題（事前投句）は、豊か＝石原伯峯▽調べる＝三浦宏▽音＝大森風来子で席題選者は堀口北斗・定本広文の2氏。事前投句（各2句）の締切は**1月5日**、投句料は1600円、投句先は〒186－01　東京都国立市富士見台2－36・NHK学園川柳広島大会事務局

また、同近畿大会は**2月16日**、兵庫県芦屋市ラポルテホール、同四国大会は**3月10日**、高松市で開催。

★第40回西大寺会陽川柳大会は**平成3年2月24日**午前9時から西大寺市民会館で開催。兼題・選者は第1部（投句）は、会う＝大森風来子・陽気＝水粉千翁・裸＝田中好啓、第2部（投句拝辞）は、四十＝去来川去城・重い＝土居哲秋・卍＝大西泰世・もしも＝河内天笑・きりとり線＝寺尾百合子・裁く＝堤春子・カタカナ＝林荒介・旅人＝寺尾俊平、特別席題1題（各題とも2句）。会費2000円、投句料500円、投句先は岡山市金岡東町3－4－16山口流木方、西大寺川柳社

★大阪市交通局互助組合文化部では**平成3年3月3日**府立労働センターで「川柳大阪」50周年記念川柳大会を開くこととなり、準備を進めている。兼題と選者は信号＝奥山晴生▽テレビ＝河内天笑▽満員＝海士天樹▽情熱＝森中恵美子▽のびる＝橘高薫風（一部交渉中）なお、記念事業の一環として**2月**末締切で大阪に関する句を一般募集することとしている。

▼同人消息▲

■NHK学園川柳講座会誌『川柳春秋』19号の〝一人50句〟に西田柳宏子氏（本社副理事長）の「小さなくらし」、田中正坊氏（常任理事）の「万年青の実」が掲載され、川柳添削教室に高杉鬼遊氏（常任理事）が「百人百句百色が川柳」と題して執筆している。

■小出智子さん（本社常任理事）の自選作品が『川柳展望』63号に「百句集／小出智子」として掲載されている。

■東野大八氏（本社相談役）は『川柳しなの』10月号に〝木鶏雑記〟として「メニエール氏の憂うつ」のほか四頁にわたって四話を執筆している。

■直原玉青先生が指導する第29回青玲社日本画展が10月23日から25日まで大阪美術倶楽部で開かれ、会員の中島小石さん（本社同人）の「華」、岸本豊平次さん（同・操嶺）の「緑陰」と題する作品が展示された。

■大塚節子さん（同人・藤間志緑）は10月27日、新歌舞伎座で開かれた第1回名流舞踊会で清元「北州」に出演した。

▽訂　正△

■**9月号**・35P上段8行目の「樽の水」は「**蹲**の水」の誤り、また、表紙3記載の本社句会会場への交通便のうち、地下鉄出口の「2番」は「**3**番」に変更、苗香の花の1月号からの選者は**小出智子**ですので、訂正いたします。（**編集部**）

川柳東大阪	22日（土）午後6時から ひげ・恩・忙しい・天使	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23　桑原喜風 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
はびきの市民会川柳	23日（日）午後1時から 漫画・さようなら・マスク・マスコミ	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏

★特に記載がない場合　句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内

原稿送り先（締切・毎月20日　予め決定している場合は何か月分でも結構です）

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号　宮園射月芳

12月各地句会案内

	日／時および題	会場と投句先
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 楽し・流れ・自由吟	サンシビック尼崎　阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号　田淵定人 句会費 300円　投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 屑・絵・師走	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
堺川柳会	9日(日)午後1時から 小指・困る・越える・腰	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2−9−2　河内天笑
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 窓・招く・マグマ	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14　野村太茂津
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 幻・しとやか・触れる・自由吟	西宮市中央公民館　阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9−4　西口いわゑ 句会費 300円　投句料 62円切手4枚
八尾市民 川柳会	11日(火)午後6時から 意地・わずか・風向き・希望	八尾市立労働会館(山本)　近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1−15　宮崎シマ子
京都 塔の会	14日(金)午後1時から 信心・首・納める	京都府南労働セツルメント　近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1　松川杜的 句会費 350円　投句料 62円切手3枚
川柳 ねやがわ	16日(日)　正午から 来年・残る・話題・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6−9　高田博泉 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 音・扱う・運命・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5−801　田中正坊
南大阪 川柳会	19日(水)午後6時から 別・珍しい・絵馬・練習	寺田町高松会館　JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1−5−2　金井文秋 句会費 500円　投句料 62円切手3枚
富柳会	20日(木)午後1時から 理屈・良妻・リンゴ	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4−1　池森子
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)　正午から 間違い・陳列・退院・自由吟	高槻市民会館306号室　阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1−7−7−905　福盛京童 句会費 500円　投句料 62円切手3枚　**各題2句**
岸和田 川柳会	20日(木)午後6時から 固い・ぽつぽつ・咳・溜息	岸和田市立福祉総合センター-- 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7−36　植山武助
南海 川柳会	21日(金)午後6時から 焚火・隙間・枯野・厳しい	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15−18　寺井東雲

編集後記

☆十二月と言うと東大和の安騎野で毎年行われる「かぎろい」を見る会があり、全国から万葉愛好家が集まる。これは、旧暦十一月十七日の早朝、人麻呂の歌

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えて、かへり見すれば月傾きぬ

にあやかったもので、かぎろいは寒い晴れた朝、太陽の昇る前に東の空が光の曲折により下から赤橙黄緑青藍と色づくもので、月齢十七日の西の空にはまだ月が煌々と残っていたと言うのである。

☆先頃、『毎日新聞』の余滴に「信」について書かれていた。私は路郎先生の

古くとも僕には仁義礼智信

の句と中島生々庵先生の

生き甲斐は男同士が信じ合い

が思い出された。辞書によれば「信」とは、嘘を言わないこと、疑わないこと、とある。今の政治家に少し考えていただきたい。

☆先日、青玲社の南画展に行った時、直原玉青先生が淡路の国清庵に来春、生々庵の句碑を建立されることを知った。生々庵、玉青両先生の「信」のつながりをしみじみと感じさせられた。

☆日本シリーズは四勝零敗で西武が巨人を降して日本一の王座についた。去年は近鉄が三連勝の後、誰だったかが巨人打線はロッテ以下だと言ったことが巨人を奮いたたせ、その後、四連敗したのだが、今年は西武の各選手は驕ることなく、それぞれ自分のなすべきことをきちんとつとめていたのが印象的だった。

☆川柳塔は他社から見ると家族的で穏やかだと言われているが、裏を返せば覇気がないということにつながるのかも知れない。平成三年からは役員を一新し、若い方々にバトンタッチすることにした。（萬）

▼屋敷伸之（やしき・のぶゆき）は、初めて聞く名前である。それも道理で、将棋音痴にとって、中原誠まで知っている程度である。実はこの八月にその中原誠を破って新棋聖になった弱冠十八歳のその人である。多くの業界で若返りを期待念願しているが、将棋界の時代交替は「チャイルドブランド」と呼ぶ、十九歳の羽生善治竜王を筆頭に若手俊英の台頭ぶりには目を見張るものがある。

▼そのことについて「ぼくたち若手が強い理由は、基本的には将棋の情報量が多いこと。ぼくも四つの研究グループに参加して勉強しています」と、屋敷棋聖はいう。プロとアマの違いはあるが、何か一つの道を究めるには互いに切磋琢磨する水面下の努力が如何に必要であるかが想像できる。器用や才能だけには、おのずから限界がある。これは将棋界だけでなく、川柳界でこそ心すべきだと思う。

▼川柳の小集句会や例会は夜店、昼店のように、毎夜毎日どこかで催されているが、そのどれもが似たり寄ったりで「研究グループ」といった存在からはるかに遠い。一人一人の勉強も大切だが、お互いに情報交換する場を持ちたいものだ。指導者がいてもいなくても志ある者が、ホンネで議論することは個人の勉強にとどまらず、柳界の明日につながる大事である。（き）

★今年最後の「編集後記」を書くこととなった。毎号百頁前後の限られた紙幅にできるだけ多彩な内容を盛りこむために、いくつかの新企画を試みた。女性の頁「ひみこさろん」の新設、「各地句会だより」の復活、「句評リレー」の定期化、二回にわたる「同人アンケート」と「花百句」「四季百句」、「川柳こぼれ話」の掲載などである。

★ひとりよがりに終ったものがあるかも知れないし、それよりもこんな企画をというご意見もあるだろう。良いアイデアをどしどし編集部に寄せていただきたいと思う。採否はおまかせ願うとして、ご投稿も歓迎する。十一月から編集長に選任され、新しい編集スタッフも決まった。紙数もないので、これについては新年号にゆずりたい。（正）

本社12月句会

日時　12月7日（金）午後5時半
会場　メンズファッションセンター3階
中央区内本町1—1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点西南角

おはなし　榎本吐来
兼題　「無理」　河内月子選
「からっぽ」　塩満敏選
「うるさい」　玉置重人選
「疲れる」　金井文秋選
「腹」　西尾栞選

席題　1題　当日発表　各題2句以内
会費　500円
投句　柳箋（4cm×19cm）1葉に1句を書き、投句料310円（62円切手5枚）同封のこと

本社1月句会　7日（月）

兼題　「弓」「喜ぶ」「名刺」「バランス」「努力」

作品募集

2月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
銀河系（3句）河内天笑選
茴香の花（3句）小出智子選

課題吟（3句）
「豆」　藤井明朗選
「散る」　芳地狸村選
「運動」　木木朱夏選

初歩教室「冷える」（3句）辻白渓子担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

3月号課題吟「紅」「愛」「美」

同人費・誌代などのご送金は、すべて川柳塔社事務所へお願いします。
所在地は下記奥付のとおり
振替口座　大阪　8—33368
誌代　半年分 3,800円（送料共）
1年分 7,500円（送料共）

NHK川柳作品募集

課題「数字」　森中恵美子選
ハガキに3句　12月10日締切
投句先　大阪市中央区馬場町3—43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表　12月23日（日）ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「漫画」　森中恵美子選
ハガキに3句　12月15日締切
投句先
〒540　大阪市中央区谷町2丁目2—20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送　川柳係

定価　六百円（送料51円）
平成二年十一月二十五日印刷
平成二年十二月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）625—六九一四番
振替口座大阪8—三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二年十一月二十五日 印刷
平成二年十二月一日発行（毎月一回発行）
創刊大正十三年 通巻七六三号 川柳落 十二月号
定価 六百円（送料 五十円）

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

代表者 大 矢 喜 一

豊 津 店
〒564 吹田市泉町5丁目11—14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店
〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

Pierre Parchen

Daniel Moushell

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

SUPER OSK

オーエスケーの
紳 士 服

株式会社 オーエスケー
〒540 大阪市中央区南新町1—4—7
(06) 941—8018

雑誌 05703—12